

大塚遺跡 8

- 第18次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1255集

2015

福岡市教育委員会

OO TSUKA I SEKI
大塚遺跡 8

- 第18次調査報告 -

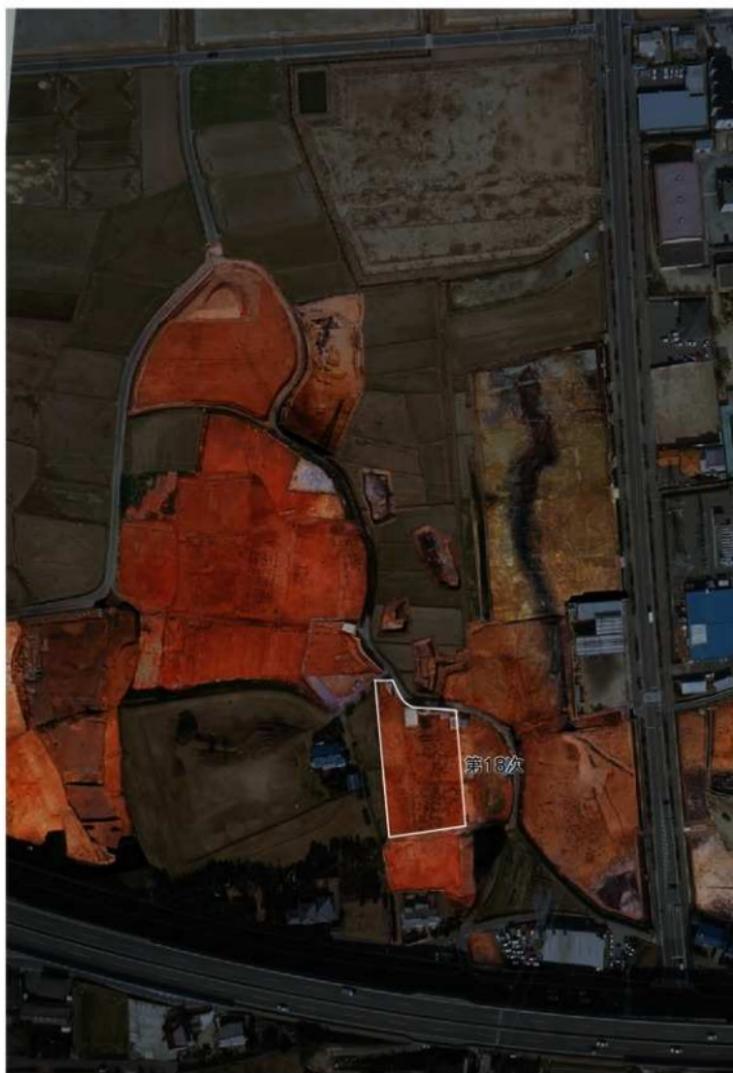
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1255集



遺跡略号 OTS-18
調査番号 1117

2015

福岡市教育委員会



大塚遺跡周辺調査区航空写真

＊デジタル合成写真

＊上が北



(1) 18次調査区全景 (上空から)

※上が北



(2) 18次調査区全景 (東側上空から)

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの責務であります。また、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であります。そのため、本市教育委員会では事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、本市の伊都土地地区画整理事業に伴い調査を実施した大塚遺跡第18次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、主に弥生時代後期の集落や戦国期の屋敷跡を確認すると共に、当時の生活用具が多数出土しました。これらは、当時の今宿地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、本市住宅都市局伊都地区画整理事務所をはじめとする数多くの関係者のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が伊都土地区画整理事業に伴い、福岡市西区今宿町 312-4 他において発掘調査を実施した大塚遺跡第 18 次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、本市の令達事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣・梅野眞澄・瀬戸啓治・辻節子が行い、中井歩・梶原慎司・萩原高樹（以上九州大学学生）、池田拓（福岡大学学生）の協力を得た。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、榎本・米倉法子が行った。
6. 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、榎本が行い、空中写真撮影およびデジタルモザイク合成は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、榎本・米倉が行った。
8. 本書に掲載した国土座標値は、日本測地系（第Ⅱ座標系）によるものである。
9. 本書で用いた方位は座標北で、真北より $0^{\circ} 18'$ 西偏する。
10. 遺構の呼称は、掘立柱建物を SB、竪穴住居を SC、土坑・土壙墓を SK、溝を SD、ピットを SP、谷を SX と略号化した。
11. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
12. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
13. 本書の執筆および編集は、榎本が行った。

遺 跡 名	大塚遺跡	調 査 次 数	第 18 次	遺 跡 略 号	OTS-18
調 査 番 号	1117	分 布 地 図 図 幅 名	今 宿 112	遺 跡 登 録 番 号	020625
申 請 地 面 積	1,304,000.0㎡	調 査 対 象 面 積	2,051.0㎡	調 査 面 積	1,968.0㎡
調 査 地	福岡市西区今宿町 311-1・5、312-3・4・7、313			事 前 審 査 番 号	8 - 1 - 77
調 査 期 間	平成23(2011)年7月25日～平成24(2012)年6月7日				

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	7
1. 概要	7
2. 遺構と遺物	7
1) 掘立柱建物(SB)	8
2) 竪穴住居(SC)	17
3) 土坑・土壘墓(SK)	23
4) 溝(SD)	28
5) 谷(SX)	33
6) その他の遺物	67
3. 結語	69

挿 図 目 次

第1図	大塚遺跡位置図 (1/25,000)	3
第2図	伊都土地区画整理事業地内調査区位置図 (1/10,000)	4
第3図	調査区位置図 (1/1,500)	6
第4図	調査区全体図 (1/200)	(折り込み)
第5図	SB005実測図 (1/60)	8
第6図	SB006実測図 (1/60)	9
第7図	SB036・037実測図 (1/60)	10
第8図	SB038実測図 (1/60) およびSB037・038・039 出土遺物実測図 (1/1、1/4)	11
第9図	SB039実測図 (1/60)	12
第10図	SB040・041実測図 (1/60)	13
第11図	SB042・043実測図 (1/60)	15
第12図	SB044・046実測図 (1/60)	16
第13図	SB045実測図 (1/60)	17
第14図	SB047実測図 (1/60)	18
第15図	SC012実測図 (1/40、1/60)	19
第16図	SC012・014・017・018出土遺物実測図 (1/4)	20
第17図	SC014・017実測図 (1/40、1/60)	21
第18図	SC018・032・033実測図 (1/60)	22
第19図	SK003・010・016・027・028実測図 (1/30、1/40)	24
第20図	SK010・016・027出土遺物実測図 (1/4)	25
第21図	SK029実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)	26
第22図	SK030・031・035・258実測図 (1/40)	27
第23図	SK030・031出土遺物実測図 (1/4)	28
第24図	SD001・002・004・007・008・019・022実測図 (1/40)	29
第25図	SD001・008・019・022出土遺物実測図 (1/3、1/4)	30
第26図	SD024・025・026・034実測図 (1/40) およびSD024・026・034出土遺物実測図 (1/4)	31
第27図	SX011実測図 (1/60)	32
第28図	SX011出土遺物実測図 (1) (1/1、1/4)	33
第29図	SX011出土遺物実測図 (2) (1/4)	34
第30図	SX011出土遺物実測図 (3) (1/1、1/3、1/4)	35
第31図	SX011出土遺物実測図 (4) (1/1、1/3、1/4)	36
第32図	SX011出土遺物実測図 (5) (1/4、1/6)	38
第33図	SX011出土遺物実測図 (6) (1/3、1/4)	39
第34図	SX011出土遺物実測図 (7) (1/3、1/4)	40
第35図	SX011出土遺物実測図 (8) (1/4)	41
第36図	SX011出土遺物実測図 (9) (1/4、1/10)	42
第37図	SX011出土遺物実測図 (10) (1/4)	43
第38図	SX011出土遺物実測図 (11) (1/4)	44
第39図	SX011出土遺物実測図 (12) (1/4)	45

第40図	SX011出土遺物実測図 (13) (1/4)	47
第41図	SX011出土遺物実測図 (14) (1/4)	48
第42図	SX011出土遺物実測図 (15) (1/1、1/3、1/4)	49
第43図	SX011出土遺物実測図 (16) (1/4)	50
第44図	SX011出土遺物実測図 (17) (1/4、1/6)	51
第45図	SX011出土遺物実測図 (18) (1/4、1/6)	52
第46図	SX011出土遺物実測図 (19) (1/4、1/6)	54
第47図	SX011出土遺物実測図 (20) (1/4)	55
第48図	SX011出土遺物実測図 (21) (1/4)	56
第49図	SX011出土遺物実測図 (22) (1/4)	57
第50図	SX011出土遺物実測図 (23) (1/4)	58
第51図	SX011出土遺物実測図 (24) (1/4)	60
第52図	SX011出土遺物実測図 (25) (1/4)	61
第53図	SX011出土遺物実測図 (26) (1/4)	62
第54図	SX011出土遺物実測図 (27) (1/3、1/4)	63
第55図	SX011出土遺物実測図 (28) (1/4)	65
第56図	SX011出土遺物実測図 (29) (1/3、1/4)	66
第57図	ビットおよび遺構検出時出土遺物実測図 (1/3、1/4)	68

表 目 次

第1表	伊都土地区画整理事業地内調査一覧表	5
-----	-------------------	---

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 大塚遺跡周辺調査区航空写真
- 巻頭図版 2 (1)第18次調査区全景(上空から) (2)第18次調査区全景(東側上空から)
- 図 版 1 (1)第18次調査区全景(上空から) (2)第18次調査区北側全景(上空から)
(3)第18次調査区南側全景(上空から)
- 図 版 2 (1)SB005(南から) (2)SB006(南から)
(3)SB036・037(東から) (4)SB038・039(東から)
(5)SB040・041(東から) (6)SB042(東から)
- 図 版 3 (1)SB043(東から) (2)SB044(東から)
(3)SB045(南から) (4)SB046(南から)
(5)SC012全体(東から) (6)SC012竪穴住居(東から)
- 図 版 4 (1)SC012d-d'土層(北西から) (2)SC014(南から)
(3)SC014内P1(北から) (4)SC017全体(東から)
(5)SC017竪穴住居(南から) (6)SC017b-b'土層(東から)
- 図 版 5 (1)SC018(南西から) (2)SC018内P1土層(東から)
(3)SC032・033(東から) (4)SK003(南から)
(5)SK010(西から) (6)SK016(東から)
- 図 版 6 (1)SK027(北東から) (2)SK028(西から)
(3)SK028土層(北から) (4)SK029(北西から)
(5)SK029遺物出土状況(1)(北西から) (6)SK029遺物出土状況(2)(北東から)
- 図 版 7 (1)SK030(北から) (2)SK031(北から)
(3)SK035(北から) (4)SK035土層(北から)
(5)SD001A-A'土層(南西から) (6)SD002B-B'土層(南西から)
- 図 版 8 (1)SD004(南東から) (2)SD007(南から)
(3)SD007D-D'土層(東から) (4)SD007F-F'土層(北から)
(5)SD008北半部(南から) (6)SD008南半部(南から)
- 図 版 9 (1)SD008H-H'土層(北から) (2)SD008I-I'土層(北から)
(3)SD019L-L'土層(南東から) (4)SD022(西から)
(5)SD022M-M'土層(東から) (6)SD024・025・026(南東から)
- 図 版10 (1)SD024・025・026N-N'土層(東から) (2)SD024・025・026O-O'土層(南西から)
(3)SD034(東から) (4)SD034P-P'土層(東から)
(5)SX011北半部(南から) (6)SX011Q-Q'土層(北から)
- 図 版11 出土遺物(1)
- 図 版12 出土遺物(2)
- 図 版13 出土遺物(3)
- 図 版14 出土遺物(4)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成8(1996)年11月8日付、伊区第8号にて福岡都市整備局(現住宅都市局)伊都区画整理事務所計画課長より同市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長宛に西区今宿町、大字女原、大字徳永地内における「福岡都市計画事業 伊都土地地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼がなされた。同事業は、本市西部の新たな拠点として位置付けられている同地域130.4haを対象に都市基盤や交通結節機能の整備、良好な住宅地の供給を目的として計画的な市街地整備を推進するもので、平成8年10月14日に都市計画決定(平成13年10月5日に都市計画変更)、平成9年9月18日に事業計画決定(平成23年7月21日に事業計画変更)がなされた。また、事業の施工は平成9年度に始まり、同26年度末に終了予定である。

この依頼を受けて同課では、事業地内の南側丘陵裾部には今宿五郎江遺跡や大塚遺跡等の複数の周知の埋蔵文化財包蔵地が存在することや広範な地内に未周知の包蔵地が存在する可能性があること等から事業地全域での試掘調査が必要であると判断し、平成8年12月から翌平成9年3月に収穫の終了した田畑を主な対象地として計68箇所でのトレンチによる試掘調査を実施した。

その結果、事業地北側の砂丘後背地では埋蔵文化財は確認できなかったが、従来の包蔵地範囲である南側丘陵部や丘陵間の谷部沖積地で埋蔵文化財の分布を確認できた。なお、この試掘調査の対象が事業地の約2/3のうち宅地等を除いた田畑であったことから、今回の対象範囲外や埋蔵文化財分布確認地域での詳細な範囲については、事業者による用地交渉や建物移転等の状況を把握しながら、随時試掘調査を追加実施し、確認を進めていくこととなった。この試掘は本調査と併行しながら、平成24年7月まで継続した。また、事業者との協議の結果、事業地内で埋蔵文化財が確認された場合、道路や水路等の構造物設置箇所に加え、換地後の地権者の不公平を解消するため宅地部分についても造成のあり方を問わず記録保存のための本調査を実施することとなった。なお、同事業関係の埋蔵文化財本調査は平成14年12月の今宿五郎江遺跡第8次調査にて開始し、平成24年12月の大塚遺跡第22次調査をもって完了した。

今回報告する大塚遺跡第18次調査は、平成24年4月5・6日に実施した試掘調査の成果を受けて本調査を要すると判断したもので、発掘調査は平成23年7月から平成24年6月まで、整理・報告書作成は平成26年度に実施した。なお、これらにかかる費用は事業主体である住宅都市局が負担した。

2. 調査の組織

調査委託：福岡市住宅都市局 伊都区画整理事務所

調査主体：福岡市教育委員会

(発掘調査：平成23・24年度、整理・報告書作成：平成26年度)

調査総括：	文化財部 埋蔵文化財調査第2課	課長	田中壽夫 (23年度)
	文化財部 埋蔵文化財調査課		宮井善朗 (24年度)
調査庶務：	同部 埋蔵文化財第1課	課長	常松幹雄 (26年度)
			菅波正人 (23・24年度)
	同部 埋蔵文化財審査課		榎本義嗣 (26年度)
			濱石哲也 (23年度)
		管理係長	米倉秀紀 (24・26年度)
		管理係長	和田安之 (23・24年度)
事前審査：	同部 埋蔵文化財第1課	課長	内山広司 (26年度)
			古賀とも子 (23・24年度)
	同部 埋蔵文化財審査課		川村啓子 (26年度)
			濱石哲也 (23年度)
		事前審査係長	米倉秀紀 (24・26年度)
		宮井善朗 (23年度)	
		加藤良彦 (24年度)	
		佐藤一郎 (26年度)	
調査担当：	同部 埋蔵文化財第2課 (23年度)	主任文化財主事	今井隆博 (23・24年度)
			福岡美由紀 (26年度)
整理作業：	大淵悦子 木本恵利子 松尾真澄		榎本義嗣 (26年度は調査第2係長)

なお、文化財部は組織改編のため、平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

II. 遺跡の立地と環境

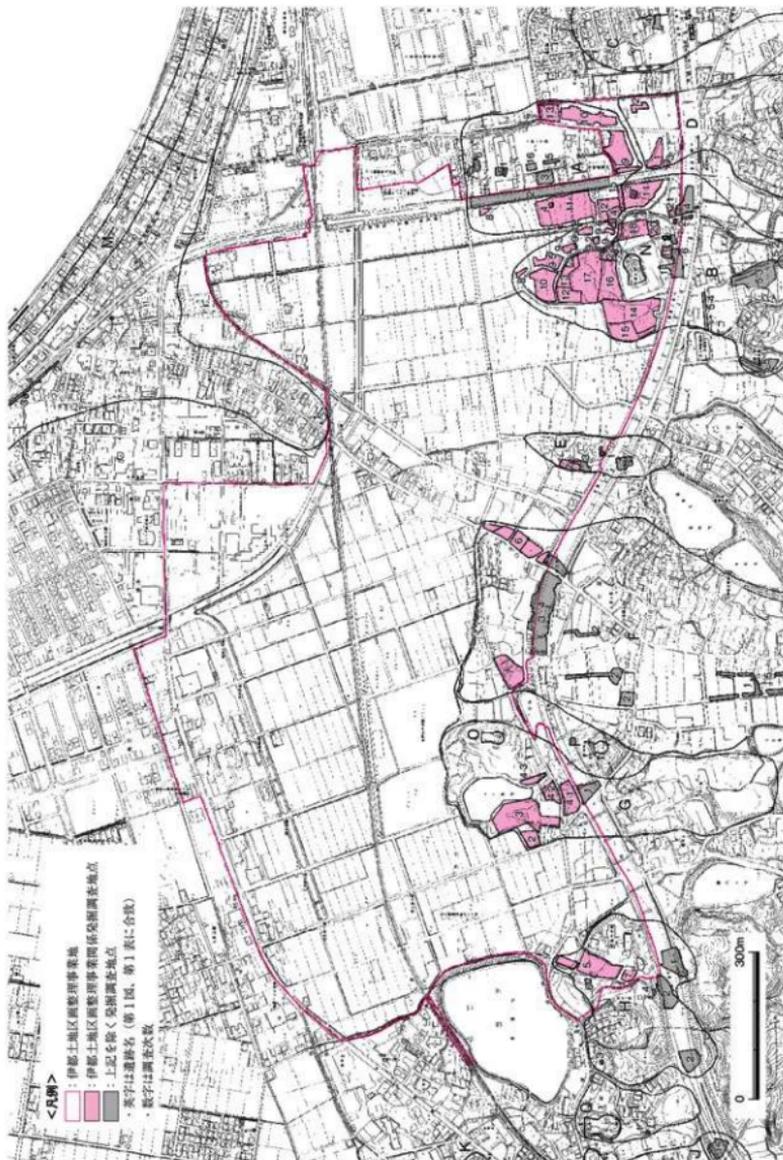
支界灘に北面し、背後に背振・三郡山系をひかえる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、東側から粕屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。今回報告する大塚遺跡は、このうち西部の今宿平野に位置する。東西約3km、南北約2kmの同平野の南側には高祖山の山塊がひかえ、東側には背振山系から北側に派生する叶岳・長垂山塊が延びて、東側の早良平野と画される。また、北側は今津湾に沿って長垂山の西側から今山の南東部に砂丘が弧状に発達する。その南側の後背地はかつて端梅寺川河口に湾入する内海の東側にあたり、潟湖が広がっていた。この平野の東部には高祖山と叶岳の間に扇状地形が発達し、その中央部を鯉川が北流する。また、西部は潟湖に面して高祖山山麓から北側に向かって低丘陵が八手状に派生し、丘陵間には狭隘な谷が開析する。なお、平野北側から北西側に広がっていた内海や潟湖は沖積地化と近世の干拓事業によって水田化が進められてきた。

今回の調査要因である伊都土地区画整理事業地の範囲は、平野の中央部から西側に位置し、北部の大半は潟湖であった砂丘後背地を多く含むものの、南側は高祖山山麓の丘陵と谷部を占める。後者では事業地の東から谷遺跡、今宿五郎江遺跡、今回報告の大塚遺跡、女原笠掛遺跡、女原遺跡、徳永B遺跡、徳永A遺跡の各遺跡が主に丘陵上に展開する。また、この丘陵端部付近には、「今宿古墳群」として国史跡に指定されている前方後円墳が古墳し、西側の徳永B遺跡の北東丘陵端部には若八幡宮古墳に次ぐ首長系譜にある山ノ鼻1号墳が、東側の大塚遺跡の丘陵頂部には6世紀初頭から前半に築造された大塚古墳が所在する(第2図)。また、第1表のとおり、これら事業地内では平成14(2002)年度から平成24(2012)年度にかけて同事業関係の発掘調査を7遺跡35地点で実施し、その面積は約67,000㎡におよぶ。詳細は各報告書に述べたいが、ここでは、今回報告する大塚遺跡を中心として調査成果を概観しておきたい(第2・3図)。

大塚遺跡は、砂丘後背地に向かって北側に延びる低位段丘上に位置する。北側は潟湖に面し、東側には第9次や今回報告の第18次で確認されている比較的大きな南北方向の谷部を挟み、一段低い段丘上に今宿五郎江遺跡が展開する。なお、同遺跡では、南北270m、東西200mを測る環濠が弥生時代後期初頭に掘削され、環濠集落を中心に対外交流を物語る列島内外の遺物が数多く出土している。大塚遺跡の調査はこれまでに22次を数え、その大半は遺跡の北側部分を対象とした今回の区画整理事業に伴うものである。今宿五郎江遺跡の環濠が埋没する弥生時代終末期前後に環濠の外側にあたる大塚遺跡に集落が形成され、第11・14・15・16・18次で竪穴住居や掘立柱建物、溝等が検出されているが、古墳時代前期以降には継続しない。なお、特筆すべきは、第14・15次で確認した終末期の鍛冶工房で、円形状の周溝に囲まれた竪穴内では鍛冶関連遺物が出土した他、列島最古に位置付けられる甕が検出されている。また、古墳時代では、先の第14・15次で朝鮮半島系土器を伴う中期の集落が確認されており、渡来人集団の存在を示唆する。古代では、遺跡の北端部の第10・12次で小規模な集落が見られる他、第14・15次の製錬炉や炭窯等の製鉄関連遺構が目目される。中世の前半期では、濃密ではないものの、北端近くの第9・13・16・17・18次で南北棟の掘立柱建物や埋葬遺構が散見し、古代から継続する小集落の存在が窺える。時期を隔てた中世後半期では、大塚古墳の西側を除く段丘上周囲の第6・7・13、16～20、22次において方形区画溝と掘立柱建物で構成される屋敷群が連続して展開することが判明している。現在のところその区画は20群以上におよびその規模は半町に満たないものが多いことから、いわゆる居館や城館とは言い難い。なお、散見する周防系の出土遺物は内氏や原田氏による領域支配を考察する上で興味深い。



第1図 大塚遺跡位置図 (1/25,000)



第2図 伊都土地地区画整理事業区内調査区位置図 (1/10,000)

A 今宿五郎江遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文 献
1次	8496	1984.8.29 - 1984.9.25	校舎	261.0 m ²	弥生・古墳・中世	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 132頁 1986年
2次	8497	1984.11.1 - 1985.3.31	福岡空軍航空団	6,000.0 m ²	弥生・中世・後期・中世	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 238頁 1991年
3次	8728	1987.9.10 - 1987.11.26	松浦署	90.0 m ²	弥生・中世・後期	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 118頁 2013年
4次	9253	1992.2.8 - 1992.2.20	廃校舎	81.0 m ²	弥生・中世	『今宿五郎江遺跡』 熊本大学『大洲の遺跡』 福岡市 479頁 1996年
5次	9355	2000.12.19 - 2001.1.31	プール	1,900.0 m ²	弥生・中世・後期・中世	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 72頁 2003年
6次	9124	2001.9.12 - 2001.10.16	同様に中世	385.0 m ²	弥生・中世	『今宿五郎江遺跡』 Vol.16 福岡市 2003年
7次	9158	2002.2.18 - 2002.3.4	同様に中世	385.0 m ²	弥生・中世	『今宿五郎江遺跡』 Vol.16 福岡市 2003年
8次	9254	2002.12.22 - 2003.1.8	伊都地区整理	297.0 m ²	弥生・中世	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 872頁 2006年
9次	9255	2002.12.22 - 2003.3.31	伊都地区整理	3,520.0 m ²	弥生・中世・後期	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 872頁 2006年 『今宿五郎江遺跡』 福岡市 924頁 2006年
10次	9420	2004.5.24 - 2005.7.6	伊都地区整理	2,998.0 m ²	弥生・後期・平安	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 1009頁 2008年 『今宿五郎江遺跡』 福岡市 1117頁 2012年
11次	9531	2005.7.8 - 2006.12.9	伊都地区整理	6,900.0 m ²	弥生・後期	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 1181頁 2012年
12次	9665	2006.12.1 - 2007.3.9	伊都地区整理	1,340.0 m ²	弥生・中世・古墳初期	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 1066頁 2014年
13次	9718	2007.6.1 - 2007.10.29	伊都地区整理	8,300.0 m ²	弥生・中世・後期・古代	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 1109頁 2011年
14次	1062	2011.4.19 - 2011.7.13	伊都地区整理	8,342.0 m ²	弥生・時代後期	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 1182頁 2013年
15次	1121	2011.8.19 - 2011.11.7	伊都地区整理	4,000.0 m ²	弥生・時代後期	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 1183頁 2013年
16次	1290	2012.10.9 - 2012.10.25	校舎跡	203.0 m ²	弥生・時代	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 1222頁 2014年

B 大塚遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文 献
1次	7317	1974.1.18 - 1974.2.4	今宿ハイパス	1,300.0 m ²	中世	『今宿ハイパス関係調査文化財調査報告書 5』 福岡県 1977年
2次	7318	1974.1.28 - 1974.2.16	今宿ハイパス	96.0 m ²	弥生・後期	『今宿ハイパス関係調査文化財調査報告書 5』 福岡県 1977年
3次	8301	1982.2.1 - 1982.2.28	同様に中世	480.0 m ²	弥生・中世・古	『大塚遺跡』 福岡市 190頁 1996年
4次	8299	1982.4.28 - 1982.6.17	今宿ハイパス	20,800.0 m ²	弥生・後期・古墳前期・奈良	『今宿ハイパス関係調査文化財報告書 10』 福岡県 1984年
5次	8391	1983.1.17 - 1983.4.28	同様に中世	7,500.0 m ²	古墳前期	『景雲と景雲の遺跡』 『大洲古蹟』 福岡市 196頁 1986年
6次	8640	1986.9.21 - 1986.12.29	同様に中世	1,330.0 m ²	弥生・古	『大塚遺跡』 福岡市 224頁 1990年
7次	8944	1989.8.30 - 1989.9.26	同様に中世	133.7 m ²	中世	『大塚遺跡』 福岡市 256頁 1991年
8次	9328	2003.6.10 - 2003.6.30	伊都地区整理	317.0 m ²	古代	『大塚遺跡』 福岡市 1185頁 2013年
9次	9361	2004.11.7 - 2007.3.27	伊都地区整理	20,500.0 m ²	弥生・中世・後期・古墳前期	『大塚遺跡』 福岡市 1185頁 2013年
10次	9669	2006.12.8 - 2007.3.14	伊都地区整理	2,780.0 m ²	古代・後期	『大塚遺跡』 福岡市 1025頁 2009年
11次	9662	2007.2.1 - 2007.9.10	伊都地区整理	40,180.0 m ²	弥生・後期・終末期	『大塚遺跡』 福岡市 1185頁 2013年
12次	9792	2007.4.9 - 2007.5.7	伊都地区整理	880.0 m ²	古代・後期	『大塚遺跡』 福岡市 1025頁 2009年
13次	9715	2007.5.16 - 2007.7.4	伊都地区整理	12,780.0 m ²	弥生・中世・中世末	『大塚遺跡』 福岡市 1025頁 2009年
14次	9726	2007.7.12 - 2008.2.1	伊都地区整理	6,200.0 m ²	弥生・後期・古墳中期前半	『大塚遺跡』 福岡市 1111頁 2011年
15次	9769	2008.2.28 - 2008.5.8	伊都地区整理	18,300.0 m ²	古代・中世	『大塚遺跡』 福岡市 1111頁 2011年
16次	9866	2008.4.1 - 2008.8.18	伊都地区整理	20,950.0 m ²	弥生・後期・中世末	『大塚遺跡』 福岡市 1144頁 2012年
17次	9855	2009.1.13 - 2009.8.19	伊都地区整理	5,200.0 m ²	中世末	『大塚遺跡』 福岡市 1144頁 2012年
18次	1117	2011.7.25 - 2012.6.7	伊都地区整理	1,968.0 m ²	弥生・後期・終末期・中世後半	本報告
19次	1302	2011.4.4 - 2011.4.10	伊都地区整理	672.6 m ²	中世	『大塚遺跡』 福岡市 1223頁 2014年
20次	1216	2011.6.11 - 2011.8.30	伊都地区整理	6,180.0 m ²	中世後半～末	『大塚遺跡』 福岡市 1223頁 2014年
21次	1218	2012.9.3 - 2012.10.25	伊都地区整理	175.0 m ²	弥生・終末期・古墳終末期	『大塚遺跡』 福岡市 1223頁 2014年
22次	1219	2012.9.5 - 2012.9.28	伊都地区整理	580.2 m ²	弥生・後期・中世	『大塚遺跡』 福岡市 1223頁 2014年
		2012.11.5 - 2011.12.17				

D 谷津遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文 献
1次	9255	2002.12.26 - 2003.3.28	伊都地区整理	1,560.0 m ²	古墳前期	『今宿五郎江遺跡』 福岡市 872頁 2006年
2次	9512	2005.5.28 - 2005.7.6	伊都地区整理	4,220.0 m ²	弥生・後期・古墳前期	『谷津跡 3』 福岡市 1226頁 2014年
3次	9662	2009.3.2 - 2009.4.9	伊都地区整理	2,900.0 m ²	弥生・後期・古墳前期	『谷津跡 2 - 女塚遺跡』 福岡市 1151頁 2012年

E 女塚遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文 献
1次	7316	1974.2.4 - 1974.3.2	今宿ハイパス	1,300.0 m ²	弥生・中世	『今宿ハイパス関係調査文化財調査報告書 5』 福岡県 1977年
2次	1035	2011.1.13 - 2012.3.30	同様に中世	237.0 m ²	古代	『女塚遺跡』 福岡市 1238頁 2013年 『女塚遺跡 2』 福岡市 1243頁 2014年
3次	1304	2012.4.25 - 2012.12.26	同様に中世	2,128.0 m ²	古代	『女塚遺跡』 福岡市 1238頁 2013年 『女塚遺跡 2』 福岡市 1243頁 2014年

F 女塚跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文 献
1次	8517	1985.5.27 - 1985.8.12	同様に中世	3,000.0 m ²	古墳中期・後期・中世	『女塚跡』 福岡市 1953頁 2009年
2次	8626	1986.7.14 - 1986.9.4	同様に中世	2,270.0 m ²	古墳時代	『福岡市調査文化財報告書』 1986年 『福岡市 1988年』
3次	8660	1986.11.10 - 1987.3.31	今宿ハイパス	5,580.0 m ²	古墳時代・古代末・中世	『大塚遺跡』 福岡市 224頁 1990年
4次	8720	1987.7.1 - 1987.10.31	同様に中世	2,850.0 m ²	古墳中期・中世	『大塚遺跡』 福岡市 616頁 1999年
5次	9246	1992.10.7 - 1992.10.27	同様に中世	2,850.0 m ²	古墳中期・中世	『大塚遺跡』 福岡市 616頁 1999年
6次	9625	2006.6.11 - 2006.11.7	伊都地区整理	31,850.0 m ²	古墳中期・古墳時代・古代	『女塚跡』 福岡市 1010頁 2008年
7次	9520	2009.8.21 - 2009.11.9	伊都地区整理	2,400.0 m ²	古墳中期・中世	『谷津跡 2 - 女塚跡』 福岡市 1151頁 2012年

G 隼水日遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文 献
1次	8808	1988.4.10 - 1988.6.10	今宿ハイパス	1,280.0 m ²	中世	『隼水遺跡』 福岡市 242頁 1991年
2次	9750	2007.11.14 - 2008.2.25	伊都地区整理	682.5 m ²	彌文・中世・古墳中期	『隼水 B 2』 福岡市 1228頁 2014年
3次	9522	2009.9.7 - 2010.11.19	伊都地区整理	5,930.0 m ²	古墳時代・中世	『隼水日遺跡』 福岡市 1190頁 2013年
4次	1133	2011.11.15 - 2012.8.31	伊都地区整理	2,700.0 m ²	古墳時代・中世・古	『隼水 B 3』 福岡市 1229頁 2014年

H 隼水A遺跡

次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文 献
1次	8808	1988.4.10 - 1988.10.31	今宿ハイパス	17,100.0 m ²	中世	『隼水遺跡』 福岡市 242頁 1991年
2次	8846	1989.1.17 - 1989.3.31	今宿ハイパス	20,700.0 m ²	古墳時代	『隼水遺跡』 福岡市 306頁 1992年
3次	9354	1994.1.8 - 1994.2.12	同様に中世	1,000.0 m ²	古代	『今宿五郎江遺跡』 熊本大学『大洲の遺跡』 福岡市 479頁 1996年
4次	9552	1996.2.5 - 1996.3.28	今宿ハイパス	3,000.0 m ²	古墳時代・古代	『隼水』 福岡市 1227頁 2013年
5次	9832	2010.1.4 - 2011.4.1	伊都地区整理	12,800.0 m ²	古墳時代後期・古代	『隼水 A』 福岡市 1227頁 2013年
6次	1115	2012.12.11 - 2011.7.27	伊都地区整理	19,850.0 m ²	彌文・中世・古墳時代・古代	『隼水 A』 福岡市 1189頁 2013年
7次	1127	2011.9.20 - 2011.11.21	伊都地区整理	4,000.0 m ²	古墳時代・平安	『隼水 A』 福岡市 1227頁 2013年

N 大塚古墳

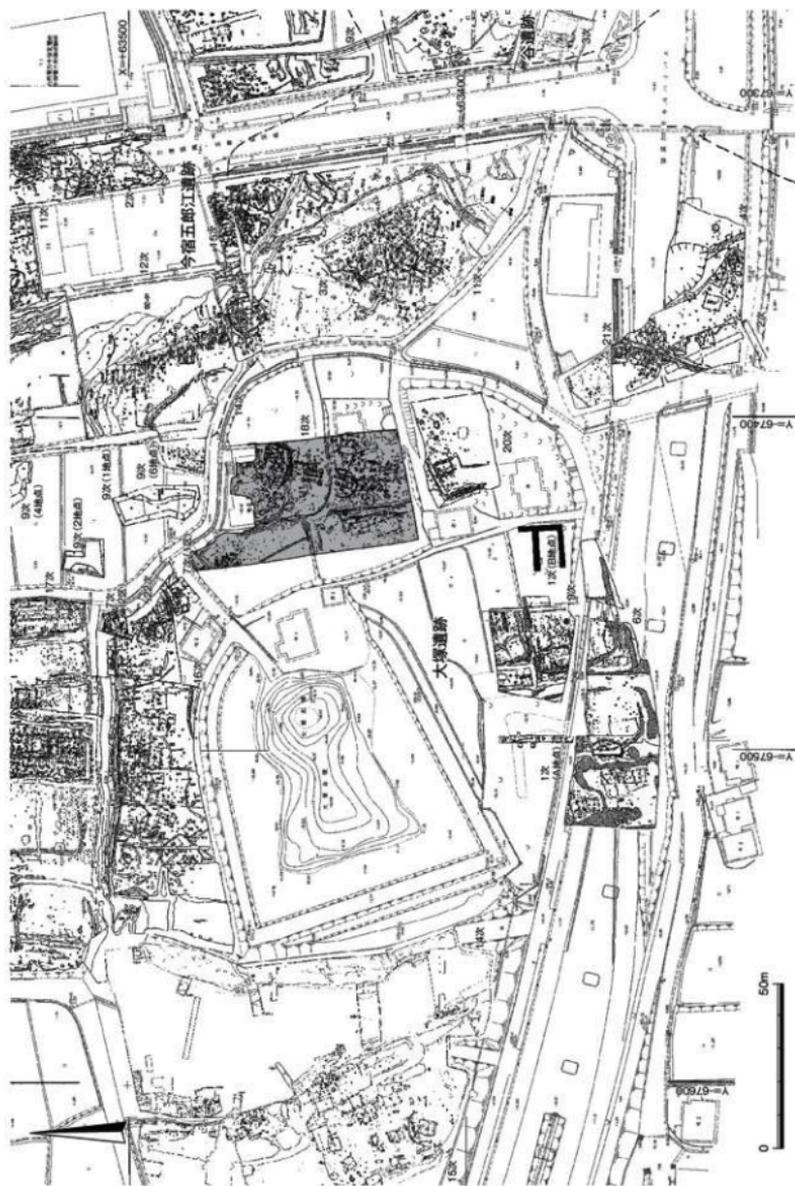
次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文 献
1次	2603	1977.2 - 1977.3	緑地調査	0 m ²	古墳後期	『福岡市野の歴史 歴史発掘とされた遺跡と遺物』 福岡市立歴史資料館 1977年

O 山ノ手1号墳

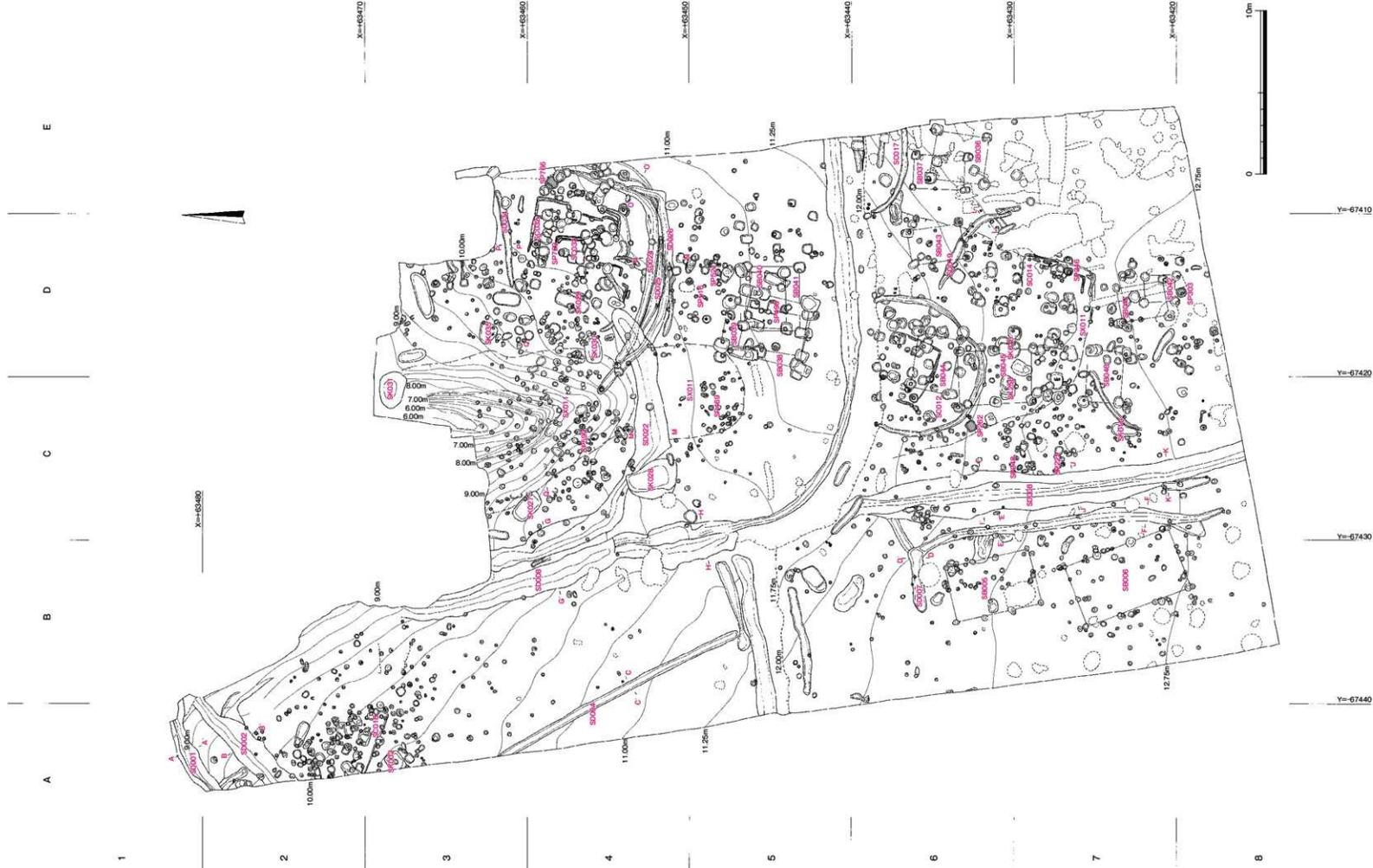
次数	調査番号	調査期間	調査原因	調査面積	主な遺構の時代	文 献
1次	8973	1990.2.13 - 1990.3.31	同様に中世	3,300.0 m ²	古墳前期	『山ノ手1号墳』 福岡市 309頁 1992年
2次	9660	1990.11.17 - 2000.2.23	同様に中世	363.0 m ²	古墳前期	『福岡市調査文化財調査報告書』 Vol.14 福岡市 201年

※ 2.10の内、伊都土地区画整理事業地内に所在する遺跡に限定した調査一覧である。

第1表 伊都土地区画整理事業地内調査一覧表



第3図 調査区位置図 (1/1,500)



第4図 調査区全体図 (1/200)

Ⅲ. 調査の記録

1. 概要

今回報告する大塚遺跡第18次調査区は、西区今宿町311-1・5、312-3・4・7、313に所在する。調査前の現況は家屋解体後の荒地で、南側で標高約130m、調査区はほぼ中央には造成に伴う東西方向の段落ちがあり、その北側では10.5m前後を測る。調査地点は、本遺跡の北西部に位置し、東接する今宿五郎江遺跡と併せて、周辺では調査が数多く実施されている。近接する調査区として、北側の道路を挟み第9次、南側には第20次がある。また、西側には6世紀前半代の墳丘全長約64mを測る前方後円墳、大塚古墳（国史跡 今宿古墳群）が占地する（第2・3図）。

「Ⅱ. 遺跡の立地と環境」でも触れたように本遺跡は、北側に向かって舌状に延びる低位段丘を主体に立地し、本調査区はその丘陵部東側斜面に立地する。調査区のほぼ中央部には後述する南北方向の谷（SX011）が開析し、その東側にはやせ尾根が延びるが、削平により調査区東端部では遺構密度が希薄である。また、谷部を挟んだ調査区西側は段丘部の広い東側緩斜面の一部となる。遺構面は先に述べた東西方向の段落ち部を除き、大半が表土直下で確認できた。その土質は段丘の基盤である花崗岩風化礫層で、調査区中央の谷部付近では（暗）黄褐色土もしくは黄橙色土を主体とし、東西両側では削平により風化礫を含む赤褐色土が露出する。遺構面の標高は調査区の南西端が最も高く標高128m、北西端で87m、北東端で86mを測る。なお、谷は調査区南端近くに谷頭があり、南側では浅く凹部をなす程度であるが、北側で急激に傾斜する。

遺構検出は、上述の遺構面および谷部の上面までを重機で剥ぎ取って実施した。検出した遺構は、弥生時代と中世に大別でき、前者では後期から終末期を主体とする掘立柱建物、竪穴住居、土坑、溝、後者では掘立柱建物、土坑、土壇墓、溝等が確認できた。また、谷（SX011）は弥生時代後期後半代から埋没を開始し、深い北側部分についても中世前半代には埋まってしまったことが出土物から判明した。なお、ほぼ平坦となった埋没後の上面では中世後半代の遺構が認められた。出土物量はコンテナケースにして247箱で、この内、200箱以上はSX011からの出土である。

発掘調査は、平成23（2011）年7月25日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りから開始し、併行して外構の設置やビニールシートによる遺構面の養生、トラバース測量を行った。表土剥ぎ取りの終了した8月2日より本格的な人力による調査に着手し、調査区の北西側から遺構検出を始めた。順次、検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、SX011の一部を除き大半の遺構掘削作業が終了した平成24年3月15日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。その後、SX011の最終掘削や図化、個別遺構写真撮影、片付け等を終え、6月7日に第18次調査を完了した。

調査対象面積は、2,051.0㎡であったが、すでに遺構が破壊されていると判断できた既存の駐車庫部分等を調査から除外したため、実際の調査面積は1,968.0㎡であった。なお、調査区の西側は大塚古墳を含む近隣公園として地下遺構を保存する地区である。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種類に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの重複はない。以下の報告にあたっては、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。

2. 遺構と遺物

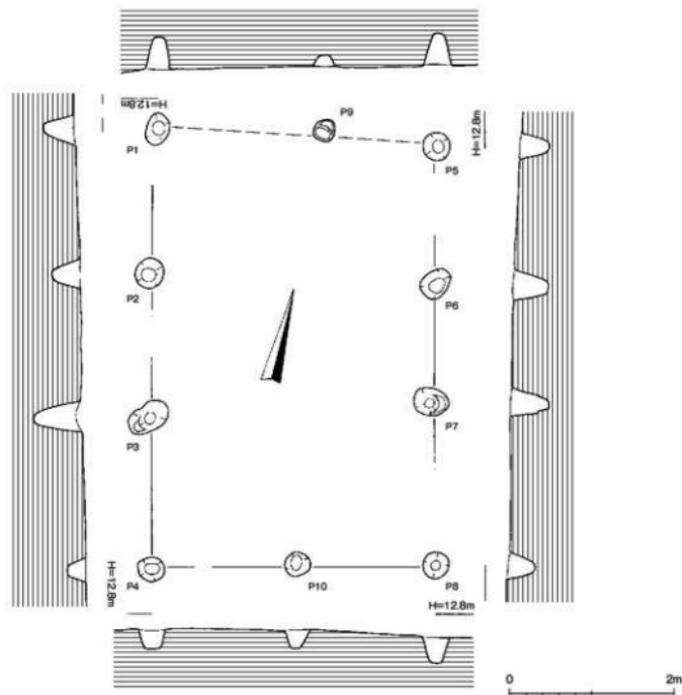
以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における日本測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字（西から東にA～E）と数字（北から南に1～8）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第4図参照）。

1) 掘立柱建物 (SB)

以下報告する14棟の掘立柱建物は、全体に出土遺物は少ないが、平面プランや規模、覆土からSB005・006の2棟は中世、他は弥生時代後期から古墳時代初頭と推定される。前者は2×3間の柱配置で、柱穴の覆土はややシルト質の灰褐色土である。一方後者は、1×1間のプランが大半を占め、柱穴の規模が大きく、覆土は淡褐色土のものが多く認められた。なお、主軸方位は座標北からの偏差である。

SB005 (第5図) 調査区南西部のB-6・7で検出した2×3間の南北棟の建物で、主軸方位はN-14°-Wを測る。梁間の全長は3.4mで、柱間は南側が1.7m、北側は1.3、2.1mを測る。桁行全長は東側が5.1m、西側が5.4mで、柱間は1.5～1.8mである。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径0.3～0.5m、深さ0.15～0.6mを測る。梁間の間柱(P9・10)は浅く掘り込まれる。土師器の細片がP3・6から少量出土した。

SB006 (第6図) SB005の南側、B-7・8に位置する。SB005同様の2×3間で、主軸方位も類似したN-21°-Wであるが、やや規模が大きい。梁間は全長3.9m、柱間は南北共に西側がやや短く1.8m、東側が2.1mを測る。桁行の全長は6.6mで、各柱間はほぼ等間隔の2.2mである。柱穴は円形プランを主体とし、径0.25～0.6m、深さ0.15～0.5mを測る。北側梁間の間柱(P9)は浅い。P5～8の各

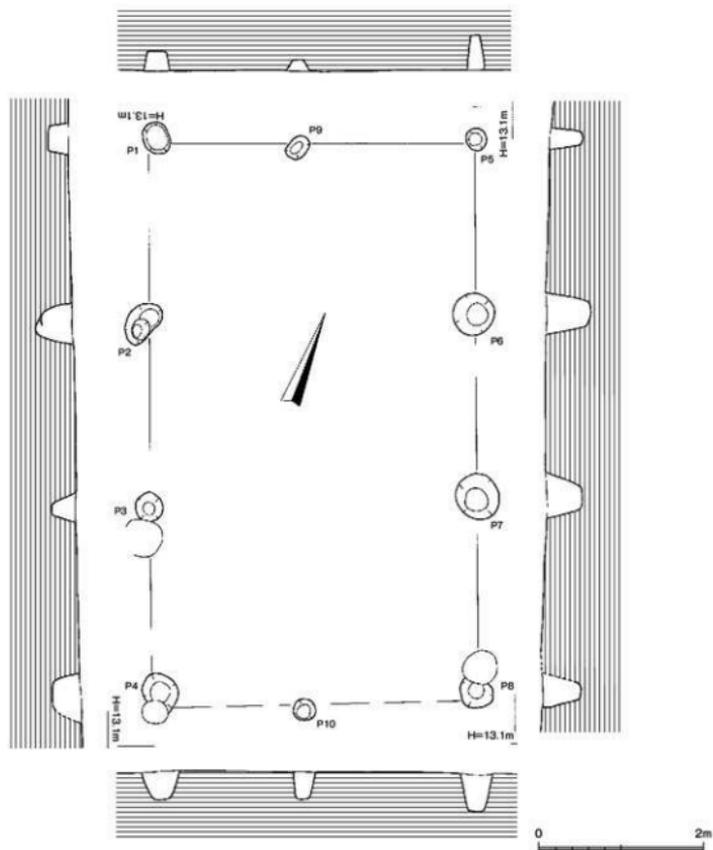


第5図 SB005実測図 (1/60)

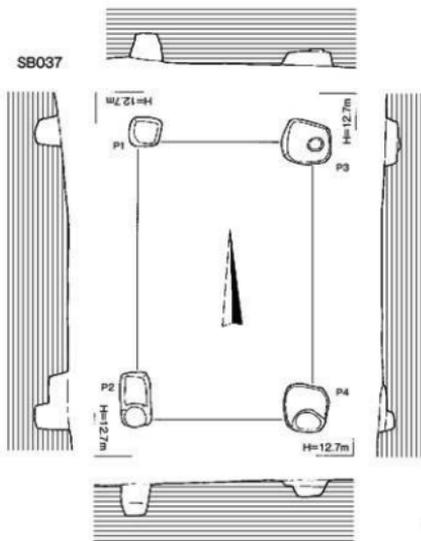
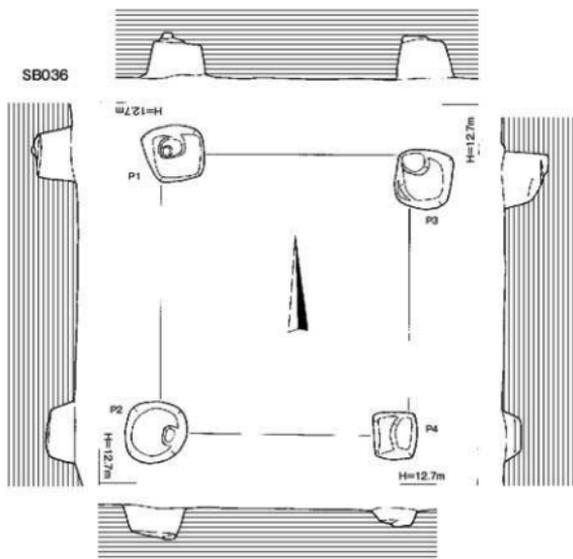
柱穴から土師器片等が出土したが、いずれも細片である。

SB036 (第7図) 調査区東端のE-6で確認した1×1間の建物で、後述するSB037とは柱筋が重複する。主軸方位はほぼ座標北のN-3°-Eで、梁間3.0m、桁行3.4mである。柱穴の平面プランはP2が径0.7mの円形、他は隅丸方形を呈し、一辺0.5～0.6mを測る。深さ0.2～0.55mで、底面には柱位置と推定される窪みが認められた。各柱穴から細片の弥生土器が少量出土した。

SB037 (第7図) SB036と柱筋が重複する建物である。方位は類似するN-2°-Eではほぼ南北方向に主軸を有する。また同様に1×1間であるが、梁間が狭い長方形の柱配置である。柱間は梁間2.1m、桁行3.4mを測る。柱穴プランは一辺0.4～0.6mの隅丸方形で、P2は南北方向に長い長方形を呈する。深さは0.2～0.4mである。



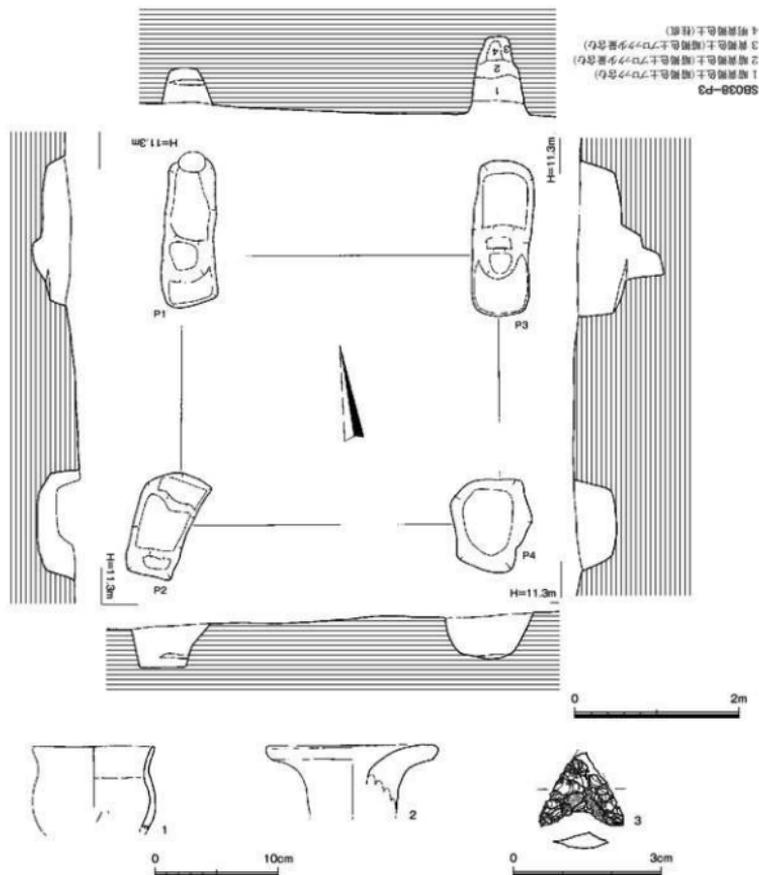
第6図 SB006実測図 (1/60)



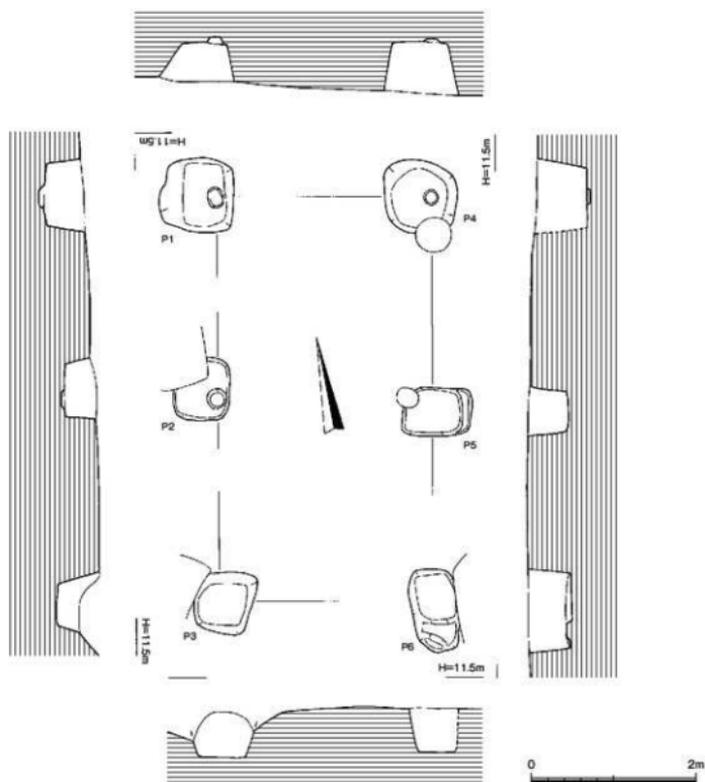
第7图 SB036·037 实测图 (1/60)

出土遺物（第8図1）P2出土の土師器小形壺で、やや開いて立ち上がる口縁端部は尖り気味に納める。体部内面をヘラナデするが、他は器面が風化する。胎土には砂粒が目立つ。他にも各柱穴から土器片が出土しているが、細片である。

SB038（第8図）調査区北側のD-5で検出した1×1間の建物である。この周辺では本遺構を含む4棟の類似する方位の建物（SB038・039・040・041）が存在し、それぞれの柱筋が重複している。また、本建物のP1、P2、P4は後述するSB039のP2、P3、P6をそれぞれ切ることから直接の前後関係が把握できた。柱間は南北が3.3m、東西が3.9mを測り、やや東西方向に長い柱配置である。南北方向を主軸とすると、その方位はN-9°-Eである。柱穴プランは不整なP4を除き南北方向に長い隅丸長方形



第8図 SB038 実測図 (1/60) およびSB037・038・039 出土遺物実測図 (3は1/1、他は1/4)



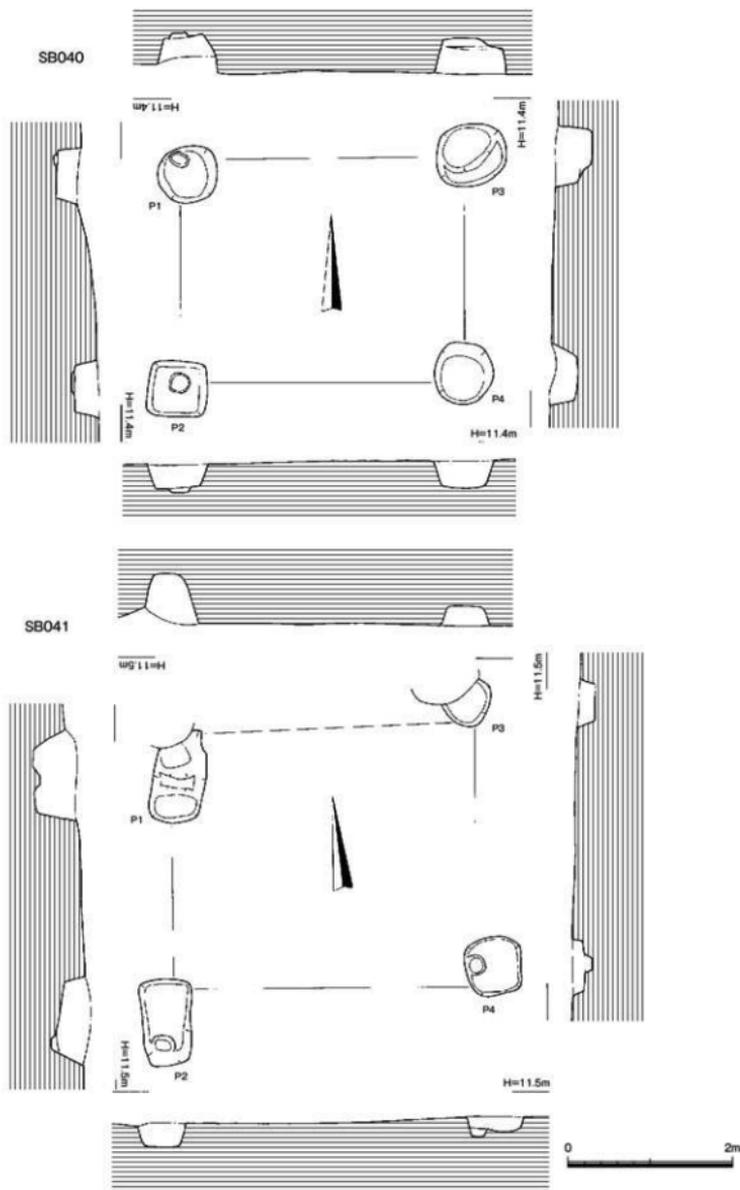
第9図 SB039実測図 (1/60)

を呈する。南北両側にテラスを有し、中央部を深く掘り込む。長さ1.3～1.9 m、幅0.6～0.7 m、深さ0.5～1.0 mを測る。なお、P3土層の下層には柱痕跡が認められた。

出土遺物(第8図3) P4から出土した黒曜石製の石鏃で、先端部を欠損する。他に弥生土器の細片が各柱穴から出土した。

SB039 (第9図) D-5に位置し、SB038に先行する1×2間の建物である。先述のとおり、同遺構とはP2、P3、P6が重複関係にある。主軸方位はN-11°-Eで、梁間2.6 m、桁行5.0 mを測る。桁行の柱間は等間隔の2.5 mである。柱穴は一辺0.6～1.0 mの隅丸方形プランを呈し、P6を除いて正方形に近い。深さ0.5～0.6 mを測り、P1、P2、P4の底面には柱位置と推定される径約0.2 mの円形の窪みが確認できた。

出土遺物(第8図2) 弥生土器の器台受け部で、P4から出土した。内面の一部にナデ調整が残るが、



第10図 SB040-041 実測図 (1/60)

器面の剥落が進む。胎土には砂粒を多く含む。他にも各柱穴から弥生土器の細片が少量出土している。

SB040 (第10図) D-5で確認した1×1間の建物で、P1、P3は後述のSB041のP1、P3をそれぞれ切る。柱間は南北が2.7m、東西が3.5mを測り、東西方向に長い柱配置である。南北方向を主軸とすると、その方位はN-1°-Eである。柱穴の平面プランはP2が一辺0.7mを測る方形を呈する他は、径0.7～0.9mの円形をなし、深さは0.3～0.4mである。また、P1、P2の底面には柱位置と推定される径約0.2mの円形の窪みが確認できた。各柱穴から弥生土器が少量出土しているが、いずれも細片である。

SB041 (第10図) 本遺構の柱配置はやや不整で疑問が残るものの、D-5で重複して検出した他の3棟の建物(SB038-039-040)の柱穴を除外した上で復元した。前述のSB040に先行する建物で、P1、P3が同建物の柱穴に切られる。柱間は南北3.2m、東西3.7mを測り、やや東西方向に長い柱配置を呈する。南北方向を主軸とすると、方位はN-7°-Eである。柱穴はP1、P2が長さ1.1m前後、幅0.6m前後の隅丸長方形、P3、P4が一辺0.6m前後の隅丸正方形で、深さ0.2～0.6mを測る。各柱穴から弥生土器が少量出土しているが、いずれも細片である。

SB042 (第11図) 調査区南東端のD-7に位置する1×1間の建物である。後述のSB047とは柱穴同士の切り合いはないものの、柱筋が重複する。主軸は座標北で、梁間1.6m、桁行2.0mである。柱穴の平面形は円形を呈し、径0.6m前後、深さ0.3～0.4mを測る。P2、P4の底面には柱位置と推定される径0.1～0.2mの窪みが確認できた。各柱穴から弥生土器と考えられる細片が少量出土した。なお、柱間の規模から壁面を削平された竪穴住居の主柱穴の可能性もある。

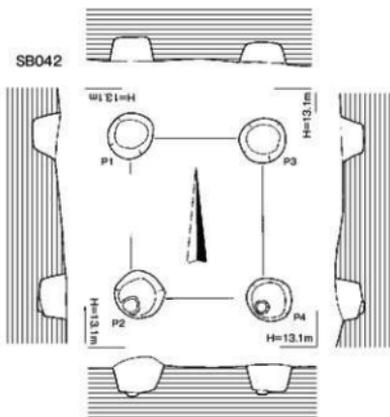
SB043 (第11図) D-6で検出した1×1間の建物で、SD019に柱筋が重なるが、柱穴は直接重複しない。主軸方位は、N-9°-Wで、梁間は北側が2.0m、南側が2.2m、桁行は3.2mである。柱穴は不整ながら隅丸の方形を呈し、一辺0.5～0.7m、深さ0.8～1.0mを測る。また、各柱穴の底面には柱位置と考えられる径0.1～0.2mの掘り込みを有する。弥生土器の甕や器台等の細片が各柱穴から少量出土している。

SB044 (第12図) C・D-6で確認した1×1間の建物である。P1はSC012の住居部分を掘り下げる過程で検出できた柱穴であること、またP4はSC012の外周溝を切るビットを更に切る柱穴であることからSC012に後出する遺構であることがわかる。柱配置は東西に長く、柱間は南北方向の西側(P1-P2)が2.4m、東側(P3-P4)が2.5m、東西方向では北側(P1-P3)が3.3m、南側(P2-P4)が3.5mを測る。南北方向を主軸とすると、建物方位はN-14°-Eである。柱穴は不整ながら一辺0.6～0.9mの隅丸方形を呈し、深さ0.5～0.6mを測る。底面には柱位置と推定される径約0.15mの円形の窪みがあり、P2では柱痕跡が土層でも確認できた。各柱穴から弥生土器等の細片が少量出土した。

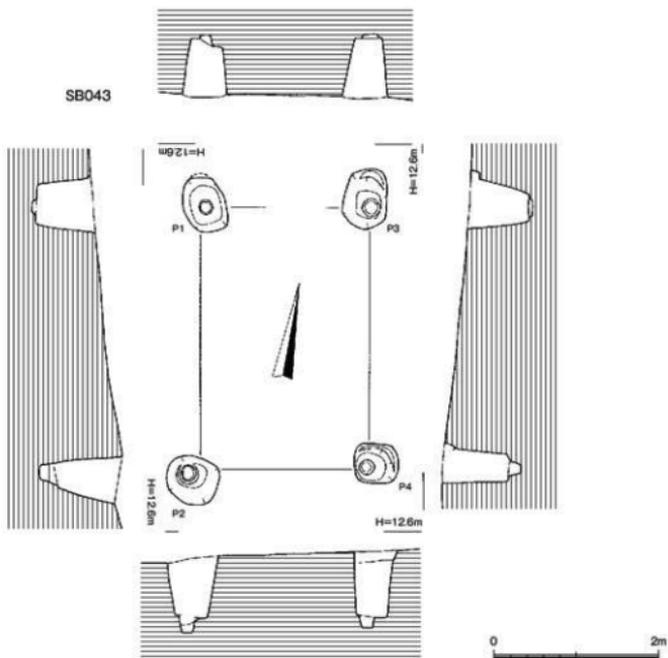
SB045 (第13図) SB044に南側に位置する1×2間の建物で、柱筋の重複関係からSB044およびSC012とは同時併存しない。また、P5はSK016に切られる。主軸方位はN-5°-Wで、梁間3.4m、桁行4.6m、その柱間は等間隔の2.3mを測る。柱穴の平面プランは不整な隅丸方形で、一辺0.5～0.6m、深さは0.4～0.6mである。底面には径約0.2mの円形の掘り込みを有するものが多く認められる。各柱穴から弥生土器が少量出土したが、いずれも細片である。

SB046 (第12図) 調査区南端部のC・D-7で検出した1×1間の東西方向に長い建物で、柱間は南北が2.2m、東西が3.1mを測る。南北方向を主軸とすると、その方位はN-5°-Eである。柱穴はやや不整ながら隅丸方形を呈し、深さは0.5～0.6mである。P3を除いて正方形に近く、一辺0.5～0.7mを測る。P3は南北方向に長い長方形で、長さ1.0m、幅0.6mである。また、底面の多くには、柱位置と推定される径約0.2m程度の円形の窪みが認められた。各柱穴から弥生土器や古式土師器の細片

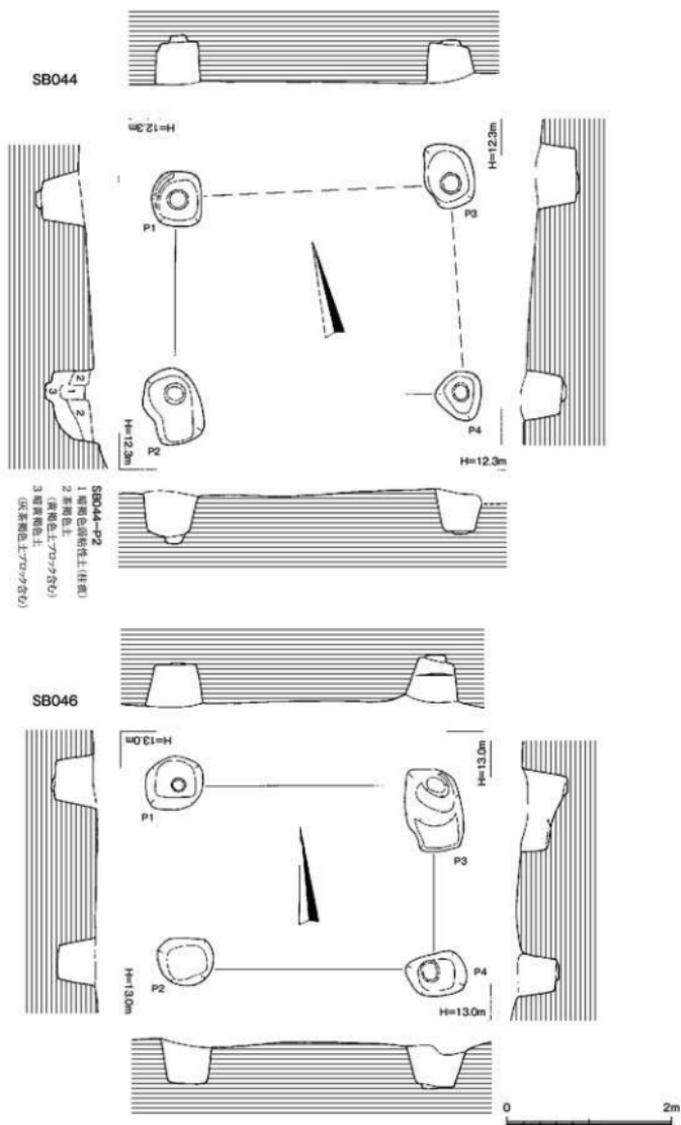
SB042



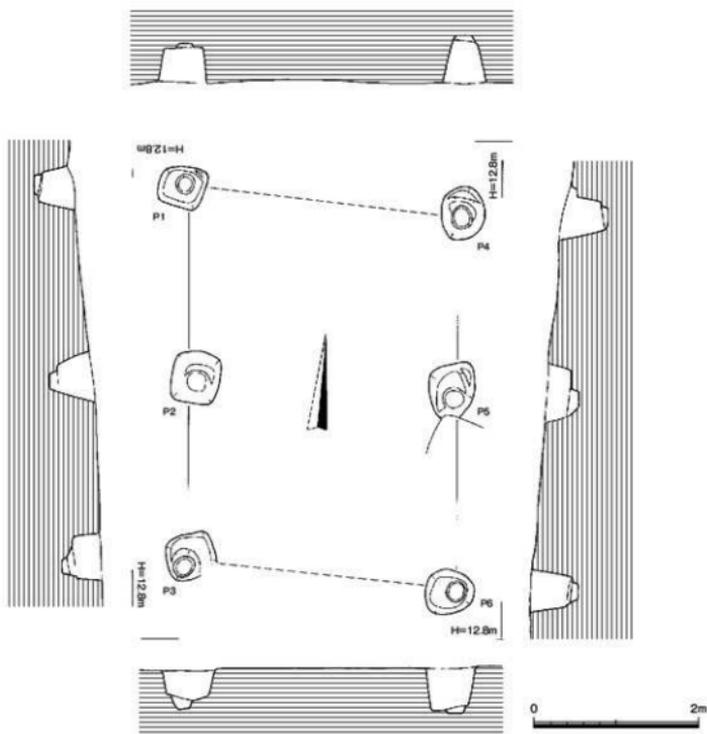
SB043



第11图 SB042·043 实测图 (1/60)



第12図 SB044-046 実測図 (1/60)



第13図 SB045実測図 (1/60)

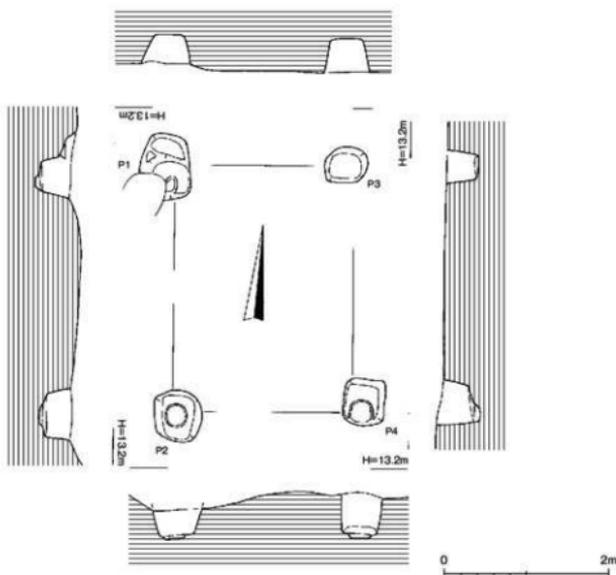
が少量出土している。

SB047 (第14図) 調査区南東端のD-7に位置する1×1間の建物で、SB042とは柱筋が重複する。主軸方位はN-5°-Wで、梁間2.2m、桁行3.0mを測る。柱穴の平面プランは不整なものもあるが、隅丸方形を呈し、一辺0.5～0.8m、深さ0.4～0.6mである。各柱穴から少量の弥生土器や古式土師器が出土したが、いずれも細片である。

2) 竪穴住居 (SC)

今回の調査では遺存状況は良好ではないものの、弥生時代後期から終末期に位置付けられる方形竪穴住居6軒を確認した。このうち2軒の住居 (SC012・017) はそれぞれ円形の周溝によって取り囲まれており、両者はセットになる遺構と考えられることから、以下では住居と外周溝を併せて報告する。

SC012 (第15図) C・D-6で検出した円形の外周溝に囲まれる方形住居で、北側は段落ちによって大きく削られる。先述のとおり、SB044に先行する。住居の全体の規模は削平により不明確であるが、両側のコーナーが遺存する南側の壁面では長さ3.9m、高さ0.1mを測る。壁際には細い壁溝が断続的



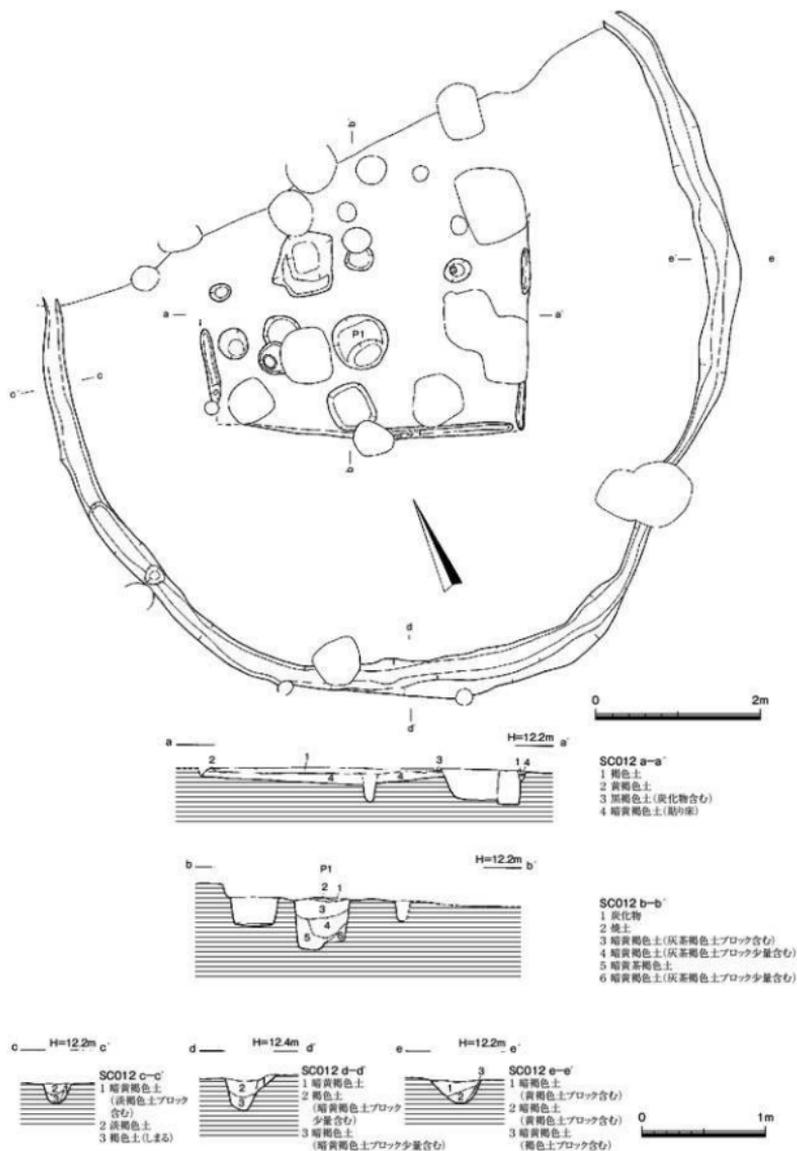
第14図 SB047 実測図 (1/60)

に配されるが、住居の北半部は削平がおよび不明瞭である。土層観察では地山と類似する暗黄褐色土の貼床が施され、床面では複数のビットが認められたが、支柱穴は明確ではない。なお、中央南側検出の径・深さ約0.6mを測る円形の掘り込み(P1)の上層(b-b'土層の1・2層)には、焼土や炭化物が薄く堆積しており、屋内炉の可能性はある。

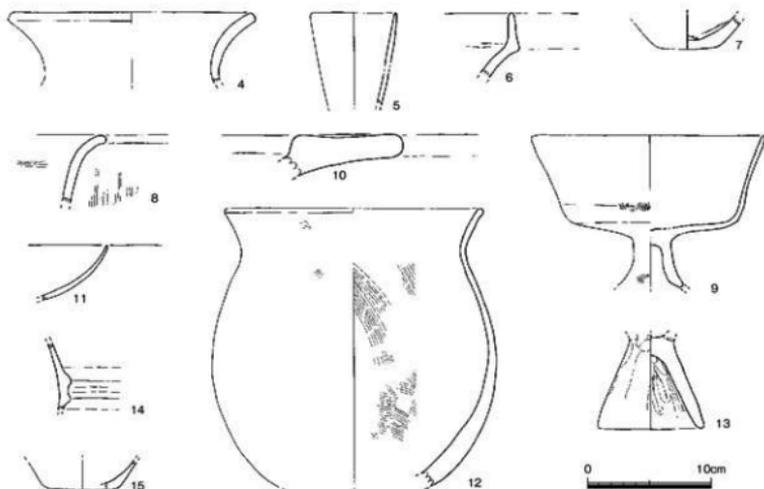
また、径約8.5mを測る外周溝は、幅0.2～0.4m、深さ0.15～0.3mで、断面「U」字形を呈する。底面の標高は南側が最も高く、北側に向かって深くなる。

出土遺物(第16図4～9)4・5は堅穴住居、6～9は外周溝出土で、9は土師器、他は弥生土器である。4～7は壺である。4は外反する口縁部で、端部を鈍く面取りする。5は復元口径6.8cmを測る長頸壺の口頸部で薄手のつくりである。6は複合口縁壺の口縁部片で、上部は直立して丸く収める。7はレンズ底状の底部である。以上は器面の荒れにより調整が不明であるが、7の内面にはヘラナデの工具痕が認められる。8は如意形を呈する口縁部片で、壺であろう。内外面に刷毛目調整を施し、淡黄褐色を呈する。9は脚裾部を欠失する高坏で、深めの坏部の屈曲部は丸みを帯びる。体部は直線的に開き、口径20.2cmを測る。屈曲部の上位には沈線上の浅い段が巡る。内底部はほぼ平坦である。器面は風化が進むが、細かい刷毛目調整が部分的に残る。色調は赤褐色を呈する。他にも弥生土器の細片が出土している。以上の出土遺物から弥生時代終末期頃の遺構と考えられる。

SC014(第17図)SC012の南東部、D-7で確認した方形住居である。西半部は削平により壁面が失われるため、規模は不明であるが、遺存する東壁面の長さは4.5mを測る。また、東側と南側の一部に



第15図 SC012実測図(c・d・e土層図は1/40、他は1/60)



第16図 SC012-014-017-018 出土遺物実測図 (1/4)

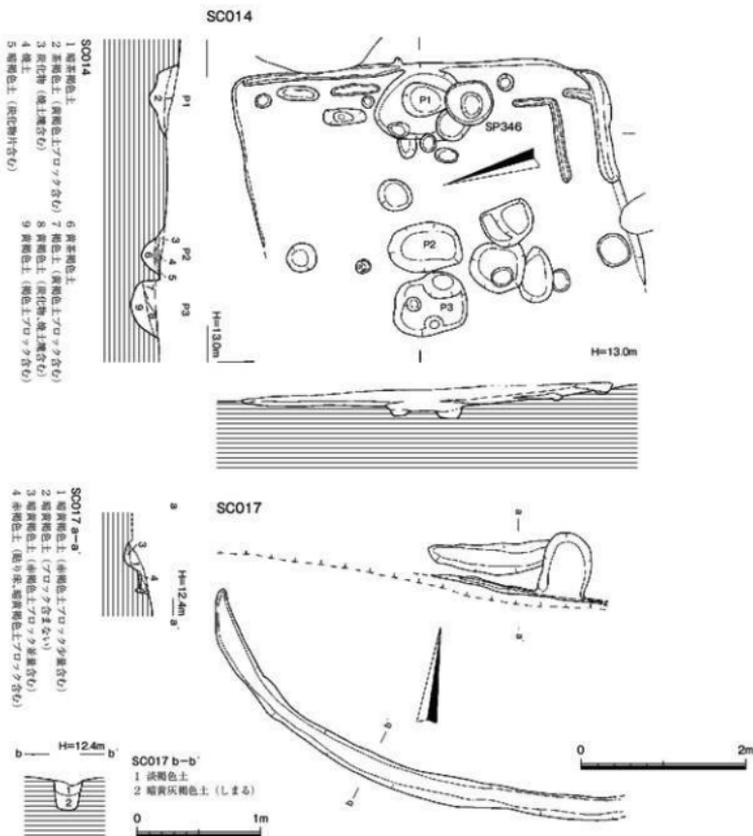
は溝が巡り、幅0.4 m、高さ0.1 mのベッド状遺構が地山削り出しによって設置される。また、床面の中央部にはP1～3の土坑が東側から西側に直線的に配される。東壁際に位置し、後述のSP346に切られるP1は屋内土坑で、覆土には炭化物等を含まないものの、隣接するP2-3は焼土や炭化物が認められた。特にP2の上層部(3・4層)にはそれらが顕著に堆積し、屋内炉と思われる。床面にはビット状の掘り込みが検出できたが、主柱穴は判然としない。なお、後述するSD019はこの竪穴住居の北東部を弧状に巡り、セツトとなる外周溝の可能性があるが、現況の検出状況からは判断しがたい。

出土遺物(第16図10・11)共に細片で、10は弥生土器の大形器種の口縁部である。11は土師器の単口縁の鉢で、端部は先尖る。暗赤褐色の色調である。他に内面刷毛目調整の弥生土器の細片等が少量出土している。

SC017(第17図)調査区東端中央のE-6に位置する。SC012同様に円形外周溝に囲まれる方形住居であるが、北側の段落ちによって双方の大半は削平されており、特に竪穴住居の遺存状況は不良である。また、東側は調査区外に位置する。住居は南側の壁面の一部が残るのみであるが、壁面際には屋内土坑が設けられ、その両側には細い壁溝が続く。また、その北側には幅広の溝が並行して検出できた。土層観察(a-a')では、幅0.2 m程度の両溝の間に薄い貼床(4層)を施す平坦な高まりがあり、ベッド状遺構と推定される。

また、南側で検出した外周溝は、円形に住居を取り囲むものと考えられるが、北西端部は削平により途切れる。幅、深さ共に約0.3 mを測り、断面は箱型を呈する。底面の標高は東端部が最も高く、北西側に向かって深く掘られる。

出土遺物(第16図12・13)12は屋内土坑の上層で出土した甕で、頭部の稜線は内外共に鈍い。器面は荒れるが、内面には刷毛目調整が残る。下半部の器壁は厚い。13は外周溝から出土したもので、器



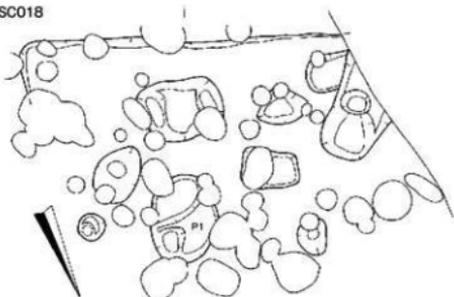
第 17 図 SC014・017 実測図 (b 土層図は 1/40、他は 1/60)

台もしくは台付の器種の脚部であろう。内面にはシボリ痕が認められる。他に弥生土器等が出土しているが、細片である。以上の出土遺物から弥生時代終末期頃の遺構と考えられる。

SC018 (第 18 図) 調査区北西部の A-2・3 で検出した竪穴住居である。当初は住居の上面から掘り込まれる中世のピットが多く、プラン等が認識できなかったが、精査を進めるうちに北側の多くが削平され、南東部のコーナーを含む南側の壁面が遺存する竪穴住居であることが判明した。また、西側は調査区外に位置するため、規模は不明であるが、現況で南壁の長さは 4m 以上となる。床面で検出した長径 1.1m、短径 0.8m を測る楕円形プランの P1 は、浅い窪み状の南側に炭化物、北側に焼土が顕著に認められ、屋内炉と推定される。なお、支柱穴は明らかでない。

出土遺物 (第 16 図 14・15) 共に風化が進む弥生土器で、14 は壺の胴部片である。断面三角形の 2 条

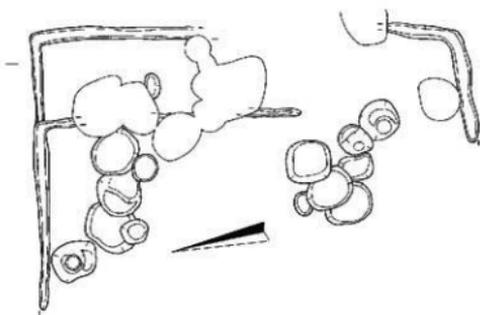
SC018



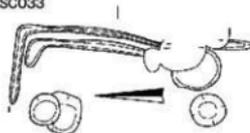
SC018

- 1 暗栗褐色土(灰化物多量, 焼土塊少量含む)
- 2 暗栗褐色土
- 3 暗栗褐色土(灰化物多量, 焼土塊含む)
- 4 焼土

SC032



SC033



第18図 SC018-032-033 実測図 (1/60)

の突帯を貼付する。15は壺もしくは甕の底部片で、平底であるが、胴部との境界の稜線は鈍い。他にも弥生土器の細片が少量出土している。

SC032 (第18図) 調査区北東のD-E-4で確認したが、削平のため壁面が失われ、壁溝の一部が遺存するのみである。東側の両角コーナーを検出することができ、その長さは5.3mを測る。南北両側にも壁溝が延長するが、削平により途切れる。また、東側の壁溝から西約1mに並行して浅い溝が設けられており、削平のため明らかではないが、その間はベッド状遺構と推察される。出土遺物は少なく、土師器と思われる薄手の土器片等が数点出土したのみである。

SC033 (第18図) SC032の西側のD-4で検出した。SC032同様に遺存状況は不良で、方形住居の北東コーナーの壁溝と推測される「L」字形の溝を検出したにとどまる。また、その西側にも細い溝が並行するが、同一遺構であるかは明らかでない。本遺構から遺物は出土していない。

なお、SC032・033の周辺には同様の「L」字形を呈する溝や浅い段があり、方形住居の一部や段造成の可能性を有する。また、南側および東側で検出した後述のSD024・025・026は、これら複数の堅穴住居の外周溝であった可能性がある。

3) 土坑・土壙墓 (SK)

以下、10基を報告するが、このうちSK029が遺物出土状況から中世の土壙墓と考えられる。また、土坑の主な時期は弥生時代後期、古代、中世後半期である。

SK003 (第19図) A-3に位置する土坑で、南西側は調査区外に位置するため、全容は不明であるが、隅丸方形の平面プランを呈するものと考えられる。現況で長さ1.3m以上、幅1.0m、深さ0.25mを測る。断面は逆台形をなし、底面は平坦である。覆土はややシルト質の灰褐色土を主体とする。出土遺物には土師器、土師質土器等の細片が少量ある。

SK010 (第19図) 調査区南のC-7で検出したやや不整な隅丸長方形の土坑で、南東部を溝に切られる。長さ1.6m、幅0.7m、深さ0.3mを測り、北側にテラスを有する。断面は逆台形をなし、壁面の立ち上がりは比較的緩い。覆土は淡褐色土を主体とする。

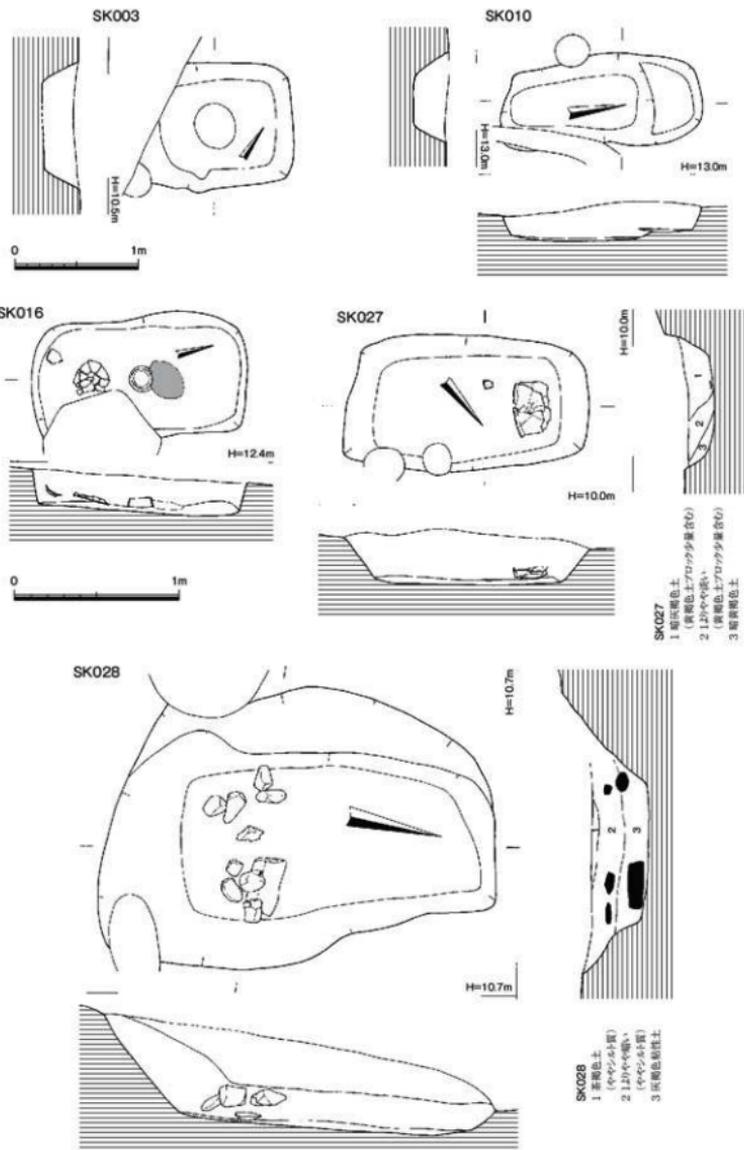
出土遺物 (第20図16) 北側のテラス上で出土した弥生土器壺の下半である。凸レンズ状の底部に丸味のある胴部が続く。内外面共に器面が風化する。他に弥生土器の細片が少量出土している。弥生時代後期後半の遺構であろう。

SK016 (第19図) D-6・7で確認した土坑で、SB045のP5を切る。南東側をピットに切られるが、平面プランは隅丸長方形を呈するものと思われ、長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。壁面の立ち上がりは急で、底面はほぼ平坦である。また、底面近くで白色粘土 (網掛け部) が出土した。

出土遺物 (第20図17) 白色粘土に接して出土した弥生土器直口壺の口縁部である。口径15.6cmで、端部は面をなす。器面が荒れる。他に内面刷毛目調整の弥生土器の甕片等が出土している。

SK027 (第19図) SX011の西側肩部のC-3・4に位置する。隅丸方形を呈し、長さ1.95m、幅1.1m、深さ0.45mを測る。断面は逆台形をなし、底面はほぼ平坦である。覆土は北東部から流れ込んだ状態で、ブロック混じりの暗灰褐色土が主体となる。

出土遺物 (第20図18・19) 共に北西部の底面からやや浮いて出土したものである。18は底部を欠失する土師器の甕で、潰れた状態で出土した。口径31.4cmを測り、外反する口縁部にあまり張りのない体部が付く。頸部の稜線は内外面共に緩い。内面は器面の剥落が進むが、外面は口縁部をヨコナア、体部上半は横方向の刷毛目、下半は斜方向の叩きを施す。19は越州窯系青磁碗I-2b類である。口縁端部に輪花を施し、体部外面にヘラの押圧による縦線文を有する。硬質の精良な胎土の内外面に黄緑色の釉を施す。他に土師器の甕の把手と思われる細片が出土している。以上の出土遺物から10世紀代



第19図 SK003・010・016・027・028実測図 (SK016は1/30、他は1/40)

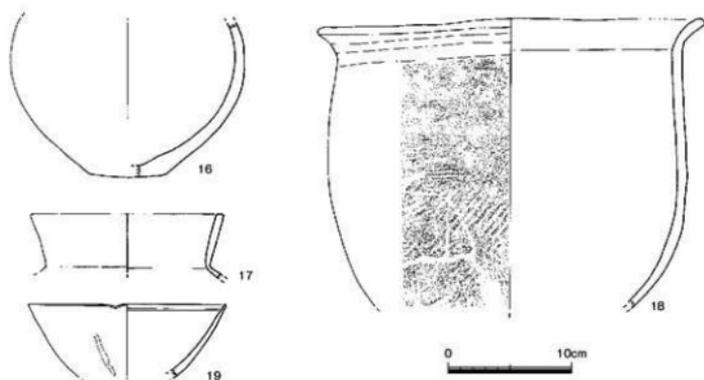
の土坑に位置付けられる。

SK028 (第19図) C-4で検出した土坑で、北東部の壁面の上半をSD022に切られるため、現況では不整な形状をなすが、当初は隅丸長方形のプランであったと推定される。長さ3.2m、幅2.2m、深さ0.7mを測り、断面は逆台形状を呈する。底面は北側に緩く傾斜し、南側には礫の集石が認められた。礫は角礫の花崗岩を主体に大振りの玄武岩が含まれ、うち2点の花崗岩は被熱により一部が黒変する。覆土の下層には粘性土が堆積する。礫に混じって土師質土器や瓦質土器等の細片が少量出土した。中世後半期の土坑と推測される。

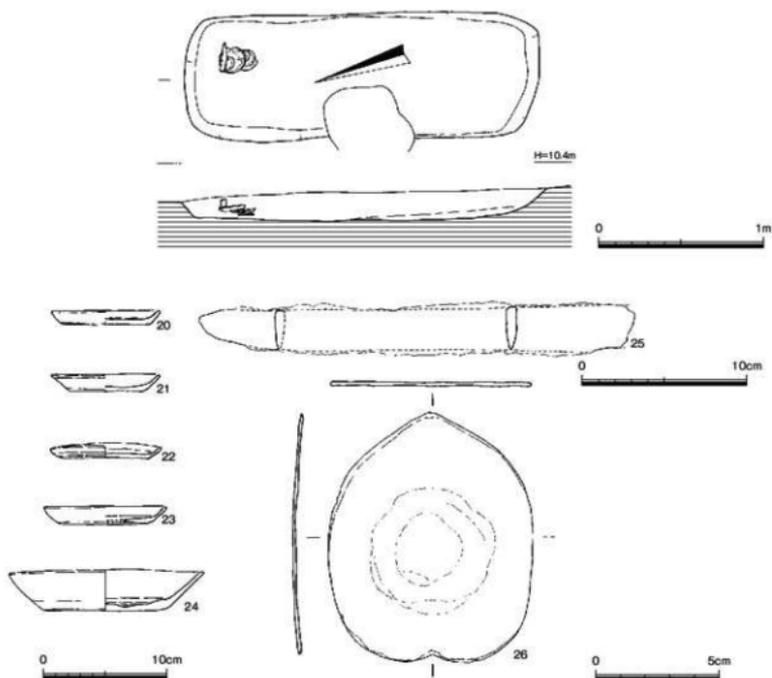
SK029 (第21図) 調査北東部のD-4で確認した土壌墓である。長さ2.15m、幅0.75m、深さ0.15mを測る端正な隅丸長方形を呈する。断面は逆台形をなし、底面はほぼ平坦である。覆土はややシルト質の灰褐色土を主体とし、砂質土が含まれる。北側の壁面近くにおいて、上位から鉄製短刀(25)、土師器小皿・杯(20~24)、青銅製品(26)が重なって副葬されていた。

出土遺物(第21図)20~24は土師器で、このうち20~23は小皿である。口径は8.8~10.0cmを測り、完形近くに復元できるものが大半である。外底部は全て回転糸切りで、不鮮明ながら20・22には板状圧痕が認められる。24は口径15.8cmの杯である。外底部は風化するが、回転ヘラ切りと板状圧痕の痕跡が残る。土師器は全て淡黄橙色を呈する。25は錆化の著しい鉄製短刀で、不明瞭ながら関が認められるもの、茎の大半を欠損する。現存の長さは26.5cm、身幅は2.5cmを測る。切先を東側に向けて出土した。26は副葬遺物の最下層から出土した光背形の青銅製品である。長さ10.2cm、幅8.2cm、厚さ0.18cmを測る。図の上面を上に向けて、また図の下を北側に向けて出土した。上面の中央部には叩きだしたような円形の僅かな窪みが認められ、下面は凸状に反り、鏡面のように滑らかで銀色の光沢がある。X線や実体顕微鏡による観察では、上面周囲に鋳掛けが認められ、体の両端と挾り部の直下の計3箇所に極めて小さい穿孔が認められた。ただし、毛彫り等による仏像は確認できないことから、別造りの仏像とセットになる光背と推定される。他に接合しない土師器の細片が少量出土している。土師器から12世紀中頃の土壌墓と考えられる。

SK030 (第22図) SX011の東側屑部のD-4に位置する土坑である。平面形は不整な隅丸長方形をなし、長さ1.6m、幅1.1m、深さ0.6mを測る。断面は逆台形を呈し、壁面の立ち上がりは比較的急で



第20図 SK010-016-027 遺物実測図(1/4)



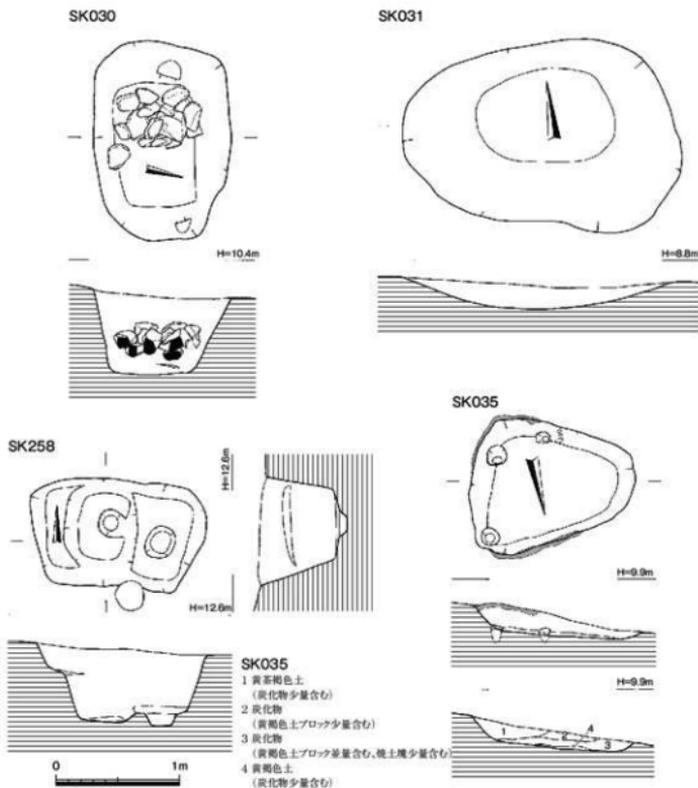
第21図 SK029実測図(1/30)および出土遺物実測図(26は1/2、25は1/3、他は1/4)

ある。西半部の中層には拳〜人頭大の花崗岩角礫の集石が認められた。また、その半数程度は被熱により黒変あるいは赤変しているが、一方向からの被熱ではないことから、二次的に廃棄されたことが窺える。覆土は灰茶褐色土を主体とするが、下層になるに従い、地山由来の黄褐色土ブロックを含む。

出土遺物(第23図27・28)27は備前焼の播鉢で、内面には8条の播目を施す。底部と体部の境界部分は粗い指ナデを加える。外面は暗赤褐色、内面は灰白色を呈し、滑らかである。28は明代の龍泉窯系青磁碗の底部である。内面および外面の畳付きまで鈍い緑色の軸が掛けられるが、外底部は露胎で、粗く高台を削り出す。他に口禿げの白磁等の細片が少量出土している。中世後半代の土坑であろう。

SK031(第22図)調査区北端部の中央、C-3で検出した土坑で、SX011の埋没後の上面から掘り込まれる。平面プランは不整な楕円形を呈し、長径2.2m、短径1.6m、深さ0.2mを測る。断面は浅皿形をなし、覆土は灰褐色シルトである。

出土遺物(第23図29~33)29~31は土師質土器で、29・30は鍋である。29は復元口径37.0cmを測り、僅かに外反する口縁部を肥厚させる。外面は縦方向の刷毛目が僅かに残るが、ナデ消す。また、下端部には煤の付着が認められる。内面は細かい横方向の刷毛目調整を施す。30は底部までが遺存す



第22図 SK030・031・035・258 実測図 (1/40)

るもので、29に比して器壁が薄い。口縁部は僅かに外反し、やや肥厚する。体部外面の下半に鈍い突線状の段を有し、底部はやや不安定な平底である。また、中位以下には煤が付着する。調整は外面がナデを施すが、部分的に刷毛目を残す。内面は内底部をナデ調整する他は横方向の細かい刷毛目調整である。復元口径44.8cm、器高18.3cmを測る。31は片口の播鉢で、口縁部はやや内湾し、端部は面をなす。外面は刷毛目を指によりナデ消す。内面は風化するが、横方向の刷毛目と3条単位の播目が認められる。32は周防型の瓦質土器足鍋の口縁部である。体部と口縁部の境界は「く」字状に折れ、口縁端部を肥厚させる。器面が荒れるが、内面には刷毛目調整が残る。復元口径は26.0cmである。33は備前焼の播鉢の底部で、内面には8条の播目を有する。外面は粘土の輪積みの凹凸を残す。外面は暗赤褐色、内面は灰白色に発色する。他に青磁の細片等が出土している。以上の出土遺物から15世紀後半代の遺構に位置付けられる。

SK035 (第22図) D-3で確認した土坑で、不整な方形形状をなす。長さ1.3m、幅1.1m、深さ0.2m

を測る。壁面は緩く立ち上がり、底面は西側に緩く傾斜する。壁面の上位の一部は被熱によりよく焼け、覆土の下層には細かい炭化物が堆積する。また、底面には3基の小ピットが認められ、炭化物を含む。出土遺物は土師器の細片数点のみである。

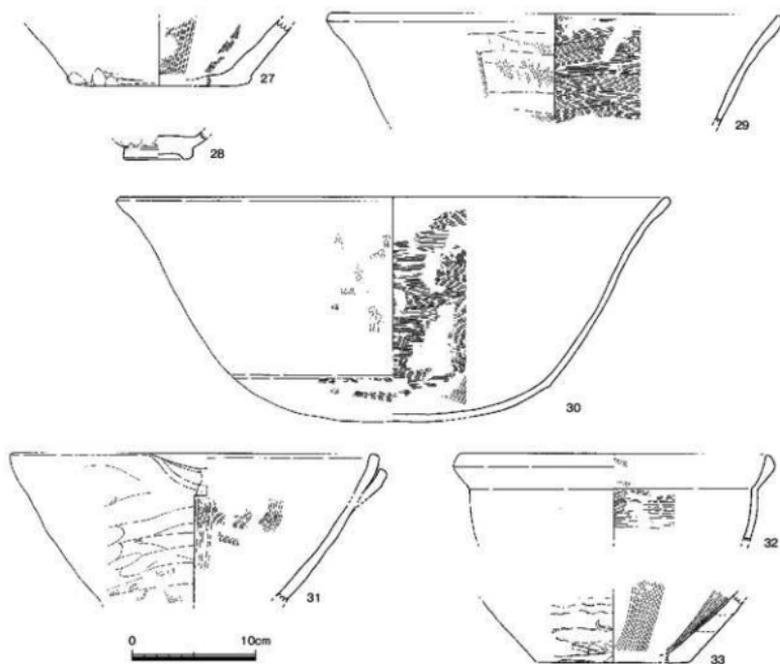
SK258（第22図）C-6に位置する隅丸方形の土坑で、長さ1.3m、幅0.9mを測る。西側の壁面には狭い平坦面を有し、底面にはピット状の掘り込みが2基認められた。上面からの深さは0.6mである。覆土は暗褐色土を主体とし、凸レンズ状の底部片を含む弥生土器が少量出土した。

4) 溝 (SD)

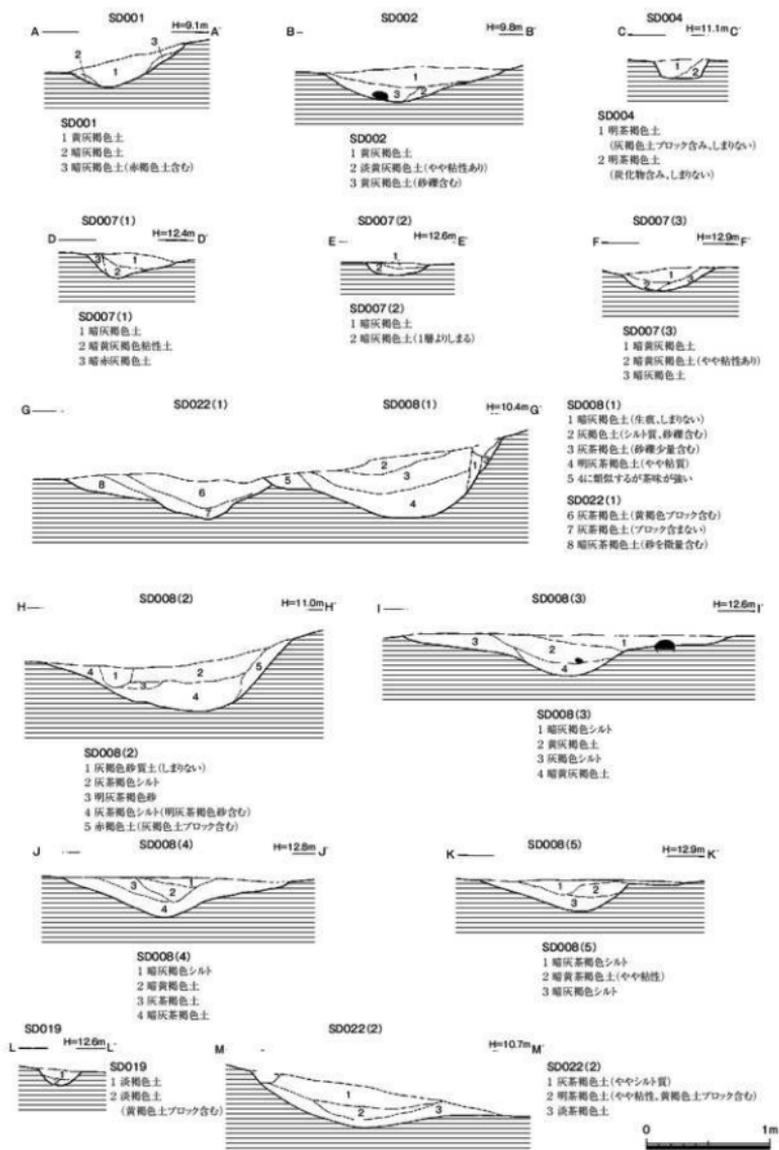
11条の溝状遺構を報告する。全体に出土遺物が少なく、詳細な時期を言及できない遺構も多いが、弥生時代後期から終末期と中世後半期から近世に大別できる。

SD001（第4・24図）調査区北西端のA-1-2で検出した北東-南西方向の溝である。両端部は調査区外に延びるため、一部の確認にとどまる。幅1.0m前後、深さ0.35mを測り、断面は逆台形状を呈する。底面は北東側に傾斜する。

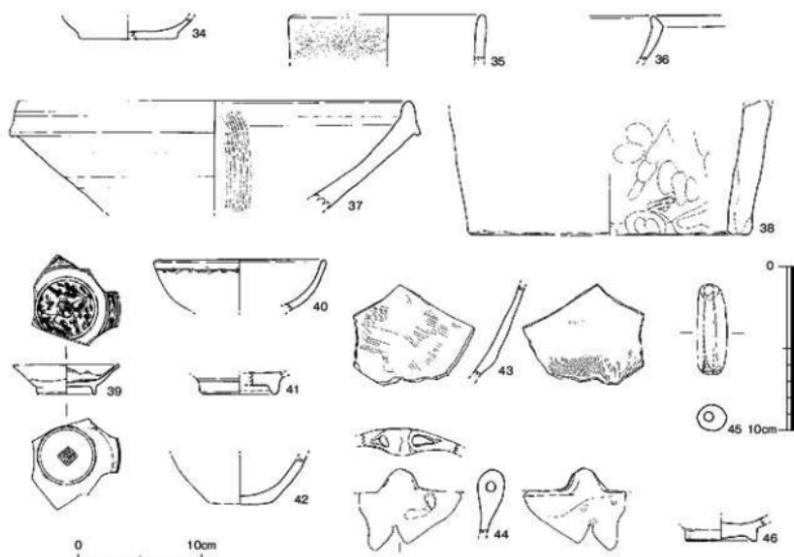
出土遺物（第25図34～38）34は土師器小皿の底部である。器面の磨滅が著しく、外底部等の調整は不明である。35は復元口径16.0cmを測る土師質土器の小形香炉である。体部外面には1条の沈線と菱形文のスタンプが施される。36は瓦質土器の足綱の口縁部片で、端部は内側に屈折させる。37



第23図 SK030-031出土遺物実測図 (1/4)



第 24 図 SD001-002-004-007-008-019-022 実測図 (1/40)



第25図 SD001-008-019-022 出土遺物実測図 (36・45は1/3、他は1/4)

は備前焼の播鉢で、僅かに内傾する口縁端部は丸く納める。また、下端は丸みがあり、垂下する。内面の播目は7条単位である。38は混入した円筒埴輪の下半部で、器面の風化が著しい。土師質の焼成である。以上の出土遺物から15世紀後半代の溝と推定される。

SD002 (第4・24図) SD001の南東側約2mにはほぼ並行する溝で、両端部は調査区外に延びる。また、北東部は削平により検出時の幅が狭い。南西部での幅は約1.5m、深さ約0.3mを測る。断面は皿形を呈し、壁面の傾斜は緩い。底面はSD001同様に北東側に傾斜する。土師器や土師質土器の細片が少量出土している。位置関係や覆土の類似性からSD001と同時期の可能性が高い。

SD004 (第4・24図) 調査区北西部のA・B-3・4・5に位置する北西-南東方向の直線的な溝である。南東端部はB-5で確認できたが、北西部は調査区外に延長する。幅約0.5m、深さ約0.15mを測り、断面は箱型を呈する。しまりのない覆土で、底面は北西側に緩く傾斜する。土師器や近世陶磁器、焼した瓦片等が少量出土した。

SD007 (第4・24図) 調査区南西部のC-6・7・8では蛇行気味に南北方向に延び、B-6で西側に短く屈折する矩形の溝である。西側で検出したSB005はこの溝にほぼ並行しており、建物に付随する区画溝の可能性を有する。幅0.5～0.9m、深さ0.1～0.2mで、屈曲部の底面の標高が最も低い。全体に壁面の傾斜は緩い。出土遺物には少量の土師器や白磁等の細片がある。

SD008 (第4・24図) 調査区の西側を南北方向に延びる溝である。調査区中央部の段落ちによってC-5付近で分断するが、位置関係から一連の遺構と考えられる。両端部は調査区外に延伸し、現況での延長は約50mを測る。部分的な削平により幅が異なるが、現況では1.1～2.7mである。断面形は皿

形を呈し、底面は平坦ではない。北側ではSD022と僅かに重複し、G-G' 土層により後出することがわかった。また、溝の北側部分では集石が2箇所を確認できた。

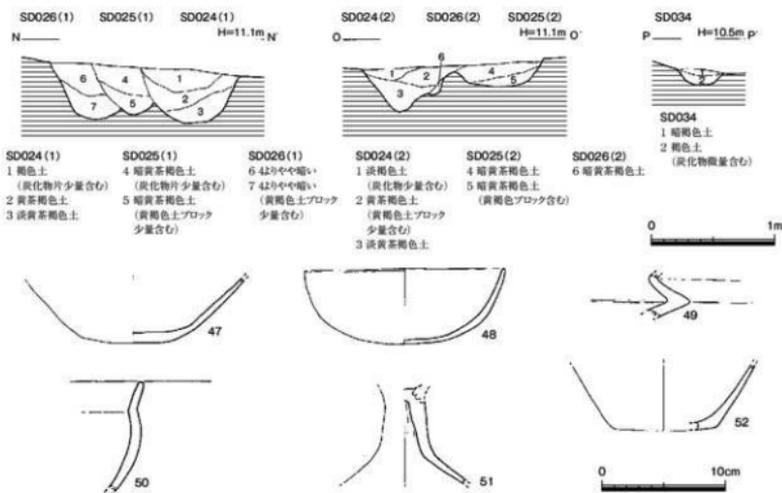
出土遺物(第25図39～41)39は染付の皿で、体部は直線的である。見込みには花文、外底部には方形枠の銘款を施し、壺付きのみ露胎である。肥前系磁器であろう。40・41は釉調が類似する白磁碗である。40は内湾する口縁部外面に波状風のヘラ描き文を有する。41は底部で、壺付き内まで釉が施される。見込みには細い圏線が巡る。他に土師質土器や瓦質土器、青磁等が出土している。中世末から近世の溝であろう。

SD019(第4・24図)D-6に位置する溝で、SB043の柱筋と重複する。緩い弧を描き、南側と西側に端部がある。幅約0.4m、深さ約0.15mを測り、船底状の断面形を呈する。SC014の項で指摘したが、同住居の外周溝の可能性はある。

出土遺物(第25図42)やや不安定な平底の弥生土器の甕で、体部との境界の稜線は鈍い。器面の風化により調整は不明である。他に弥生土器と思われる細片が少量出土した。

SD022(第4・24図)調査区北側中央で確認した溝である。北側は調査区外に延伸し、南側ではSK028を切るC-4区付近で東側に折れる。SK028の前後関係を確認する際に全体を下げ過ぎたため、屈折部の外側が不整な形状をなすが、内側の検出状況から緩いカーブをもって折れる「L」字状を呈するものと推測される。また、前述のとおり北側ではSD0008に切られ、東側の端部ではSD024・025・026を切る。幅1.4～2.0m、深さ約0.4mを測り、底面の標高は北側が低い。壁面の立ち上がりは緩く、皿形状の断面をなす。なお、この溝の内側にあたる北側では、SX011の埋没後に掘り込まれる多数のピットが認められた。

出土遺物(第25図43～46)43・44は土師質土器の鍋で、43は体部の下位の破片である。煤の付着する外面には底部へ移行する鈍い稜線があり、刷毛目調整が残る。44は直立する口縁部の上端に吊り手用の耳を貼付し、孔を穿つ。ナデ調整で仕上げ。45は長さ5.5cmの管状土錘で、やや瓦質の焼成



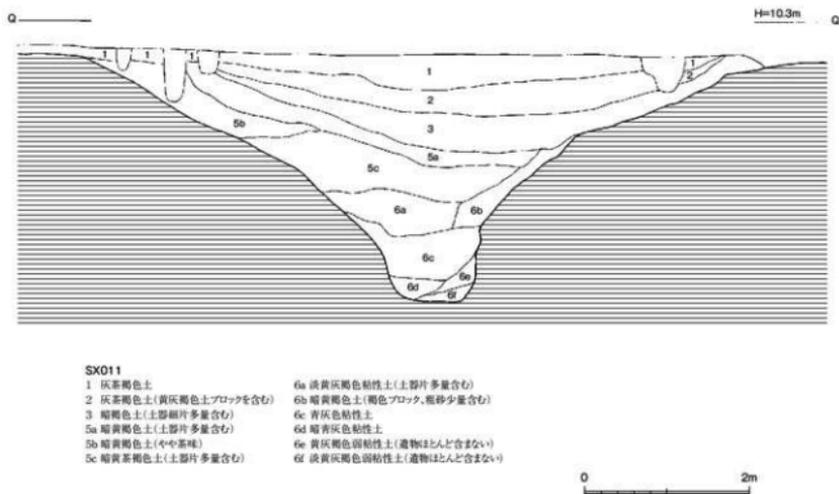
第26図 SD024・025・026・034 実測図 (1/40) および SD024・026・034 出土遺物実測図 (1/4)

である。46は白磁碗で、畳付きの軸を削り取って露胎とする。胎土は粗く、軸はやや青味がかかる。他に土師器や青磁等が出土している。

SD024・025・026 (第4・26図) 調査区の北東部に検出した。当初は矩形に折れる1条の溝として掘り下げを進めたが、サブトレンチ(N-N'土層)の観察結果等から3条の溝が重複することが判明し、全体を徐々に下げながら、それぞれの識別に努めた。後出順に024、025、026と呼称する。おおむね024が北側、026が南側、025がその中間に位置するが、ほぼ同一箇所に重複して所在することから、掘り直しによるものと考えられる。なお、西側では全てがSD022に切られる。また、西端が最も延びるSD024は後述するSX011と重複するが、その端部は同遺構の1・3層を除去した5層で確認し得た。全体としてこれら3条の溝は、北側を囲むように弧状を呈するが、当初に掘削されたSD026の南東部は屈曲する。それぞれの溝の幅は0.5m前後、深さは0.4m前後を測り、底面の標高はおおよそ南東部をピークとして北側および西側に向かって低くなる。なお、SC033の項で言及したように、これらの溝はその北側で確認した複数の竪穴住居の外周溝であったことが想定される。以下、報告する出土遺物は帰属が明確なもののみとし、上層掘り下げ時の混在の可能性が高い遺物は除外している。なお、SD025は弥生土器の細片が数点出土したにとどまる。それぞれの溝からの出土遺物は少ないが、弥生時代終末期前後に掘削された溝であろう。

SD024 出土遺物 (第26図47・48) 47は弥生土器の甕で、凸レンズ状の底部から鈍い稜をもって体部が続く。器面の大半は磨滅するが、外底部には刷毛目調整が残る。48は碗形を呈する丸底の鉢で、口径16.2cm、器高6.2cmを測る。器面は風化する。他に弥生土器や土師器の細片が出土した。

SD026 出土遺物 (第26図49～51) いずれも弥生土器で、49は複合口縁壺の口縁部片で、端部は欠損するが、口縁上部をつまみ出す。50は短い口縁部が付く鉢、51は高坏の脚部である。いずれも器面が荒れる。他に甕等の細片が出土している。



第27図 SX011実測図(1/60)

SD034 (第4・26図) 調査区北東端のD-E-3に位置する東西方向の直線的な溝である。幅約0.4m、深さ約0.15m、延長6.0mを測る。断面は船底状を呈し、底面は西側に向かって傾斜する。

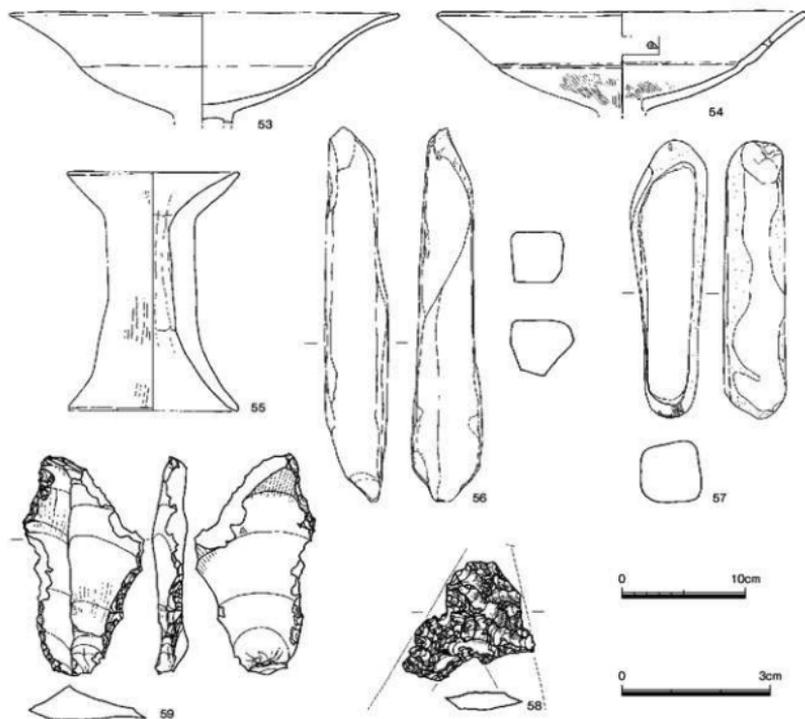
出土遺物 (第26図52) 平底の弥生土器甕で、体部との境界の稜線は鈍い。器面が著しく風化する。他に弥生土器が少量出土しているが、いずれも細片である。

5) 谷 (SX)

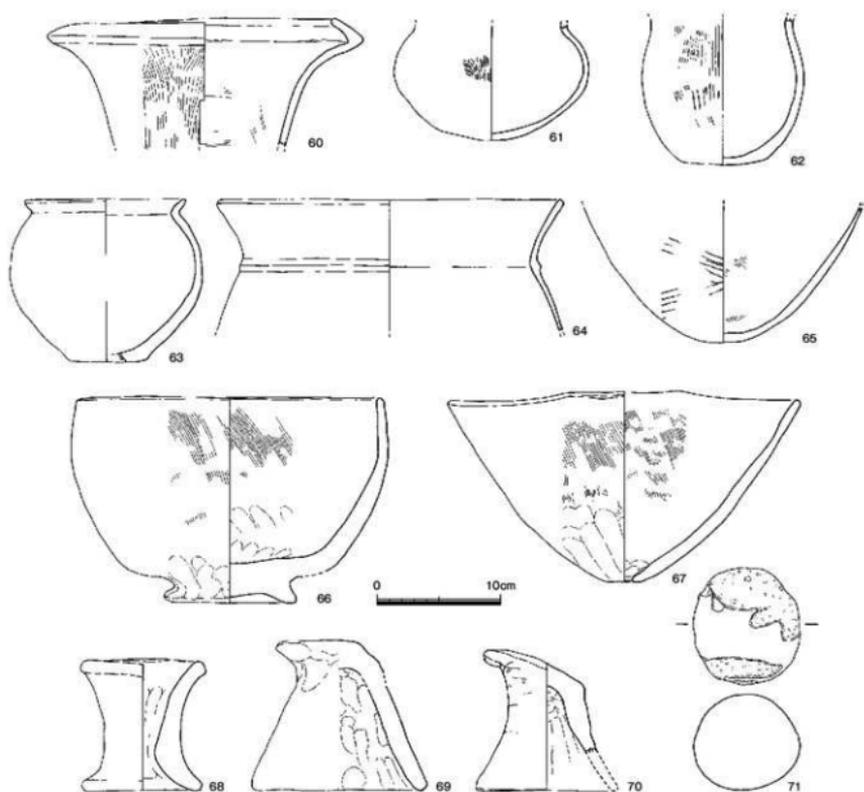
ここでは「Ⅲ-1.概要」で触れた調査区中央部に占地する南北方向の谷 (SX011) を報告する。

SX011 (第4・27図) 調査区南東部のD-7付近に谷頭があり、調査区南側では浅い窪み状を呈する (後述の「S」)。また、北側では東西方向の段落ち下では削平により不明瞭であるが、C-D-5では谷地形が浅く残り (「N-1」)、その北側では等高線が示すとおり急傾斜をもって深い谷部を形成する (「N-2」および「N-3」)。調査区の北端で谷幅は約10mを測り、更に調査区外へ開く。なお、この北側部分は第9次調査第1～4地点で調査が行われている。

第27図は谷部北端近くの東西方向 (Q-Q') の土層図で、上面からの深さは約3mを測る。自然堆積により埋没が進んでおり、下層は粘性が顕著な6層群、中層の多くは5層群が占め、上層の1～3層で谷部が埋没する。また、4層はこの土層の北側 (「N-3」) の3層と5層の間に認められた暗灰褐色



第28図 SX011出土遺物実測図 (1) (58・59は1/1、他は1/4)

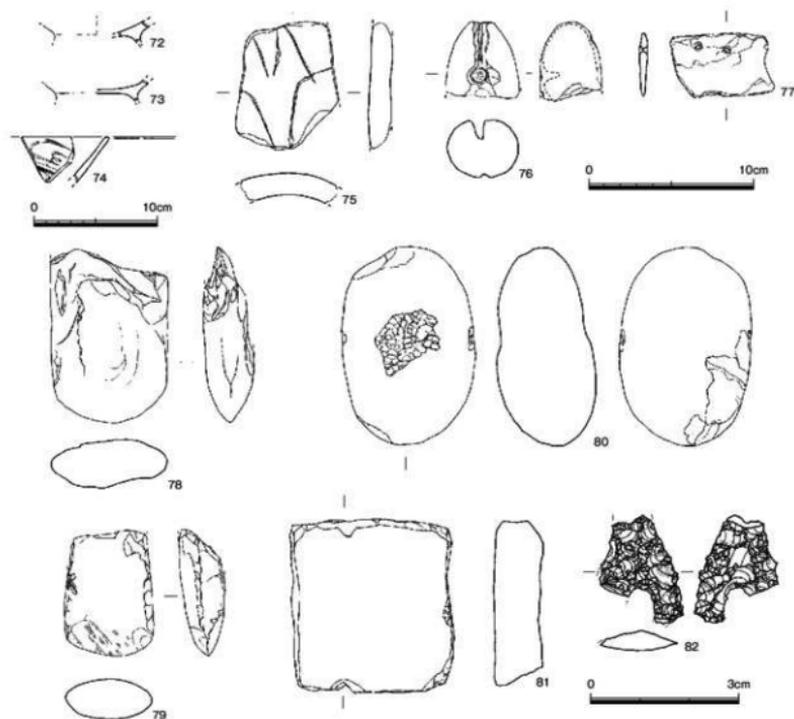


第29図 SX011 出土遺物実測図(2)(1/4)

の粘性シルトである。なお、調査区北端の谷底の最深部の標高は5.9mで、底面付近の地山は黄灰色粘性土、その上位は遺構検出面まで黄褐色土である。

出土遺物量はコンテナケース 200箱以上で、大半が北側部分からの出土である。最下層では弥生時代後期後半、最上層では中世前半の遺物を含み、埋没の開始と終了の時期を窺い知ることができる。第4図C・D-3・4のSX011に重なって図示されているピットは、埋没後もしくはその直前の遺構で、また先述した15世紀代のSK031は埋没後の上面で検出した土坑である。

以下報告する出土遺物の調査時における取り上げは、平面的な位置と層位をもとに行った。位置は、上述したように調査区南側の谷頭を含む浅い谷地形部分を「S」、北側はSD022の南側の浅い谷部を「N-1」、その北側のうち、先の土層図化箇所をおおよそ境にその南側を「N-2」、北側を「N-3」とした。これらと組み合わせる層位であるが、SおよびN-1では浅い茶褐色土1層のみの堆積である。N-2およ



第30図 SX011出土遺物実測図(3)(82は1/1, 72~74は1/4, 他は1/3,)

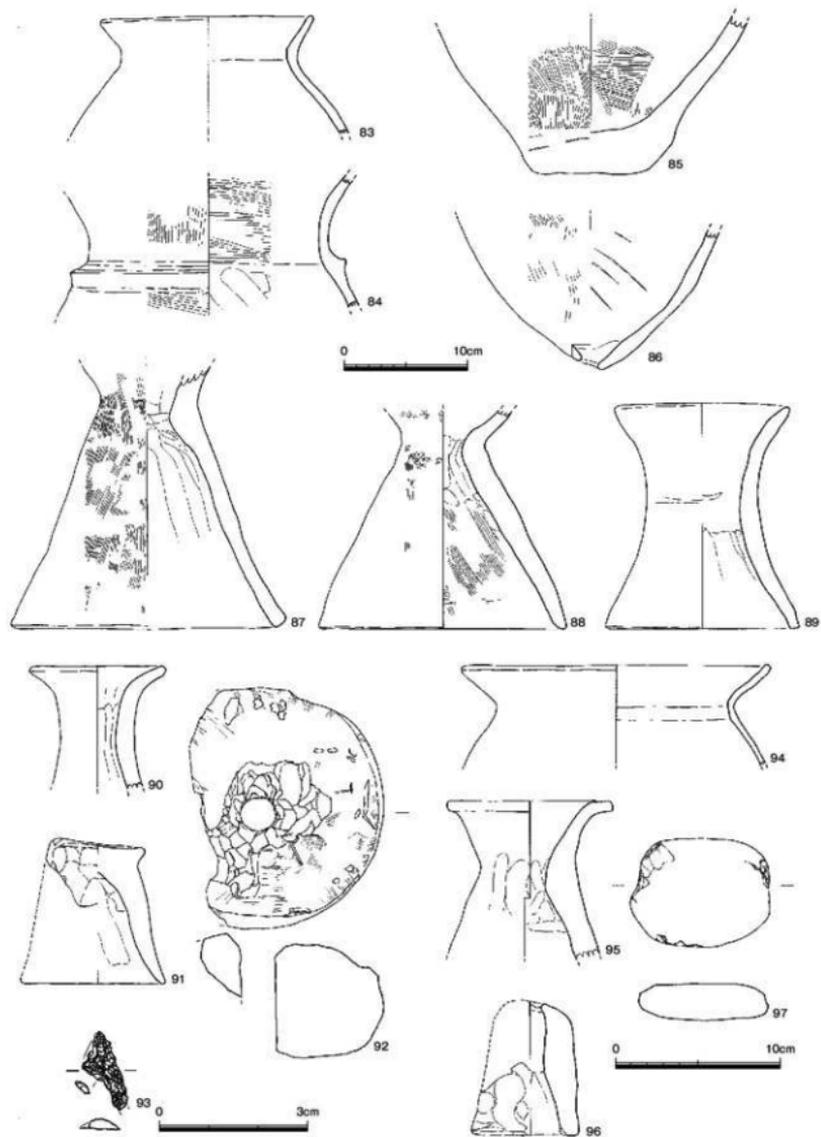
びN-3では、第27図に示した土層をもとにおおよそ、1層→1層、2層→2層、3層→3層、4層→4層、5a・b・c層→5層、6a・b・c層→6上層、6d・e・f層→6下層として取り上げを行ったが、2層、4層、6層群はN-3のみに認められる土層である。また、N-2での最も下層となる5層では最下層部分のみを5下層として取り上げた。よって、遺物の取り上げは、N-2では上層より1、3、5、5下層の4区分、N-3では上層より上述の1層以下順に6下層までの7区分で行った。

出土遺物の多くは、弥生時代後期後半から終末期の弥生土器であるが、土製品、滑石製品、鉄製品等を含む。また、5層以下では遺存状態の良い個体が多く、終末期前後に台地上の集落から多量に廃棄されたものと想定される。

出土遺物(第28~56図)遺物の掲載および記述は上述の遺物取り上げ層位に基づき行うが、N-2の3層のみ細片が多く図化遺物がない。

1層(第28・29, 30図72~81) S、N-1、N-2、N-3の1層遺物を報告するが、前二者の1層(単一層)と後二者の1層(最上層)とは色調が異なることから同一時期の堆積層ではないことが予測される。

53~58はS出土である。このうち、53~55は弥生土器で、53・54は高坏、55は器台である。53・54



第31図 SX011 出土遺物実測図(4)(93は1/1、97は1/3、他は1/4)

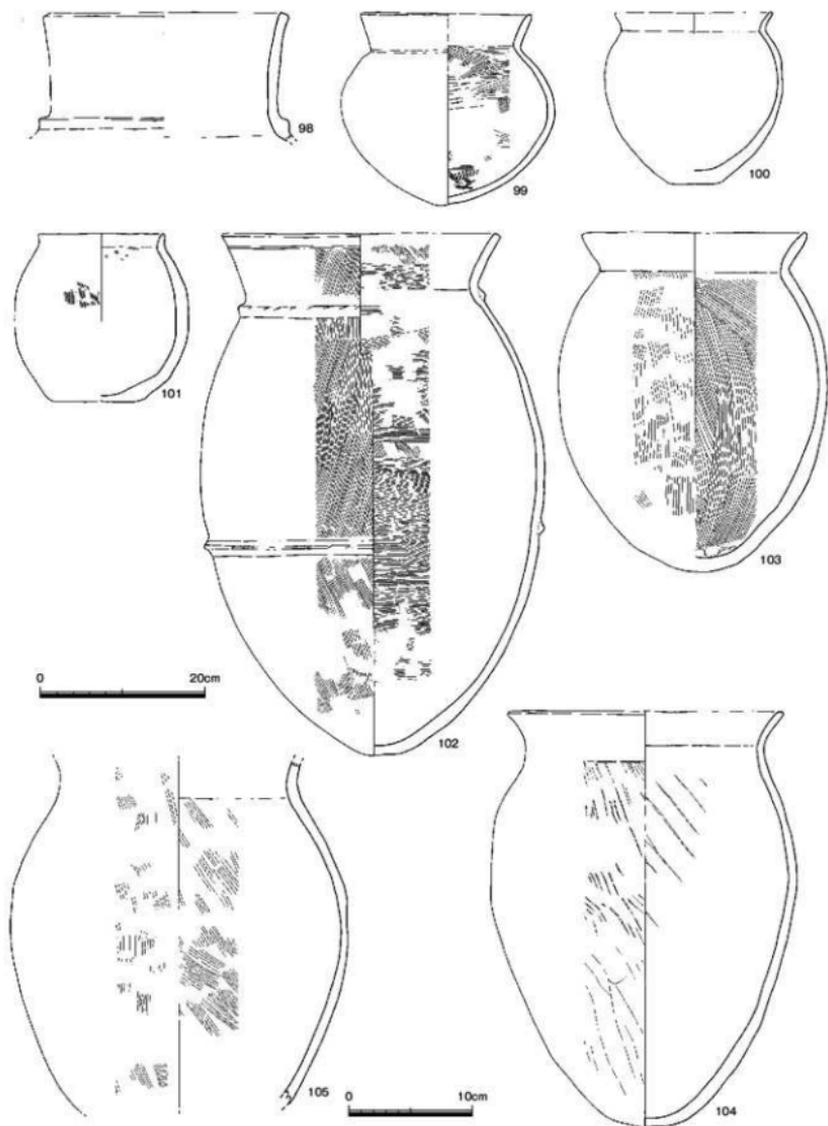
は坏部の中位に屈曲部を有し、外反気味の口縁部が付く。54の口縁部には焼成後の穿孔が認められる。55は円筒形の器台で、受け部と脚部の境界は比較的明瞭である。56-57は大形の断面方形の砥石で、各面が砥面として使用される。56は粘板岩、57は変成岩系である。58は黒曜石製の打製石鎌で、先端部および基部の大半が欠損する。N-1出土で図化し得たものは59のみである。黒曜石製のナイフ形石器で、長さ4.5cm、幅2.4cm、重量5.67gを測る。第29図は全てN-2出土で、71を除き弥生土器である。このうち、60-63は壺である。60は複合口縁壺で、傾斜の強い口縁上部は僅かに外湾する。外面には粗い刷毛目調整を施す。61は扁球状の胴部を呈し、丸底に近い。62は凸レンズ状の底部に張りのない胴部が続く。上半部外面には刷毛目が残る。63は短い口縁部の広口壺で、底部は平底である。64-65は甕で、共に器壁が薄い。64は頸部に断面三角形の低い突帯を貼付する。器壁が薄い。丸底の65は器面の大半が剥落するが、内外面に刷毛目が残る。66-67は鉢である。66は深みのある器形で、底部には指オサエが明瞭に残る高台状の台が付く。外底部には筋状の圧痕が認められる。内外面に刷毛目調整を行う。67の体部は大きく開き、尖底状の底部には焼成前の穿孔を有する。内外面共に上半は刷毛目、下半は指ナデを施す。68は天地不明の小形の円筒形器台で、器高10.8cmを測る。69-70は杵形の支脚である。69の頂部は傾斜がほとんどないが、70は強く傾斜し、突起が長い。共にナデや指で調整する。71は7.8-8.5cmを測る玄武岩製の敲石で、図の上下両端部を敲打具として使用する。72-81はN-3出土遺物である。72-73は土師器碗、74は龍泉窯系青磁碗I類で、内面に片彫りによる文様を施す。75は土師質焼成の土製品で、外面にヘラ状工具による施文を有する。形象埴輪であろうか。76-81は石製品である。76は淡黄白色の石材を用いた石錘の未成品である。円錐状を呈するものと思われるが、基部を欠損する。両面からの穿孔途中であり、縦断方向の溝も全周しない。77は凝灰岩製の石庖丁の破損品、78-79は玄武岩製の磨製石斧で、基部を欠損する。80は花崗岩製の凹石で中央部に敲打を受けた痕跡が認められる。また、側縁にも同様の痕跡が僅かに残る。81は断面方形の砂岩製砥石で、図表面のみを砥面として使用している。

2層(第30図82) N-3出土の黒曜石製打製石鎌で、先端部および基部を欠く。他に古墳時代の須恵器の細片等が出土している。

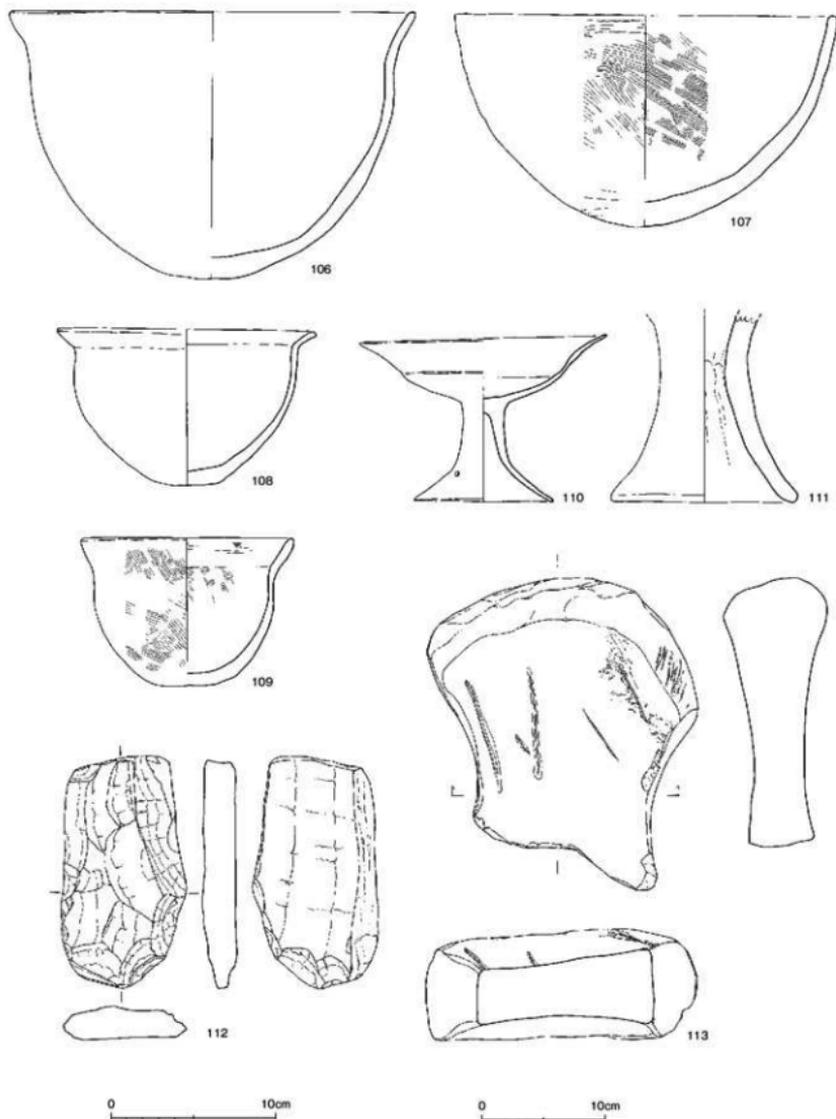
3層(第31図83-93) 全てN-3からの出土遺物である。83-91は弥生土器で、83-84は壺である。83は短い口縁部が開く。84は頸部に断面三角形の突帯が巡り、内外面に刷毛目を施す。口縁部は端部に近いものと思われる。85-86は甕で、85の底部は厚手で不安定な平底を呈し、外面は縦、内面は横方向の刷毛目調整を行う。86は67と類似した器形で、尖底状の底部には同様の穿孔が認められる。鉢の可能性もある。外面は刷毛目、内面はヘラナデを施す。87-90は円筒形の器台である。87-88は受け部と脚部の境が上位にあり、強く窄む。刷毛目や指ナデ調整を行う。89-90は上下対称に近い器形を呈するものである。91は杵形支脚で、指オサエによって頂部端を引き出す。なお、一部ののみ引き出しを施さないため、摘み状を呈する箇所がある(図左側)。なお、頂部に傾斜はほとんどなく、上面は凹面を呈する。92は滑石製の石錘で、欠損するものの、断面楕円形状を呈するものと推定される。中央部には径2.9cmの孔を有する。残存重量は3,650.0gを測る。93は基部の一方を欠損する黒曜石製の打製石鎌である。他に古墳時代と思われる須恵器の細片等が出土した。

4層(第31図94-97) 94は畿内系の土師器甕で、口縁部は僅かに内湾する。頸部の稜線は鈍い。器壁は薄いが、器面の風化により調整は不明である。95-96は弥生土器で、95は厚手の円筒形の器台である。96は杵形支脚と思われるもので、頂部に孔を有する。胎土には砂粒を多く含む。97は両端部を打ち欠いた石錘で、重量210.3gを測る。玄武岩製と思われる。

5層(第32-42図) このうち、第32-34図がN-2出土、他はN-3出土である。なお、第34図は先

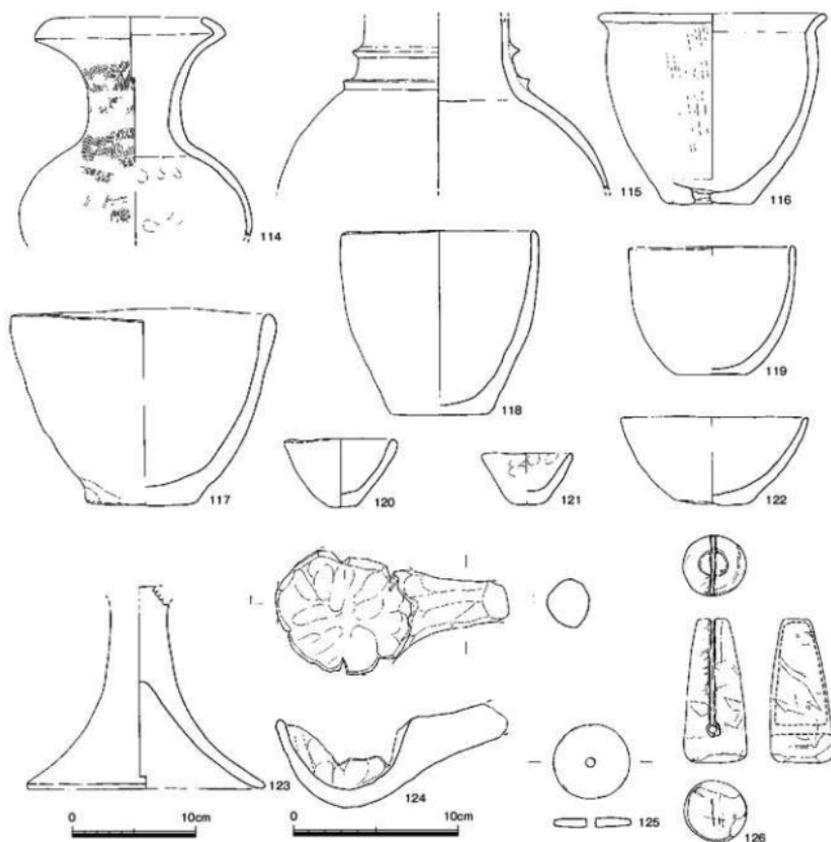


第 32 図 SX011 出土遺物実測図 (5)(102 は 1/6、他は 1/4)

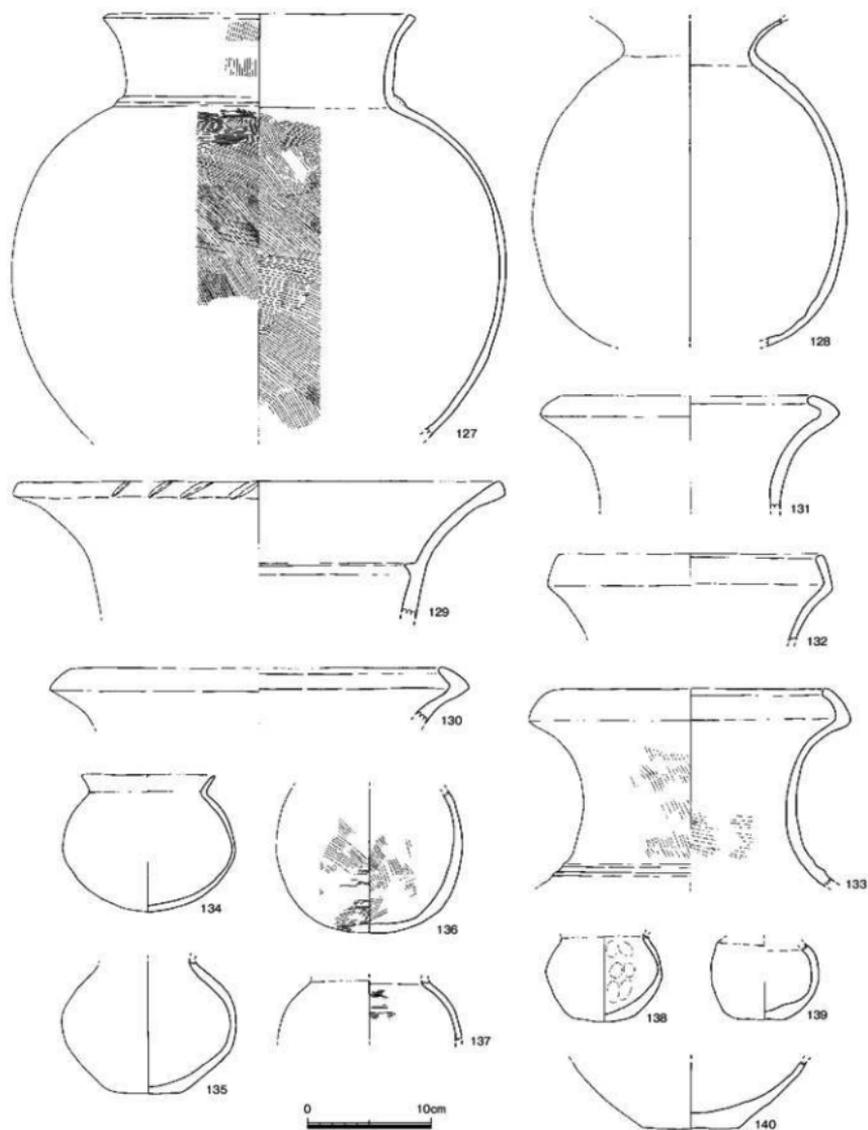


第33図 SX011 出土遺物実測図(6)(112は1/3、他は1/4)

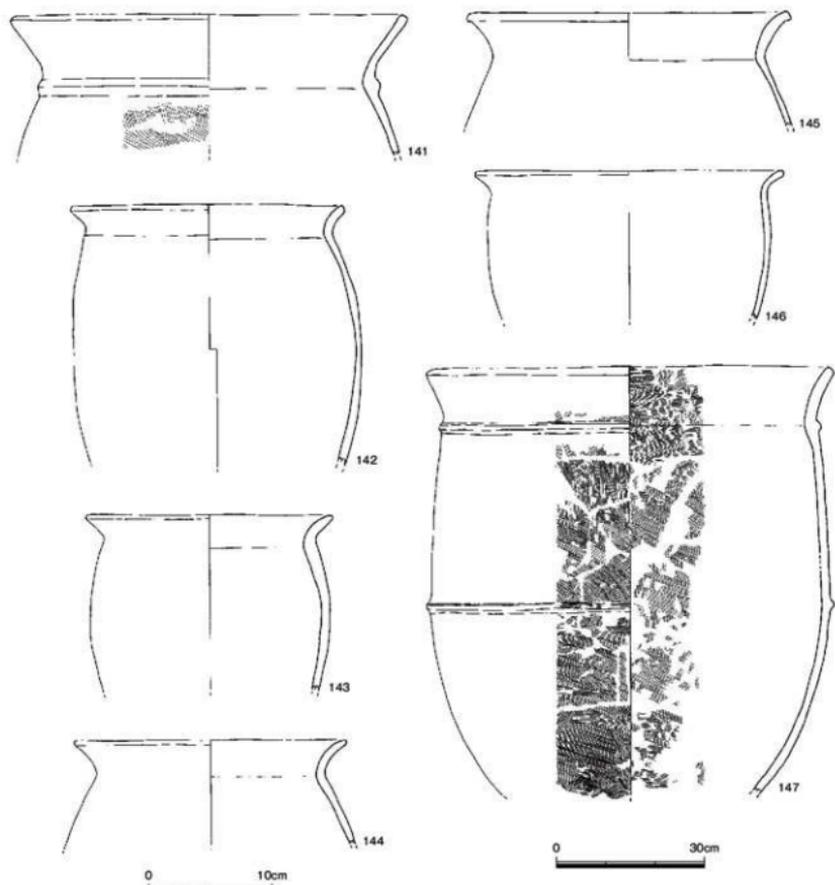
述したN-2の5下層出土である。第32-33図は5下層を除くN-2の5層出土遺物で、112-113を除き、弥生土器である。98～101は壺である。98は直立する口縁部をなし、頸部に断面三角形の突帯が巡る。99～101は短頸部の広口壺で、順に口縁部の長さが短く、胴部の張りは弱くなる。底部は順に丸底、小さな平底、大きな平底である。壺はいずれも器面の風化が進むが、99の内面および101の外面には刷毛目が残る。102～105は甕である。底部が遺存するものはいずれも丸底で、「く」字状の口縁部の屈曲部はいずれも稜が鈍い。内外面に刷毛目調整を行うものが多いが、104の内面にはヘラナデによる工具痕が認められる。103のみ胴部に張りがあるが、他は長胴である。大形の102は頸部に断面三角形の低い突帯を貼付し、数cm間隔でヘラ状工具により刻目を施す。また、胴部の下位にも突帯が巡るが、断面台形状を呈する。また、外面の口縁部下には沈線を施す。口径34.2cm、器高64.7cmを測



第34図 SX011 出土遺物実測図(7)(124～126は1/3、他は1/4)

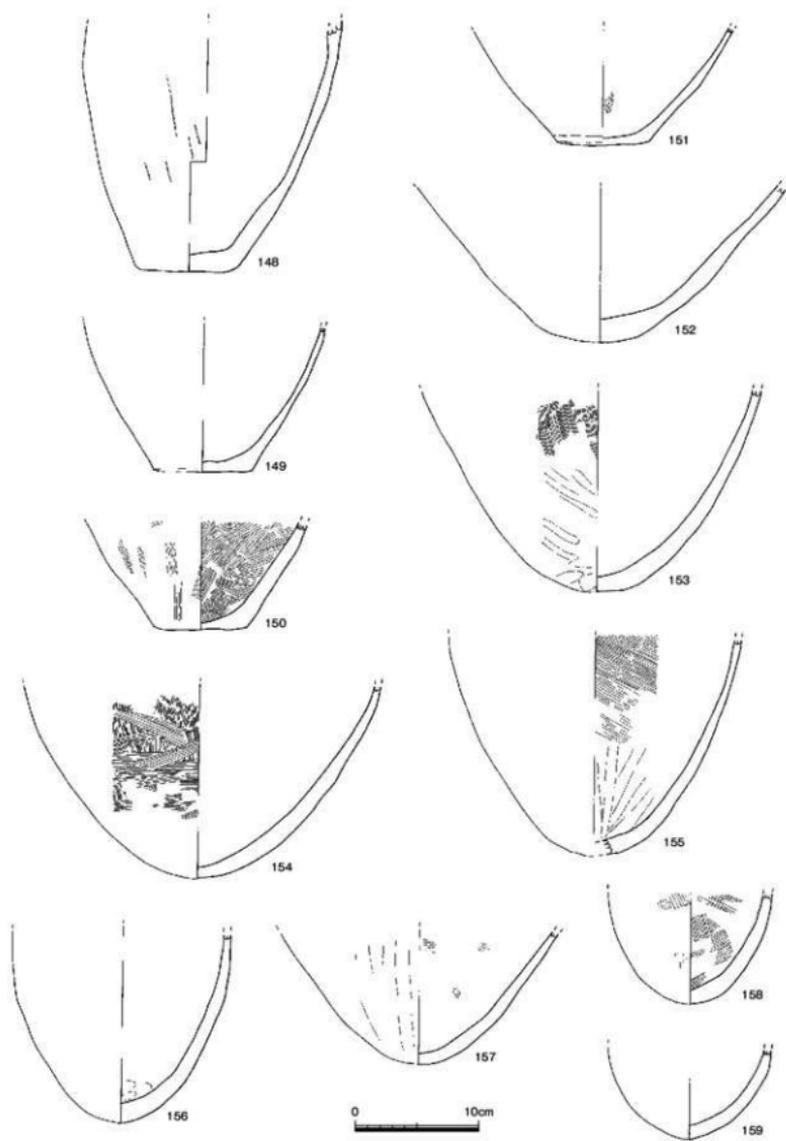


第 35 图 SX011 出土遺物実測図 (8)(1/4)

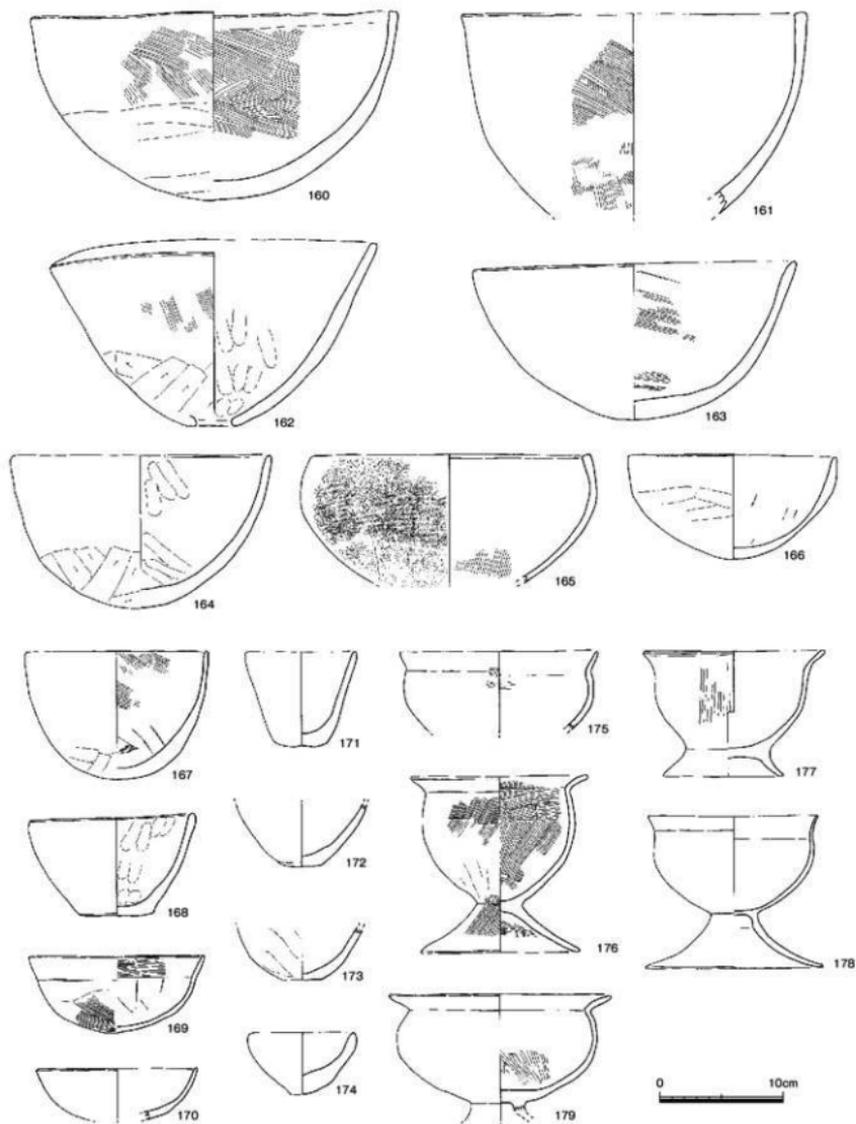


第36図 SX011出土遺物実測図(9)(147は1/10、他は1/4)

る。106～109は鉢で、107のみ椀形を呈する。他は外反する口縁部を有し、108を除き外反の度合いが緩く、立ち上がる形態をなす。底部は106・107が丸底、他は不安定な平底である。器面が荒れるものが多いが、107・109は内外面に刷毛目調整が認められる。110は坏部の中位に屈曲部があり、外反して広がる口縁部が続く高坏で、脚部には円形の透かし孔を有する。111は受け部を欠く器台である。112は剥片素材を利用する玄武岩製の打製石斧未成品である。刃部先端には自然面が残る。113は砂岩



第 37 图 SX011 出土遺物実測図 (10) (1/4)

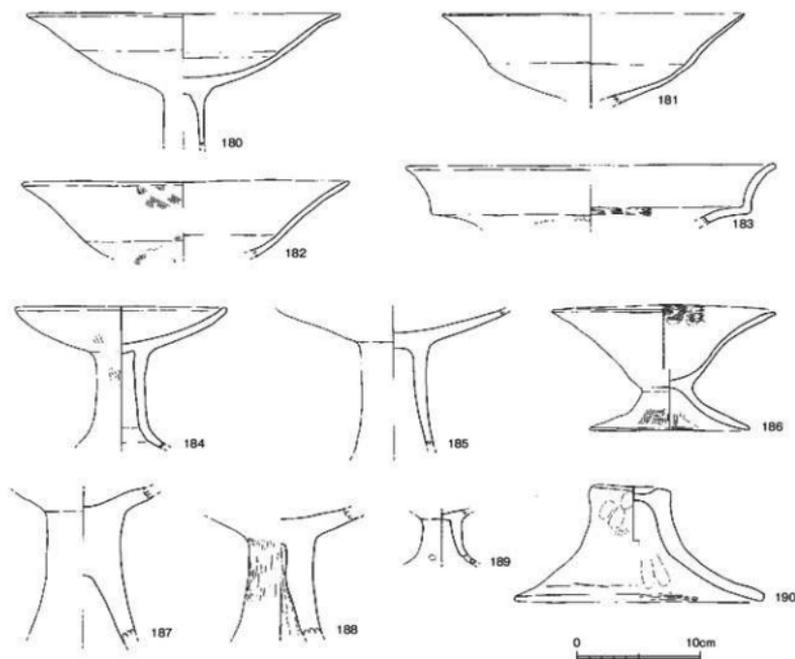


第 38 图 SX011 出土遺物実測図 (11)(1/4)

製置き砥石である。図下の割れ面を除き、砥面とする。筋状の研ぎ痕が認められる。

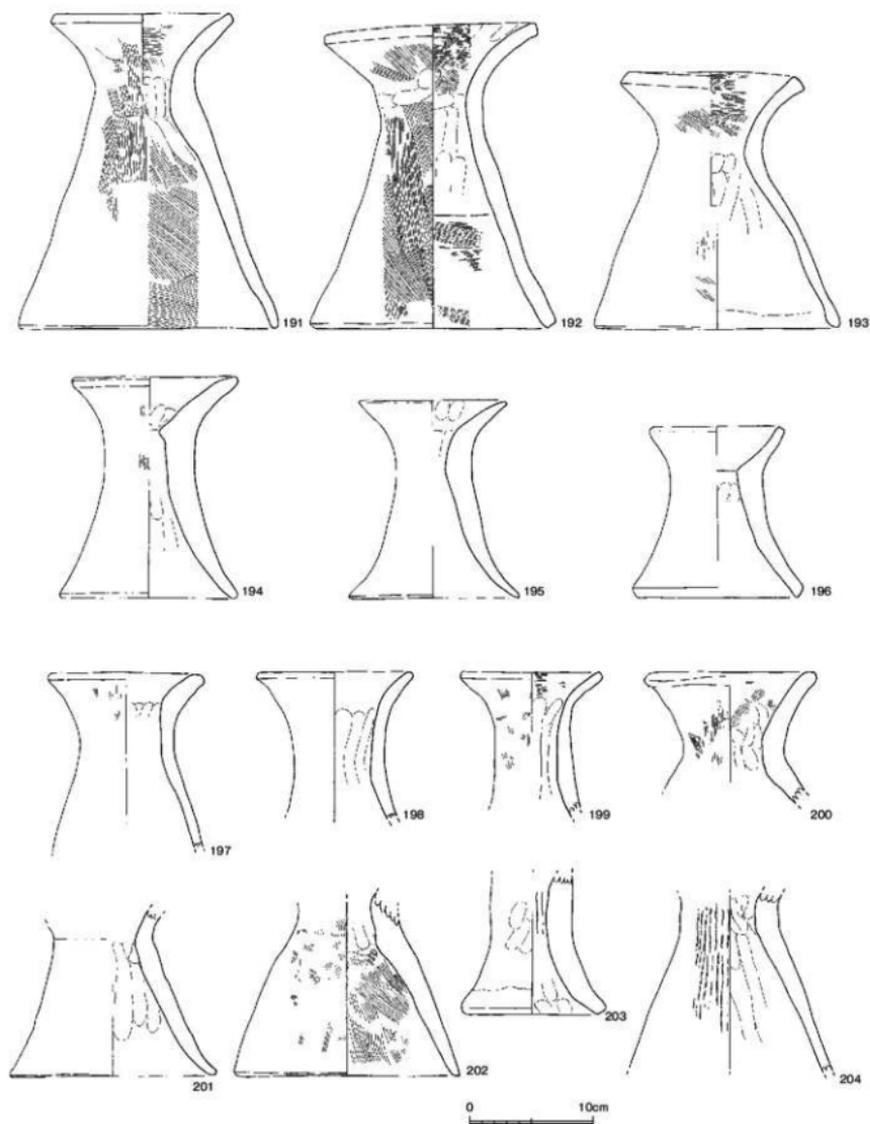
第34図はN-2の5下層出土遺物である。このうち114～123は弥生土器で、114・115は壺である。114は複合口縁を呈するもので、頸部が強く窄む。傾斜の強い口縁上部は僅かに外湾する。外面には細かい刷毛目調整を施す。115も同様の口縁部を呈するものと推定され、頸部には断面三角形の突帯が2条巡る。器面が荒れる。116～122は鉢で、116のみ外反する口縁部を有し、他は単口縁である。底部は116～119が平底、120～122は僅かに凸レンズ状を呈する。116の底部には焼成前の穿孔を有する。小形の120はナデ、121は指オサエで整形する。他は器面が剥落し、調整は不明であるが、116の外面には僅かに刷毛目調整の痕跡が残る。123は高坏の脚部で、裾部との境界は明瞭でない。124は杓子形の土製品で、頭部は指オサエを施す。欠損する柄部には鈍い面取りを行う。125は径4.6cm、孔径0.5cm、厚さ0.6cm、重量20.2gを測る滑石製紡錘車である。126は円錐状の滑石製石鐘で、基部近くに孔を有し、そこから先端部にかけて溝を配する。基部および頂部は平坦である。高さ8.8cm、重量183.2gを測る。

第35～42図はN-3の5層出土遺物である。第42図を除き弥生土器で、第35図は壺である。127は大形の広口壺で、内外面を刷毛目調整する。頸部の突帯は低い。128は畿内系のもので、薄手の器壁である。黄灰色の色調を呈し、器面は風化する。129は大きく開く口縁部内面に断面三角形のシャープな

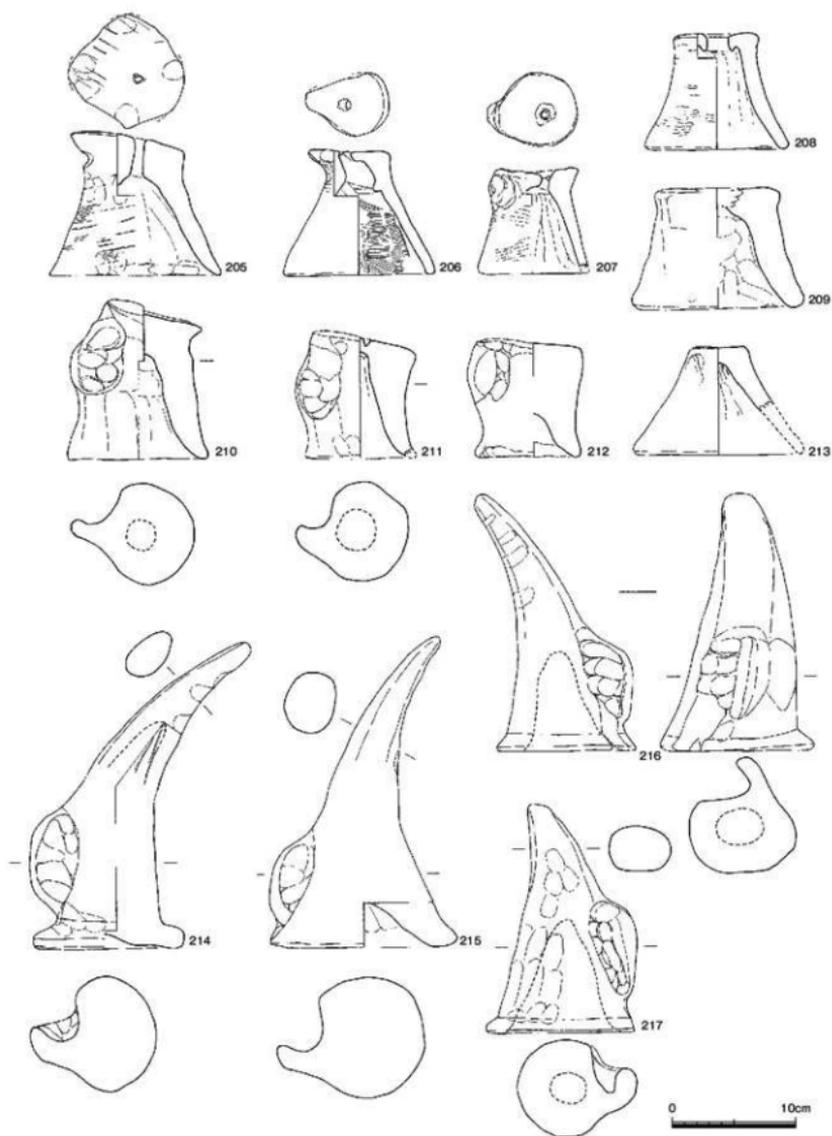


第39図 SX011 出土遺物実測図 (12) (1/4)

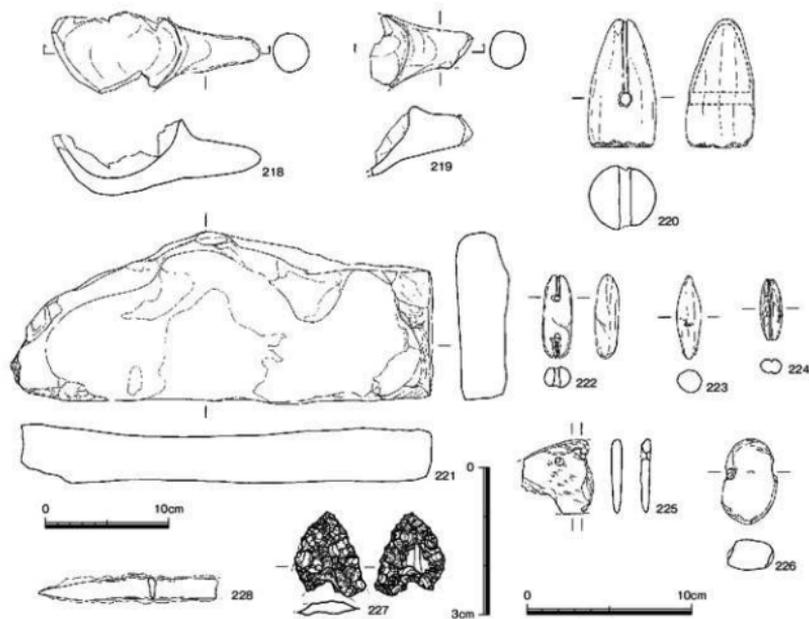
突帯を貼付し、口唇部には太目の刻目を施す。130～133は複合口縁帯で、132を除き口縁上部が強く傾斜して外湾する。大半の器面は荒れるが、133の内外面の一部に刷毛目が認められる。134～139は短頸の広口壺と思われるもので、137を除き底部が遺存するが、135-139は平底、他は丸底に近い。淡黄褐色を呈する134は薄手の器壁で、器面が風化するものの、内面にはヘラ削りによるものと思われる砂粒の動きが認められる。136は内外面に粗い刷毛目調整を施す。140は平底の底部である。第36・37図は甕で、器形全体が判明する個体ない。第36図は「く」字状の口縁部が遺存するもので、147を除き中形の甕である。類似した長胴の形態をなすが、146は胴部の張りが弱い。141のみ頸部外面に断面三角形の低い突帯が巡る。また、141の外面の一部に刷毛目が認められる他は器面が風化し、調整は不明である。大形の147は甕楕で、全体の1/3程度が遺存する。復元口径82.0cm、残存器高87.5cmを測る。緩く外反する口縁部に長胴の胴部が続く。頸部下および胴部中に断面台形の低い突帯を貼付する。口縁部外面をヨコナデする他は比較的細かい刷毛目を内外面に施し、胴部突帯の上面にも刷毛目が認められる。第37図は底部が遺存するもので、148～150は平底、151・152は凸レンズ状平底、153～159は丸底である。なお、151は平底に、152は丸底に近い。調整は器面の風化により不明な個体が多いが、内外面に刷毛目調整を施すものが多い。155の内面下半や157の外面下半にはヘラナデを加える。150は内底部まで刷毛目調整を行う。第38図は鉢で、このうち175～179は脚台付である。台のない160～174は169・171を除き、単口縁で碗形を呈するものが多い。薄手の169は鈍く外反する口縁部を有し、屈曲部の内面には稜が認められる。171はコップ状をなす。また、大形(160～163)、中形(164～166)、小形(167～170)、ミニチュア(171～174)の大小があり、底部は丸底が多いが、168は平底、171～173は不安定な平底である。調整は174のみ手捏ねで、他は刷毛目やヘラナデを施すが、口縁部が内傾する165は体部外面の上半に横方向の叩き目が認められる。脚台付の175～179の口縁部はいずれも外反し、179は外反度が強い。脚台の形状は177が高台状を呈し、176・177は裾部が広がる。刷毛目調整が多い中、179の鉢部内面の下半には縦方向のヘラ磨磨が認められる。176では両端部にヨコナデ、他は刷毛目調整を施すが、体部の外面下半にはヘラ削りを行う。第39図は190を除き、高坏である。坏部が遺存するものでは、180～182は屈曲部から大きく外反する長い口縁部が付き、183は直立気味の短い外反口縁を有する。184の坏部は浅く、口縁端部を僅かに内湾して納め、内面には沈線状の凹面がある。豊前系であろう。186は坏部と脚部が大きく開き、口縁部は外反する。坏部の内面と脚裾部に細かい刷毛目が残る。他は脚柱部が残るもので、189には円形の透かしを有する。190は蓋で、天井部が窪む。器面が荒れるが、内面端部には横方向の刷毛目、外面の上位には指オサエが残る。第40図は器台で、191～196は器形全体が遺存するものである。全て受け部と脚部の境界となるくびれが上位にあり、191～193の大形品は外面の屈曲部が比較的明瞭で、脚部は直線的である。一方小形の194～196は緩く湾曲しながら脚部へと続く。また、小形品は器面が風化するが、大形品は内外面に刷毛目を施し、外面は縦方向、内面は横方向を主体とする。また、くびれ部は指による調整を行う。194・196の屈曲部内面には稜が認められる。197～200は受け部、201～204は脚部の破片資料である。202の脚部は外湾気味のカーブを描く。第41図は支脚である。このうち205～213は杵形の支脚で、形態から数タイプがある。まず、205・206は頂部から突起が延びるものである。傾斜する頂部の中央に円孔があり、突起部が高い。205の外面および頂部は叩き調整後、粗くナデを加える。206は外面の一部に叩き目を残すが丁寧にナデを加え、内面は刷毛目を施す。次に207、210～212は体部の上位に耳状の把手を指オサエによって作り出すもので、その両面が窪むもの(207)と片面だけが窪むもの(210～212)がある。207・210は把手部以外の頂部端を指で引き出す。207は頂部に孔を有し、凹面をなす。また、外面は叩き、内面は指ナデを施す。210の頂部は把手側が高い。211・212は円柱状



第40图 SX011 出土遺物実測図 (13)(1/4)

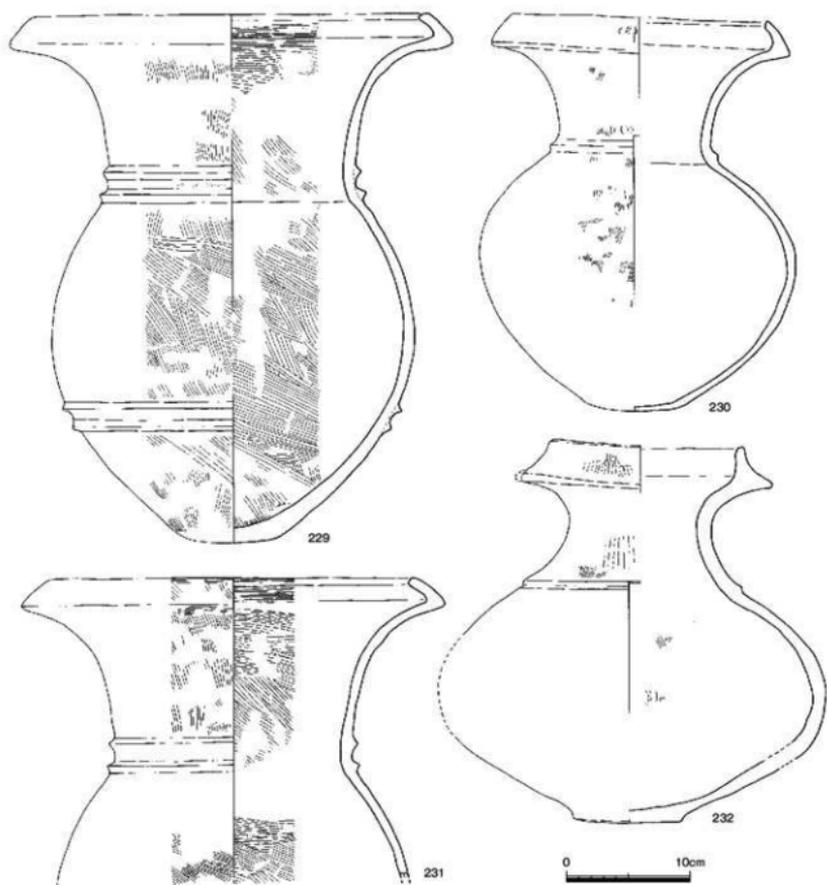


第41图 SX011 出土遺物実測図 (14)(1/4)



第42図 SX011出土遺物実測図(15)(227は1/1、221は1/4、他は1/3)

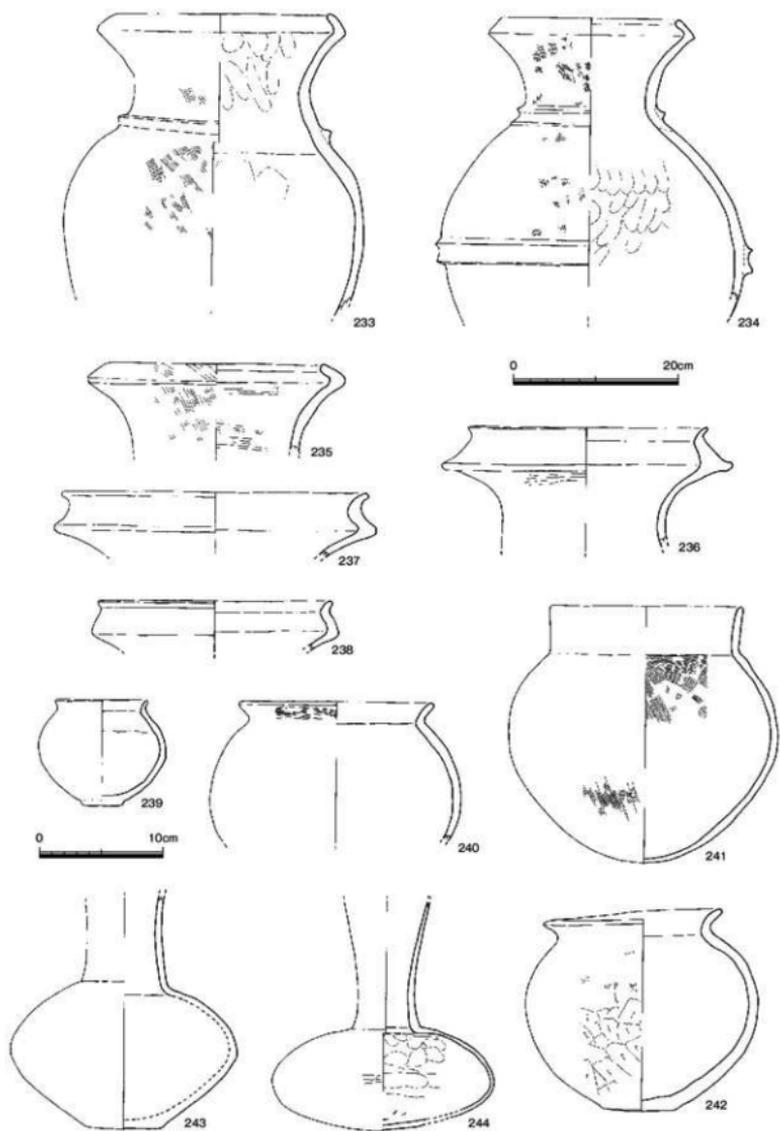
を呈し、頂部はほぼ平坦である。211は頂部に小孔が認められるが、貫通しない。212は上げ底で、裾部が僅かに広がる。共に器面が剥落する。最後に208・209・213は断面逆台形を呈し、突起や把手がないもので、208の頂部には円孔を外面から穿つ。調整は風化により不明瞭なものが多いが、208の外面には叩き目が残る。214～217は角形の支脚で、先端部が湾曲して延びる。その端部の断面は方形に近い楕円形を呈する。また、基部近くに耳状の把手を指オサエによって作り出し、片面だけが大きく窪む。内面は上げ底状のもの(214・215)と把手付近までを中空にするもの(216・217)がある。なお、214は折損により判明したが、先端部は中空であり、接合によって成形したことがわかる。いずれも器面が風化するが、指ナデや指オサエによる調整と思われる。216・217の把手側の外器面は二次的加熱により黒変しており、使用状況が窺える。第42図は土製品、石器、石製品、鉄製品である。218・219は杓子形土製品で、共にナデ調整を施す。218の頭部は深く、断面円形状の柄は先端部を丸く納める。219は頭部および柄部の大半を欠損する。220～227は石器もしくは石製品で、220、222～224は滑石製石錘である。220は円錐状を呈するもので、中央部に孔を有し、先端部にかけて溝を掘り込む。基部は平坦で、高さ7.8cm、重量181.0gである。222～224は紡錘形をなし、重量は順に195、123、6.5gを測る。222は2孔を穿ち、それぞれの孔から端部にかけて深めの溝を配する。223は断面円形状で、孔や溝はない。断面楕円形の224は縦方向に溝が全周する。221は砂岩製の置き砥石で、図表面を砥面とする。225は凝灰岩製の石応丁の欠損品で、直線刃である。226は軽石の両側縁を打ち欠いた浮子で、重量6.2



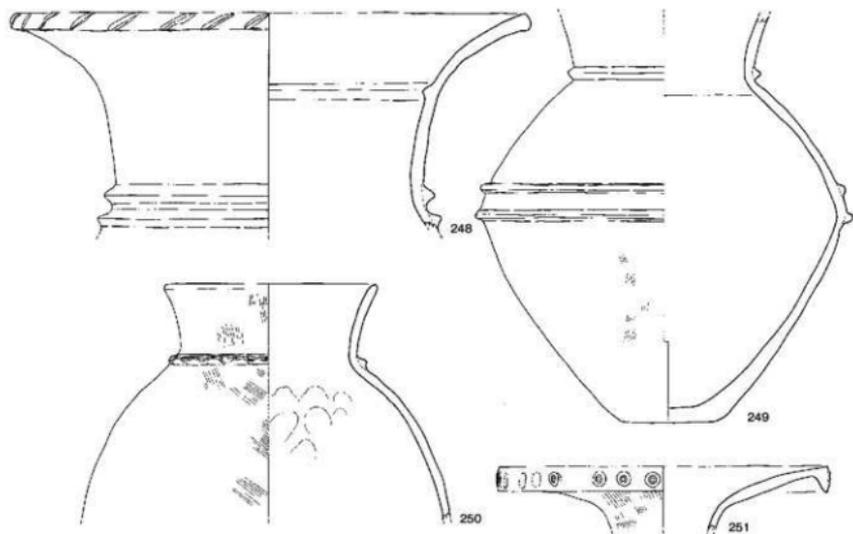
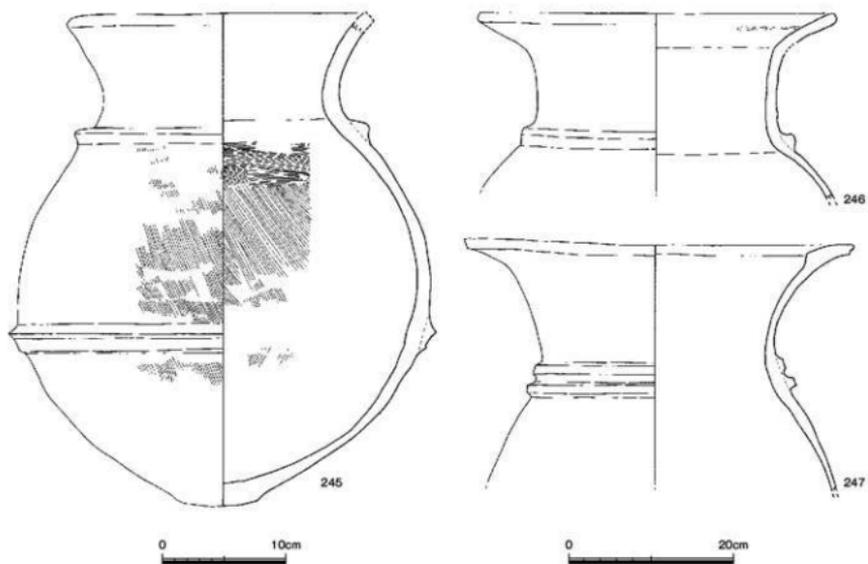
第43図 SX011 出土遺物実測図 (16) (1/4)

gを測る。227は基端を欠損する黒曜石製の打製石鏃である。228は錆化が著しい鉄製の刀子で、刀身の途中で折損する。

6上層(第43～54図)全てN3出土で、第46図252・253および第54図を除き弥生土器である。このうち、第43～45図は壺で、229～238は複合口縁壺である。229・230・232は器形の全容がわかる資料で、229・230の口縁上部は外湾して強く内傾する。頸部は胴部境界に巡る断面三角形の突帯に向かって窄み、229の突帯は2条、230は1条である。229の胴部は卵形を呈し、下半にも頸部同様の突帯を貼付する。230は球形に近い。底部は共に凸レンズ状を呈する。230は器面が風化するが、229は内外

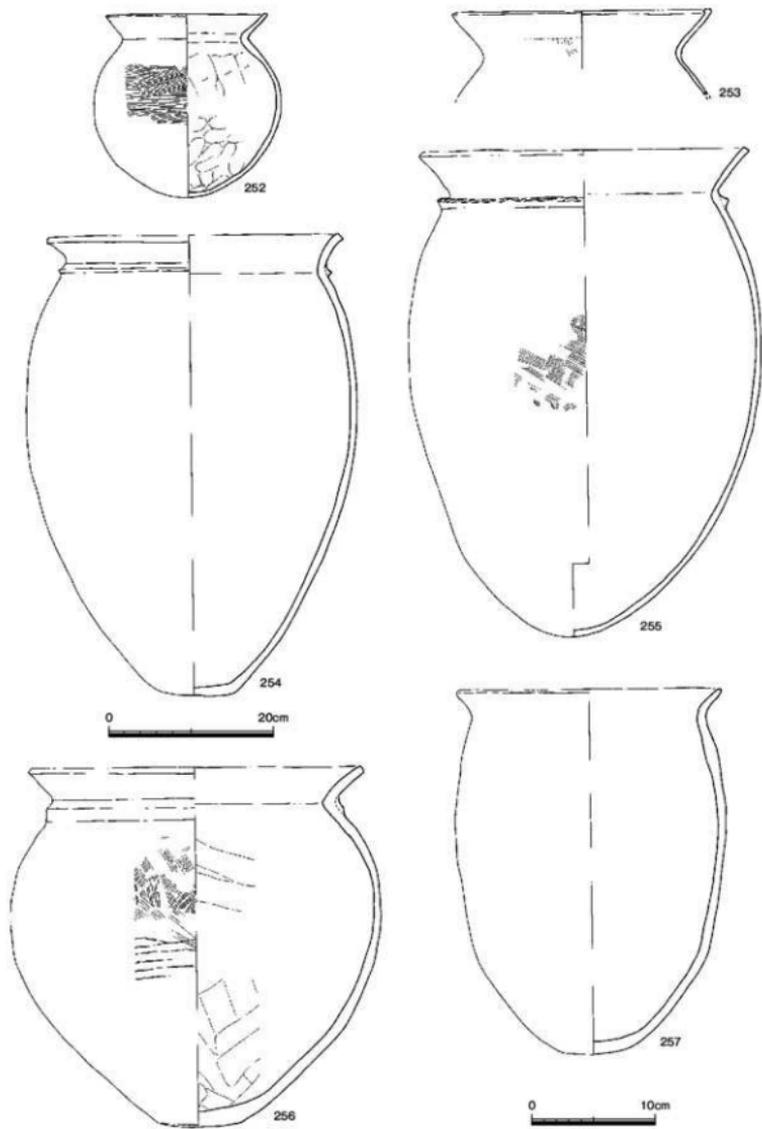


第44図 SX011 出土遺物実測図 (17) (234は1/6、他は1/4)

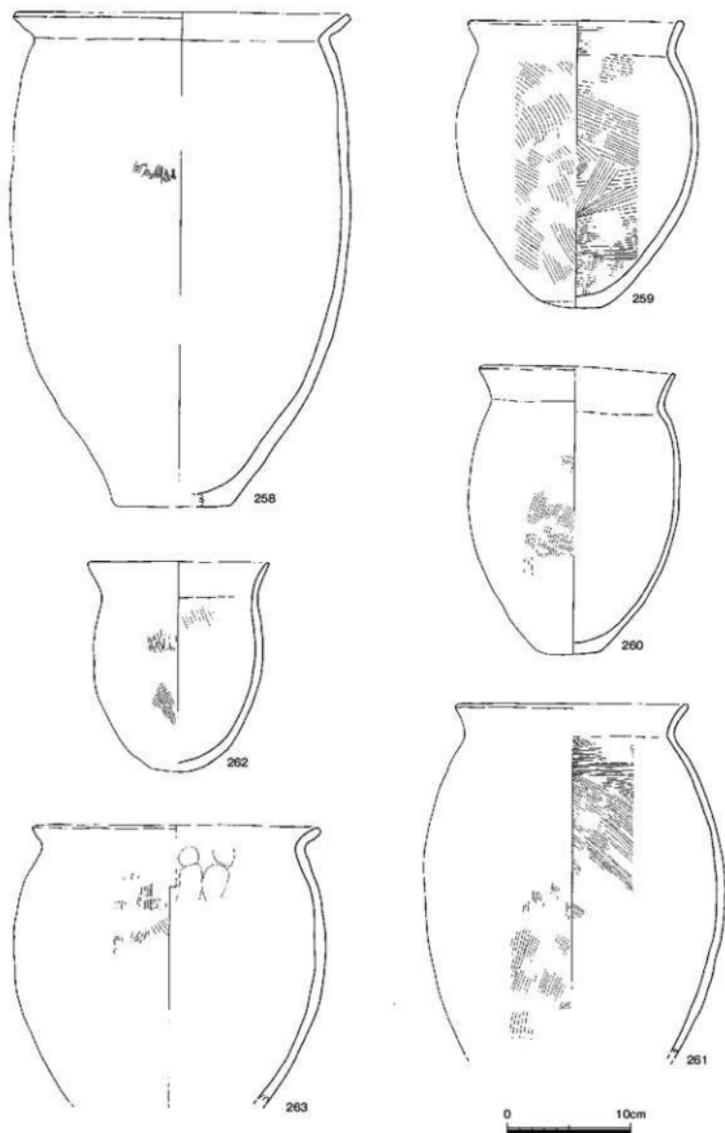


第45図 SX011出土遺物実測図(18)(246・247は1/6、他は1/4)

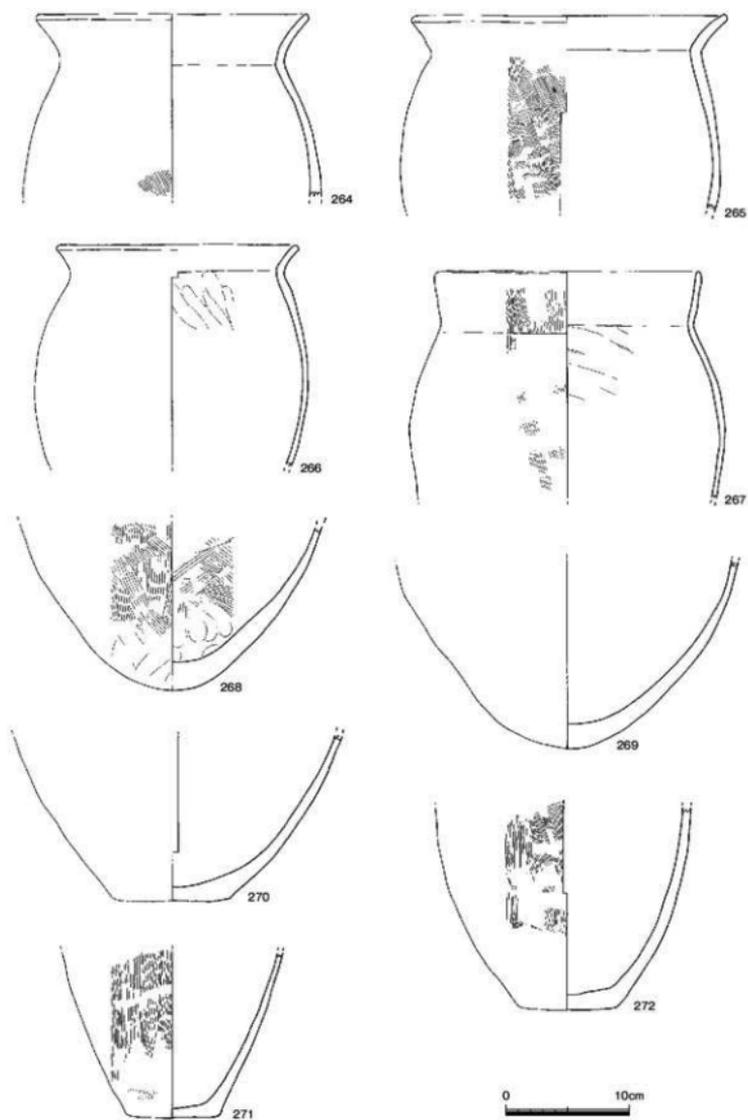
面に刷毛目調整を施す。232の口縁上部は内湾して直立し、頸部は口縁下で強く窄んで扁球状の胴部へと続く。肩部には低い突帯を配し、底部は円盤状の平底である。また、器面の大半は剥落するが、口縁上部および頸部には縦方向のヘラ研磨が僅かに残る。231、233・234は胴部下半を欠くもので、口縁上部は229・230と類似した外湾気味のカーブを描く。同様に頸部は胴部境界部に向かって窄み、1条もしくは2条の突帯が巡る。また、234の胴部には断面「M」字状の突帯を有する。外面は刷毛目、内面は指ナデや刷毛目を施す。235～238は口縁部および頸部の一部が遺存するものである。235の口縁上部は外湾して強く傾斜するが、他は内傾する端部を「く」字状に折る。239～242は小形の短頸および直口の壺である。このうち、241は丸底の直口壺で、器面の多くは風化するが、内外面の一部に刷毛目が認められる。底部付近の器壁は薄く仕上げる。他は口縁部を短く外反させる短頸壺で、底部が遺存する239・242は平底を呈する。243・244は長頸壺で、平底の243の頸部は直線的であるが、丸底で器壁が薄い244は胴部に向かって窄む。245～250は頸部下に突帯を有する広口の壺である。245は頸部から外反口縁が続き、胴部下半には断面「M」字状の突帯が巡る。内外面には刷毛目を施し、底部は凸レンズ状をなす。246～248は口縁部が大きく開き、246は更に折れる。247の口縁部内面には粘土を貼付し、口唇部は凹面をなす。頸部の2条突帯は断面方形状を呈する。248は口縁部外面に板木口によるものと思われる大振りな刻目を有し、頸部内面に突帯を貼付する。これらは器面の風化が著しい。口縁部を欠く249の胴部は算盤玉状を呈し、中位に断面方形の突帯が2条巡る。250は口縁部の外反が弱く、頸部の突帯には板木口による斜方向の刻目が施される。外面の一部には刷毛目調整が残る。251は垂下口縁を呈するもので、器台の受け部の可能性もある。外面には凹形浮文を貼付し、竹管文を施す。空間を挟んで3個連続を1単位とするが、1箇所のみ4個が連続する。瀬戸内系であろうか。第46～48図は甕で、252・253は畿内系土師器である。252は球形の胴部に外反する口縁部が付き、端部は丸く納める。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は横方向の刷毛目、胴部内面の上半はヘラ削りを施す。淡黄褐色の色調で、口径130cm、器高150cmを測る。253は口縁端部を内側につまみ出すもので、上端部は面をなす。器面が風化する。254～272は在地系の甕で、254～260、262は器形全体が残り、いずれも「く」字状の口縁部を呈するが、259・260・262は直立気味に立ち上がる。また、底部は平底のもの(258)、凸レンズ状のもの(254・256・257、259～262)、丸底のもの(255)があり、257・262は丸底に近い。体部は長胴ものが大半であるが、256のみ胴部が張り、器高に比して口径が大きい。また、254～256は頸部に断面三角形の突帯が巡り、255には刻目を施す。器面が磨滅するものが多いが、外面の一部に刷毛目が残る。また、内面は256では板ナデ、259は刷毛目が認められた。261、263～267は胴部下半を欠損するもので、口縁部は上述の「く」字状口縁を呈するが、267は直立して立ち上がる。263の胴部にはやや張りがあり、丸味をおびる。268～272は底部のみが遺存するもので、268・269は丸底、他は平底である。外面には刷毛目調整が認められ、内面は器面の風化が進むが、268には刷毛目が残る。第49図および第50図290～294は鉢である。このうち290～294は脚台が付く。台のない第49図の器形は、単口縁で碗形のもの(a類:273～276、279～281、283、289)、口縁部を外反させるもの(b類:277・278、282、284～286)、コップ状をなすもの(c類:287・288)がある。a類には大形の273～276、小形の279～281、283、289があり、底部が遺存するものでは平底の289を除き、丸底である。273は口縁端部を内傾させ、内側につまみ出す。279は器高が低く、皿状をなす。281は体部の中位に稜線があり、内傾気味に立ち上がる。また、b類では丸底の277・278、282と平底の284～286があり、前者は扁球状の胴部を呈し、頸部がしまる。282は器壁を薄く仕上げ、精良な胎土を用いる。後者は体部が開く。c類の底部は平底であるが、287はやや丸味がある。第49図で調整が判明するものでは、外面下半を粗く削るもの(280・283)があるが、内外面に刷毛目調整を



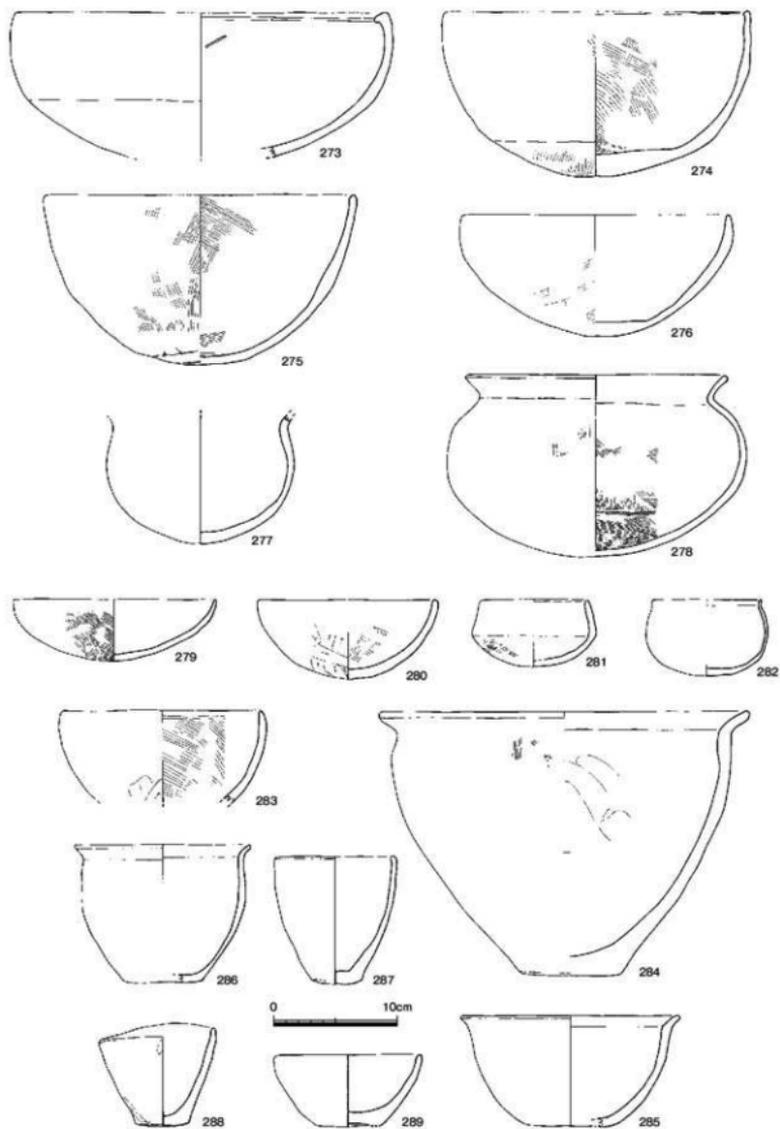
第46図 SX011 出土遺物実測図 (19) (254は1/6、他は1/4)



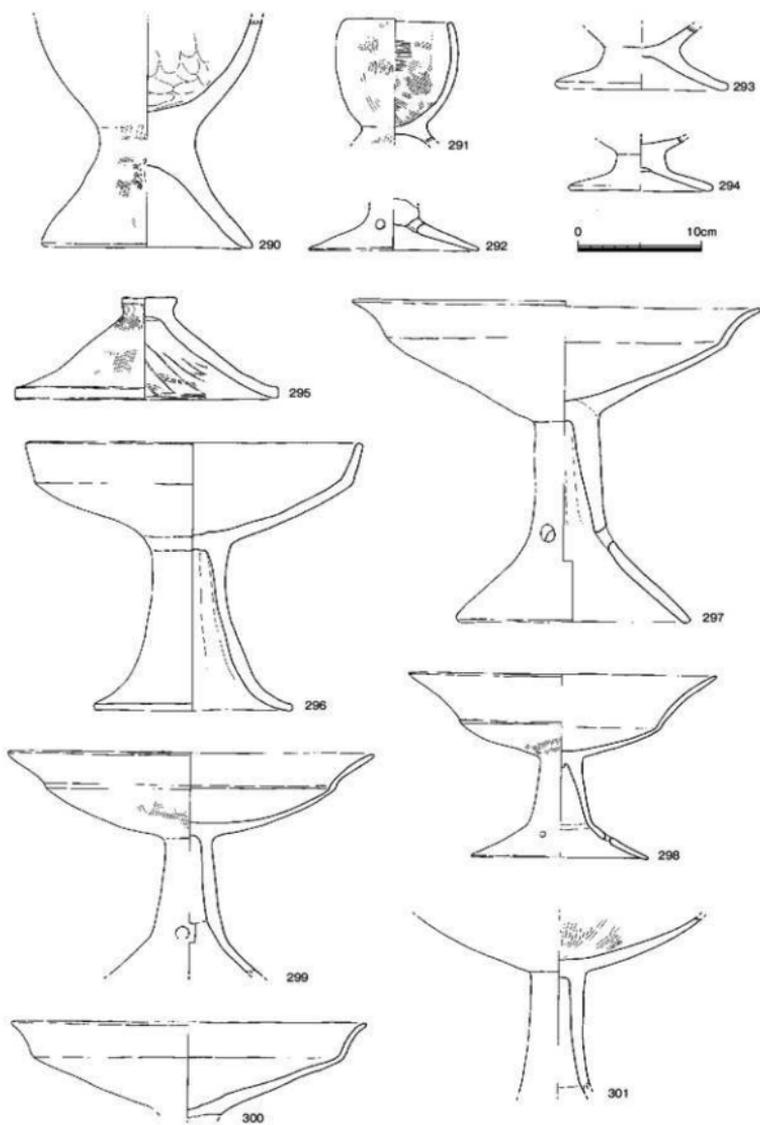
第47图 SX011出土遺物実測図(20)(1/4)



第 48 图 SX011 出土遺物実測図 (21) (1/4)

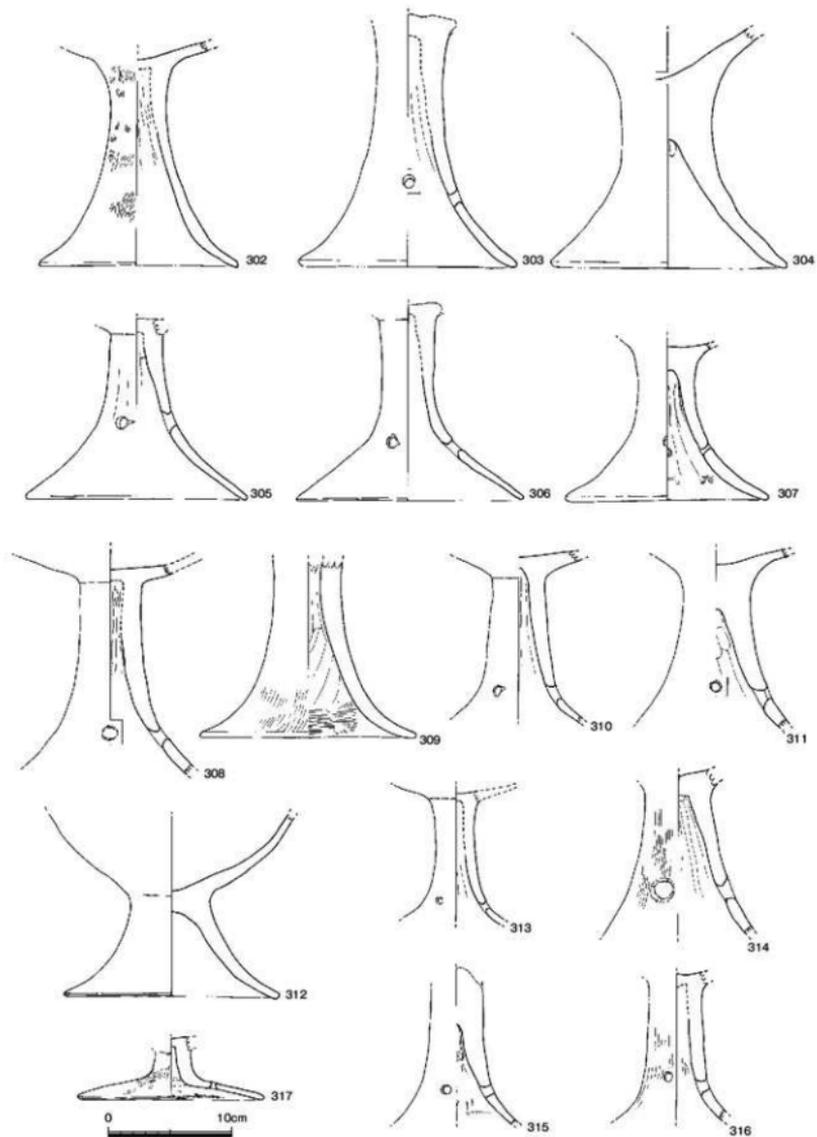


第 49 图 SX011 出土遺物実測図 (22) (1/4)

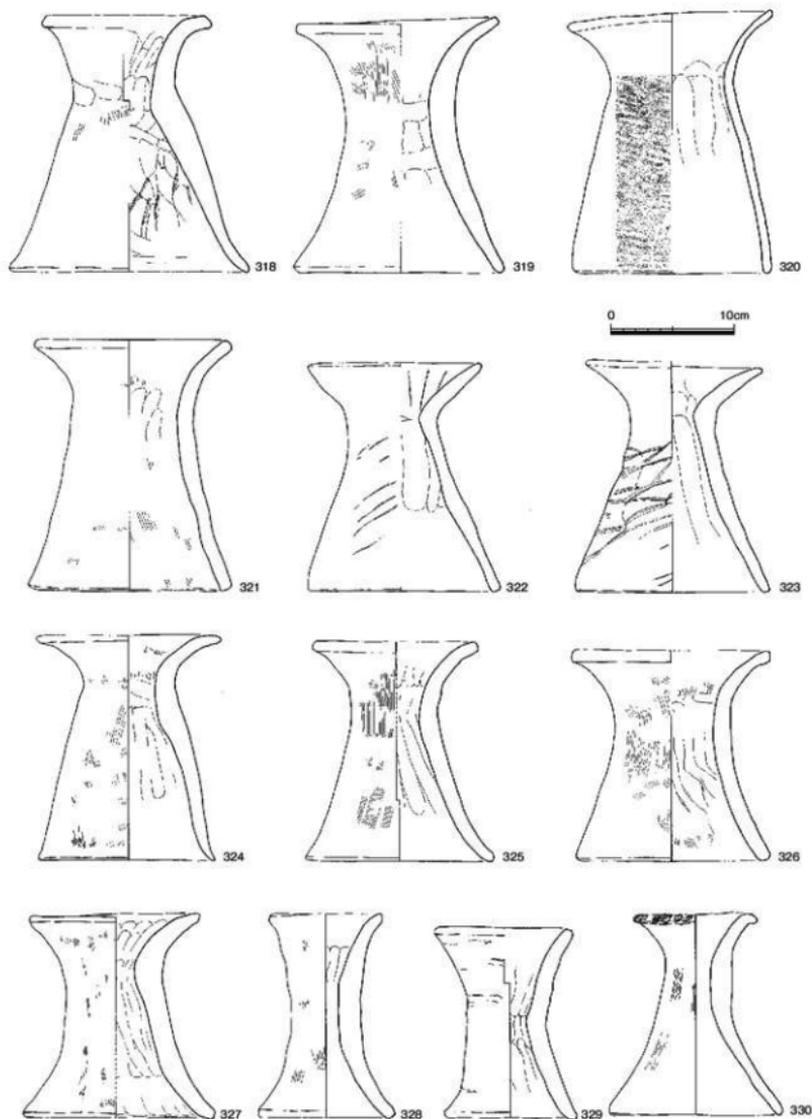


第 50 图 SX011 出土遺物実測図 (23) (1/4)

施すものが多い。続いて脚台付の290～294であるが、器形の全容が判明するものはない。290は口縁部を欠損するが、b類もしくはc類の形態をなすものと推測される。脚台はやや高めで、直線的に広がる。器面は剥落が進み、脚部外面に刷毛目を残すのみである。291はc類に脚台を付すものであるが、裾部を欠く。口縁部は内湾して納め、鉢部の内外面は刷毛目調整を施す。292～294は脚台部のみが遺存するもので、裾が大きく広がる低い形態を呈する。292には3個の円形透かしを有する。いずれも器面が風化する。295は蓋である。天井部の摘みは平坦で、外面の裾部は面をなす。また、外面は刷毛目およびナデ、内面はヘラナデを放射状に施し、裾部には刷毛目が認められる。第50図296～301および第51図は高坏で、このうち296～299は坏部および脚部のほぼ全容が判明するものである。いずれも坏部に屈曲部を有し、そこから口縁部が延びる。296はその屈曲部から直立気味の短い口縁部が立ち上がる。脚部内面にシボリ痕を残すが、他は器面に磨滅により調整は不明である。297・299は屈曲部が坏部の上位にあり、口縁部は外反する。また、脚柱部に下端付近に円形の透かしが3個あり、そこから裾部が広がる。共に器面が風化するが、脚部内面には削り風の擦過が、299の坏部外面の下半には刷毛目が残る。298は前二者と類似した形態を呈するが、坏部の屈曲部が下半部にあり、口縁部が大きく外反する。透かしも同様であるが、裾部の開きが大きい。300は坏部のみが遺存するもので、297・299同様の器形をなすが、口縁部の外反度がやや緩い。301は坏部と脚部の両端部を欠損するもので、外反する口縁部が付くタイプと思われる、脚柱部が細長い。302～317は坏部の大半を欠く脚部の資料で、このうち302～307、309・312・317は裾端部までが遺存するものである。302～307、309は脚部が長いもので、裾部に向かって広がり、302・304・309を除き円形の透かしが3個認められる。304は脚柱部が中実状をなす。器面が風化するものが多いが、外面に刷毛目、内面にシボリが認められ、309は裾部内面に横方向の刷毛目調整を施す。312の高台はやや低脚で、317は低い裾部が外湾気味に大きく開く。また、径0.4cmを測る小振りな円形透かしを3個配し、内外面に刷毛目調整を行う。他の308・310・311、313～316は裾部を欠失する脚部で、311を除き円形の透かしが3個認められる。311は4個の透かしを穿つが、外面からの穿孔途中で貫通していないものが1個ある。また、310・313は精良な胎土を用いる。第52図および第53図331～340は器台で、335～340を除き、器形全体が判明する。これらは器高約15cm以上のもの(318～330)と同約12cm以下のもの(331～334)に大別できる。大形の一群は受け部と脚部の境界のくびれが上位にあるものが大半であるが、328・329はやや細身で上下対称に近い器形をなす。また、前者にはくびれ部の内面に鈍いながら稜線を有するもの(318・320・322・323)と湾曲するカーブを描くもの(319・321、324～327、330)がある。また、稜線が認められるものは脚部が直線的に開く器形が多い。なお、330は口唇部を指でつまみ出し、板状工具の木口による刻目を密に施す。大形の一群の調整は、外面に刷毛目を施すものが多いものの、320・322・323は斜方向の平行叩きを施す。320は叩き目の刻みがよく残るが、322・323はナデによるものか、工具の単位のみが判明する。329は上半部に板状工具の木口の痕跡が認められ、板ナデもしくは刷毛目調整後にナデを加えている。また、内面は指ナデ調整するものが多いが、322の受け部には板ナデを連続して施す。小形のグループ(331～334)は上下対称に近い器形が多いが、332はくびれが上位に位置する。また、334は他の3点に比して強くくびれる。332は器面が荒れるが、他は外面をナデ、内面はシボリ痕があり、指ナデを施す。335～340は一部を欠損するもので、受け部が遺存する335・336はくびれが上位にある。335は脚部が直線的で、器面が風化するものの、外面に縦方向の刷毛目が残る。また、下端付近には平行叩き風の痕跡があるが、断定できない。内面は指ナデを施す。336も外面を刷毛目、内面を指ナデで調整する。337～340は受け部を欠くもので、337は僅かに外湾気味の脚部が直線的に延びる。外面は風化が進むが、内面は屈曲部以下にヘラ状工具および指によるナデ

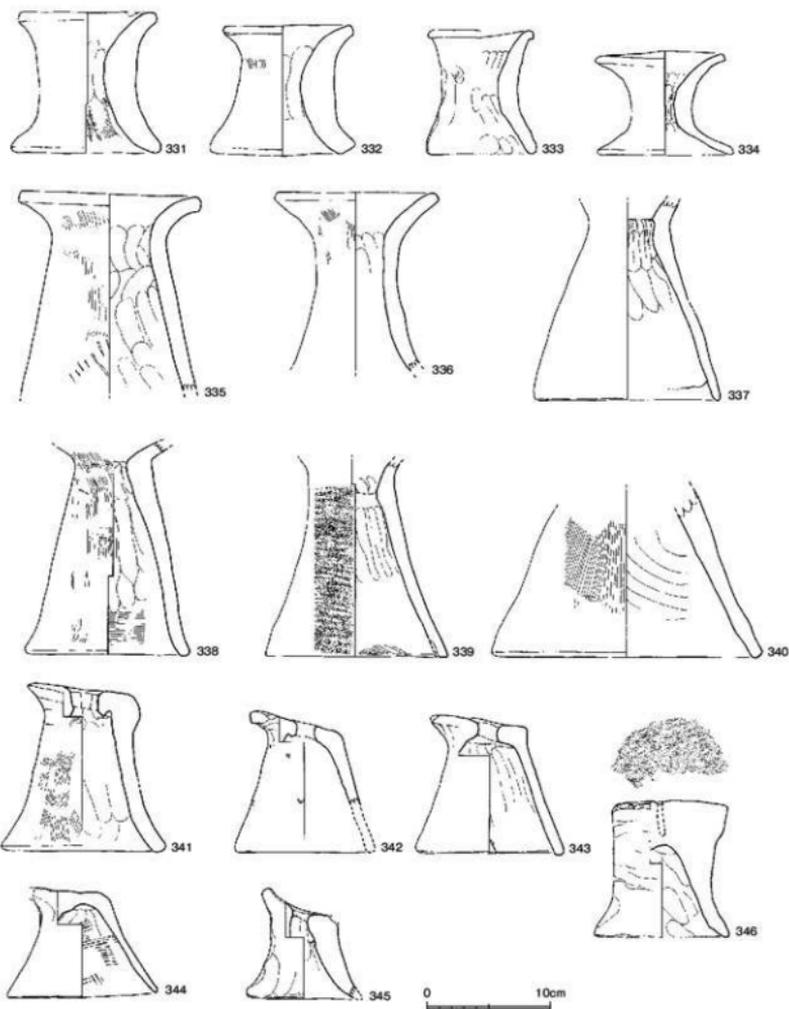


第 51 图 SX011 出土遺物実測図 (24) (1/4)

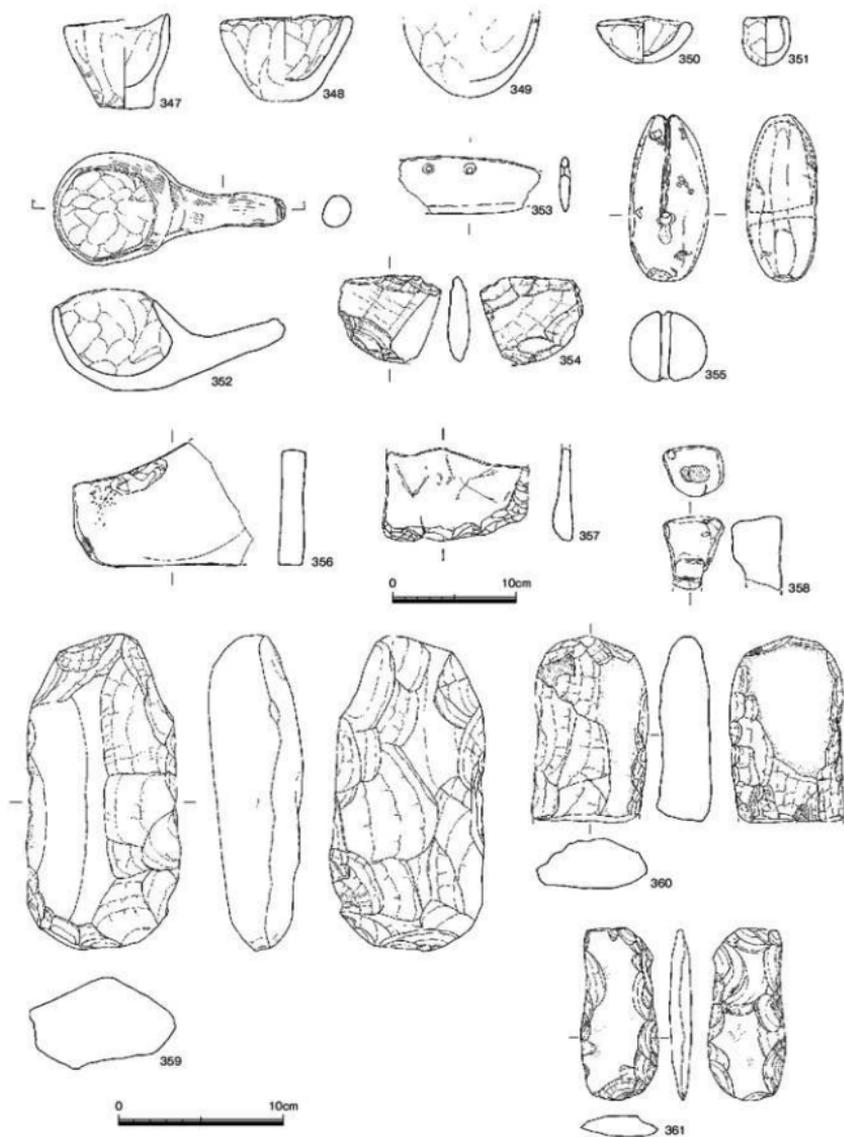


第 52 图 SX011 出土遗物实测图 (25) (1/4)

の痕跡をよく残す。338 はくびれの内面にシャープな稜線を有し、337 と同様の調整を施すが、裾部には横方向の刷毛目が認められる。また、外面は刷毛目調整を行うが、下地には叩きの痕跡を残す。339 は外面に横方向の平行叩き、内面には大半を指ナデし、裾部には刷毛目を残す。また、端部は明瞭な面をなし、部分的に内面に突出する。340 は大形の脚部で、外面に刷毛目、内面に指ナデ調整が施さ



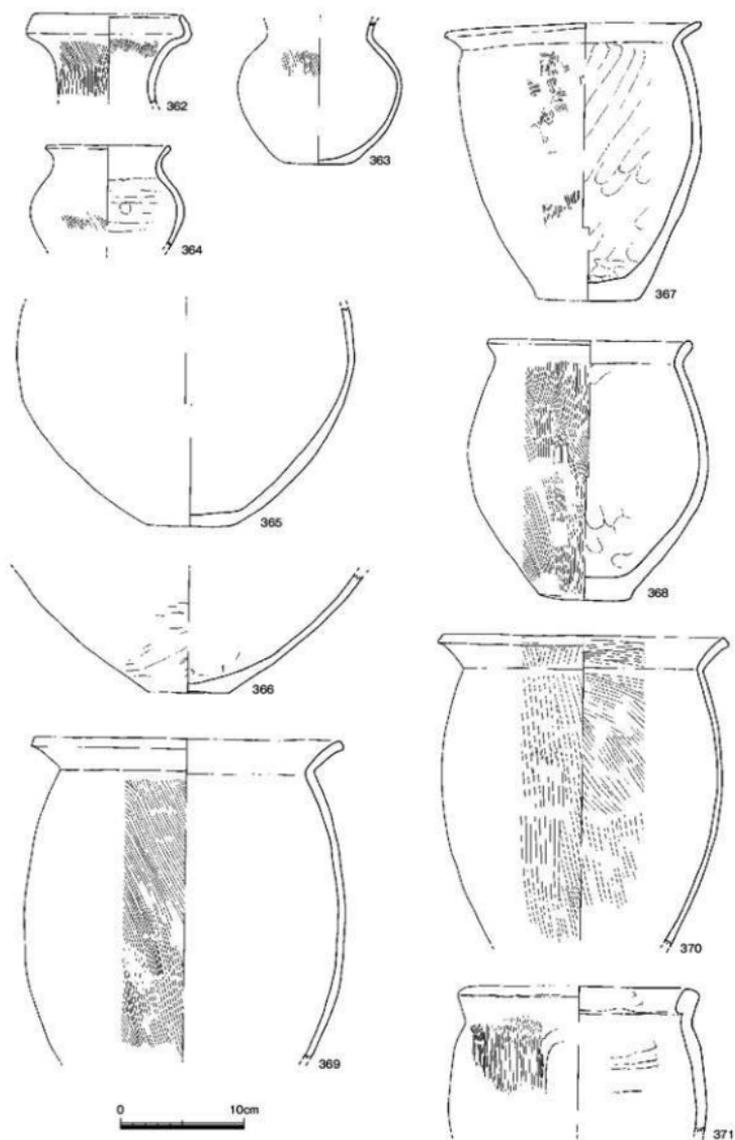
第53図 SX011 出土遺物実測図 (26) (1/4)



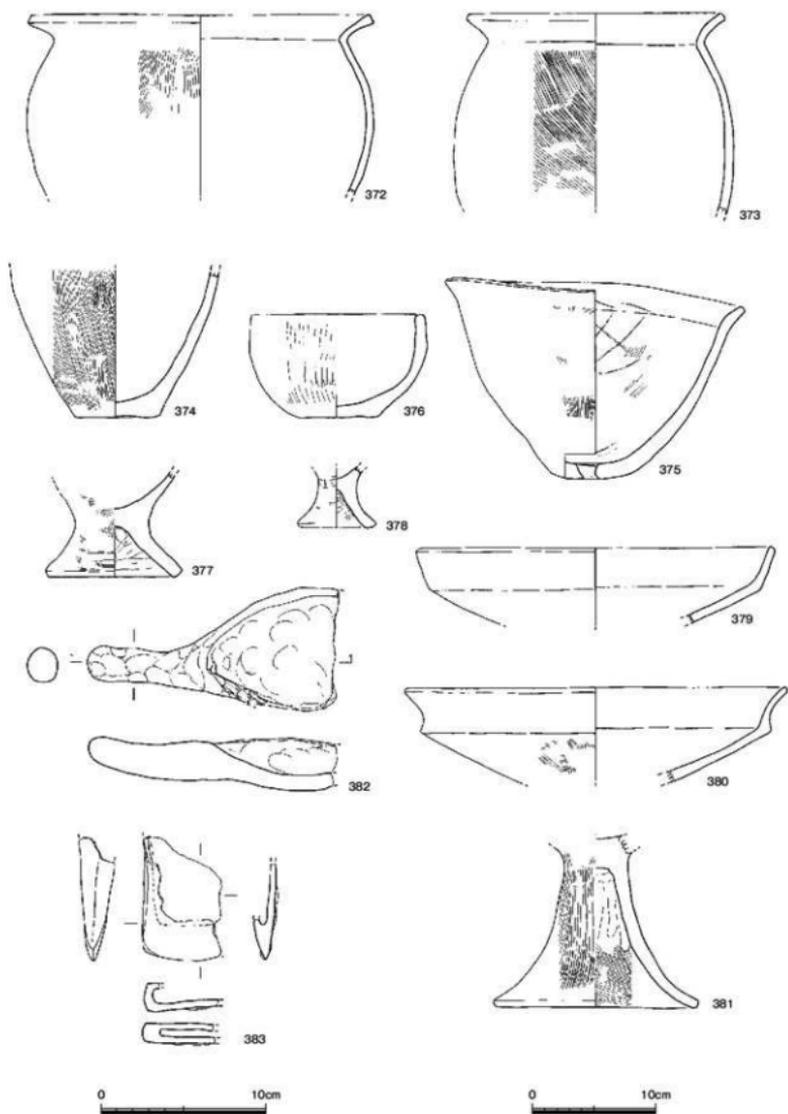
第54図 SX011出土遺物実測図(27)(356-357は1/4、他は1/3)

れる。第53図341～346は杓形の支脚で、346を除き、頂部から突起が延びる。このうち、突起の端部を欠損する344以外は頂部のほぼ中央に円孔があり、突起側が高く傾斜する。円孔はいずれも外面から穿孔を施す。突起は平坦なもの(341～343)と嚙状に先尖りになるもの(345)がある。孔のない344の頂部はほぼ平坦である。341は裾部が僅かに広がり、外面を刷毛目、内面を指ナデ調整する。342～345は器面の風化が進むが、344の内面には横方向の粗い刷毛目が残る。345は外器面に凹凸があり、指オサエによって端部を引き出したものと思われる。突起のない346は裾部が開く円柱状を呈し、上面および外面には叩きの痕跡がある。頂部の器壁は厚く、貫通しない小孔が認められる。第54図は土製品、石器、石製品である。347～352は土製品で、347～351は鉢を模したものと思われる。いずれも指オサエや指ナデによって成形するもので、底部は347が平底、348が凸レンズ状、他は丸底である。347・348は底部から体部が開く。350は椀形で器高が低く、351は直立する体部を呈する。349は口縁部を欠損する。352は杓子形土製品で、深い頭部に断面円形状の柄が付く。外面は刷毛目を残すが、ナデを加える。頭部内面は指ナデを残すが、端部はナデを行う。353～361は石器もしくは石製品で、353・354は石庖丁である。353は凝灰岩ホルンフェルス製で、直線刃半月形を呈する。紐孔は両面穿孔を施す。354はやや厚めの凝灰岩系の剥片を用いた未成品で、一部に自然面を残す。355は滑石製の石錘で、紡錘形を呈するが、両端部には平坦面を作り出す。下半部の孔から先端部にかけてシャープな溝を掘り込む。長さ10.1cm、径4.2～4.8cm、重量306.2gを測る。356～358は砂岩系の石材を用いた砥石である。356は図の右側面および裏面を除き、357は図表裏面および左側面を、358は図裏面および下側面を除き砥面とする。359～361は石斧の未成品と考えられるものである。359は玄武岩製の大型給刃石斧の未成品で、長さ19.7cm、幅9.3cm、厚さ5.5cmを測る。自然の剥離面が多く、製品に近い原石が運び込まれたもの推測できる。360は玄武岩磨製石斧の未成品で、両面に自然面が残るが、剥離調整が進んだ状態である。敲打調整直前の段階であろう。361は粘板岩製の石材を用いたもので、薄い剥片の4辺を加工する。両面には研磨調整と思われる擦過が認められ、小形の磨製石斧の未成品と推定される。

6下層(第55・56図)全てN-3出土で、382・383を除き弥生土器である。このうち362～366は壺である。362は複合口縁壺で、口縁上部は外湾気味のカーブを描きながら、あまり内傾せずに立ち上がる。口縁部の稜線はやや鈍く、袋状口縁に近い。口縁上部はヨコナデ、頭部内面はナデ、他は刷毛目調整を施す。363はやや不安定な平底で、球形の胴部を呈する。直立気味の頸部が付くが、口縁部を欠損する。ナデ調整を行うが、胴部外面の上半部には刷毛目が残る。364は短頸の広口壺で、やや張りのある胴部を呈する。口縁部はヨコナデ、胴部外面は刷毛目を施し、内面には削り風の擦過が認められる。365・366は胴部下半の資料で、共に平底であるが、365はやや不安定である。共に器面が風化し、調整が不明瞭であるが、366の外面には斜方向の叩きと思われる痕跡が、内面には板状工具の調整痕が認められる。367～374は甕で、374を除いて口縁部が遺存し、口縁部の形態は「く」字状を呈する。367は平底で、胴部の張りは弱く、口縁部内面の屈曲部の稜は鈍い。外面は刷毛目、内面はナデを施す。368は367同様に屈曲部の稜は鈍いが、口縁部が立ち上がる。胴部には張りがあり、底部は僅かに凸レンズ状を呈する。調整は367と同様である。369・370・373は類似した長胴の器形で、口唇部には面取りを施し、屈曲部内外面の稜は明瞭である。いずれも胴部外面に刷毛目を施すが、369・373は口縁部をヨコナデ、胴部内面をナデ調整する。370は口唇部を除き、口縁部内外面および胴部内面にも刷毛目調整を行う。371は口縁部の成形に特徴があり、緩く屈曲する「く」字状の口縁部の内面および口唇部に粘土を粗く貼付する。外面側には粘土のナデつけ痕が明瞭に残る。胴部外面は刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、胴部内面は板ナデを施す。また、口縁部内面にも刷毛目が僅かに残る。胴部の張りは弱い。



第55图 SX011 出土遺物実測図(28)(1/4)



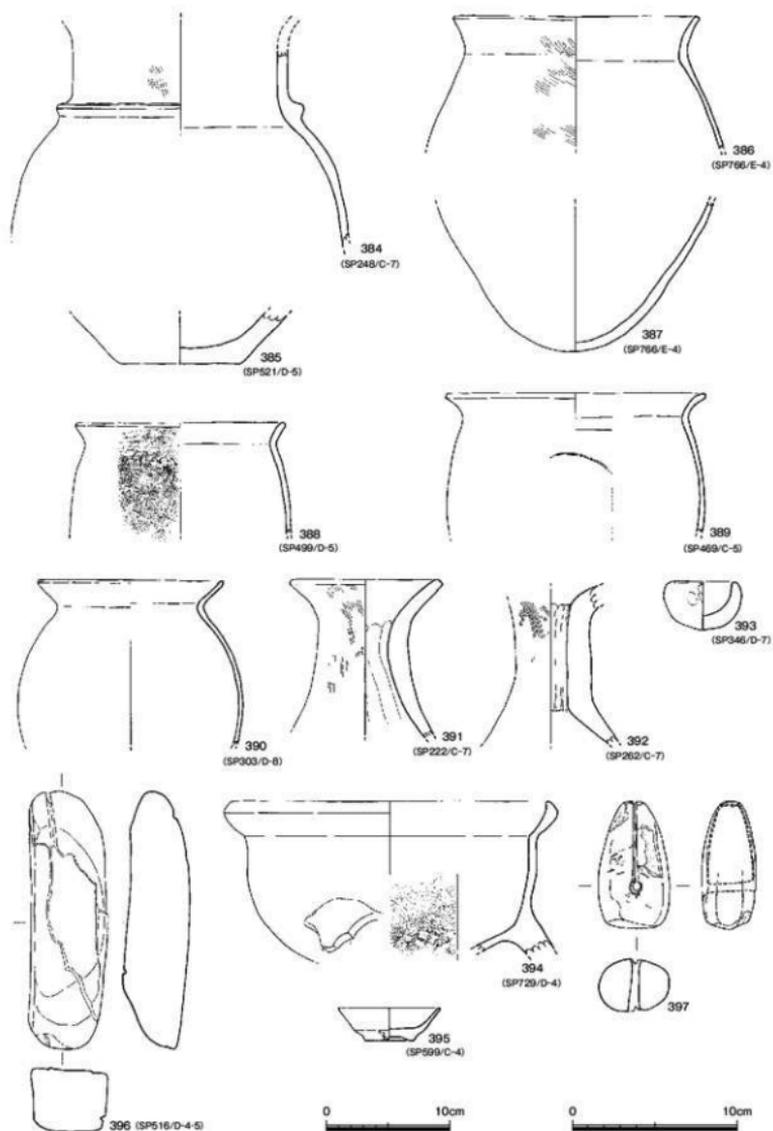
第56図 SX011出土遺物実測図(29)(382・383は1/3、他は1/4)

372は屈曲部外面の稜が緩く、胴部が強く張り出す。口唇部にはシャープな面取りをヨコナデによって施す。374は平底の底部で、外面には刷毛目、内面には板ナデを施し、内面の一部にはヨコナデを加える。375～378は鉢である。375は僅かに凸状を呈する底部から体部が開くもので、口縁部は緩く外反する。その内面は部分的に稜が認められる。底部には内側からヘラ状工具により施された焼成前の穿孔を有し、その断面は逆台形を呈する。外面は細かい刷毛目を粗くナデ消す。内面にも刷毛目が残るが、板あるいはヘラ状工具によりナデを加えている。376は碗形を呈するもので、底部は平底である。体部上半から口縁部は直立し、端部を丸く納める。外面には粗い刷毛目調整が認められ、内面はナデを施す。全体に器壁が厚い。377・378は脚台のみが遺存するもので、377は「ハ」字状に開く。脚部の外面は刷毛目を粗くナデ消し、内面は削り風の粗い擦過痕が認められる。378は精良な胎土を用いるもので、裾部が僅かに開く。外面はナデ、内面はヘラナデを施す。379～381は高坏である。379・380は坏部で、379は屈曲部から直線的な口縁部が外傾し、端部は面をなす。器面の風化が進む。380は坏部の上位に屈曲部を有し、外反する口縁部が付く。器面がやや荒れるが、外面の下半には刷毛目残り、内面はヨコナデおよびナデを加える。381は脚部で、裾部に向かって緩く広がる。外面および内面の下半には縦方向、横方向の刷毛目を施し、脚柱の内面にはシボリ痕を残す。382は頭部の約半分を欠く杓子形の土製品である。全体を指オサエや指ナデで調整する。柄は頭部から直線的に延び、断面は不整ながら円形を呈する。383は鑄造鉄斧（鉄刀）である。図表面の中央部は破損しており、窓状を呈するかどうかの判断はできない。また、基部および右側面も欠損する。刃部は両刃の外湾刃で、残存状況から刃幅は5cm程度と推測される。遺存する左側の上部には僅かにくびれが認められ、同側面には銕合わせ目の痕跡が凸線となって残る。残存長は7.6cm、各面の厚さは0.5cmを測る。

6) その他の遺物

最後にビット（SP）および遺構検出時の主な出土遺物について報告を行う。

ビット（第57図384～396）以下報告する遺物の出土遺構については、遺物番号の下にグリッド名と共に記載している。384・385は弥生土器の壺である。384は頭部から胴部の上半の資料で、その境界部分には断面逆台形状の突帯が巡る。頭部は直立し、胴部はナデ肩である。内外面共に器面が剥落する。胎土には砂粒を多く含む。385は平底の底部片で、384同様に器面が荒れ、胎土には砂粒が目立つ。386～390は弥生土器もしくは土師器の甕である。386・387は同一のビットから出土したもので、赤橙色の色調や砂粒を多く含む胎土から同一個体と思われるが、直接接合しない。386は「く」字状の口縁部を呈し、内面の屈曲部には稜線を有する。器面の大半は磨減するが、外面の一部に刷毛目が残る。387は丸底の底部で、器面が著しく風化するため調整は不明である。388は復元口径17.0cmを測る小形の甕で、短い「く」字状口縁部が張りのない胴部に付く。外面には平行叩き目が認められるが、内面は荒れる。389も「く」字状の口縁部をなすもので、口唇部には丁寧な面取りを施す。屈曲部の稜線はやや緩い。また、割れ面と連なるため不明瞭であるが、円形の透かし窓と思われる痕跡が胴部の上位に認められる。器面は風化が進む。390は畿内系の土師器で、球形の胴部に外反する口縁部が付く。端部は僅かにつまみ出す。復元口径は15.0cmである。なお、器面は著しく風化する。391・392は弥生土器の器台で、共に器面が風化するものの、外面には刷毛目が僅かに残る。391はくびれが上位にあるが、受け部と脚部の境界は不明瞭である。392は両端部を欠失するが、円柱状の脚部から受け部と裾部が開くものと思われる。393は手捏ねの土製品で鉢を模造したものである。碗形を呈し、丸底である。394は周防型の足鍋であるが、焼成は土師質である。体部と口縁部の境界は「く」字状に折れ、その内面には稜線を有する。肥厚する口縁部の端部は上方に伸びて先尖り、内面は内湾する。脚部の大半は欠損するが、端部には指ナデにより接合する。また、胴部外面の下半には格子目叩きが施され、炭化



第57図 ピットおよび遺構検出時出土遺物実測図 (393・397は1/3、他は1/4)

物の付着が認められる。395 はやや灰味のある軸を全面に施す白磁皿である。畳付きに砂目が認められるが、見込みには目跡はない。396 は粘板岩製の砥石である。両端部を除く4面を砥面として利用する。

遺構検出時 (第56図 397) 遺構検出作業時に採集した滑石製の石錘で、基部と先端部に面を有する。下方の穿孔部から先端部にかけて溝を掘り込み、横断面は楕円形を呈する。長さ7.7cm、径3.2～4.3cm、重量169.0gを測る。

3. 結語

最後に今回の調査で確認した遺構の時期的変遷や周辺の調査成果等を併せた遺構の位置付けについてまとめておきたい。なお、以下で回数みの記述は全て大塚遺跡である。

検出した遺構の主体は弥生時代と中世後半に大別できるが、古代や中世前半期の遺構も少数ながら確認していることから、ここでは、Ⅰ期：弥生時代後期後半から終末期前後、Ⅱ期：10世紀頃、Ⅲ期：12世紀頃、Ⅳ期：15～16世紀頃の4期に区分し、時期毎に言及していく。なお、出土遺物量が少なく、明確な時期比定が困難な遺構もあるが、覆土の色調の類似性や遺構の重複による前後関係等から類推したものも含む。

まず、Ⅰ期であるが、SB005・006を除く掘立柱建物12棟、6軒全ての堅穴住居、また土坑のうちSK010・016・258、溝のうちSD019・024・025・026・034およびSX001が該期の遺構として挙げられる。掘立柱建物は主軸方位が類似する南北棟で、これは中世の掘立柱建物も含めて立地する丘陵の派生方向に沿うものと考えられる。各建物の細かい時期比定は出土遺物が少なく困難であるが、重複関係からSB044は弥生時代終末期のSC012に後出する。また、直接の切り合いはないものの、SB045はSC012の外周溝と重なることやSB044の柱筋と重複することから、掘立柱建物は堅穴住居に後出する可能性が高い。SB036・037、SB038～041、SB042・047では柱穴や柱筋の重複があり、あまり時期差がない中で建て替えが想定できる。12棟の建物のプランは、1×1間が大半を占め10棟を数え、他の2棟(SB039・045)は1×2間である。前者の柱間は建物によりばらつきがあるが、3m前後のものが多く認められ、一方が短く(長く)長方形プランの柱配置を採る。なお、本文中でも言及したが柱間が2m以下の小形のSB042は、壁面を削平された堅穴住居の可能性もある。一方後者のプランの建物の柱間は、SB039が梁間、桁行ともにほぼ等間隔の約2.5m、SB045は梁間が3.4mで、桁行では2.3mを測り、梁間の寸法が建物規模に比例することが窺える。これら12棟の柱穴の平面プランを見ると、その大半は一辺0.7m前後を測る隅丸方形を意識したものが極めて多く、当該期の特徴の一つとして指摘しておきたい。なお、SB038では幅は同様ながら、長さが1.5m前後を測り、主軸方向に長い長方形プランを呈する。また、この様相を勘案すると、先のSB042の柱穴プランが円形であることは、堅穴住居の柱穴であることの傍証ともなる。続いて、堅穴住居は全体に遺存状況が不良であるため、詳細な部分での情報量は多くないが、中央部に屋内部が確認できたもの(SC012-014・018)、ベッド状遺構を配するもの(SC014-017・032)がある。また、検出状況から堅穴住居を囲む周溝とセットになることが明らかなるものがあり、確実視されるものは、それぞれの堅穴住居の項で併せて「外周溝」として報告した(SC012-017)。この2軒以外にも、SC014とSD019、SC032・033とSD024・025・026がそれぞれ堅穴住居と外周溝のセットとなる可能性を本文中で指摘しておいた。これまでの周辺調査で外周溝と類似した検出事例として第14・15次の002周溝が挙げられるが、この溝は弥生時代終末期の竈が付随する鍛冶工房001を囲む円形周溝で、工房という特殊な遺構を取り囲むものである。一般的な集落内では、第11・16次や今宿五郎江遺跡第2・11・14・15次に比較的多くの類例があり、これらの周溝状遺構が取り囲む遺構についてはこれまで不明確であったが、今回のSC012例等から堅穴住居がその主なものであることが明らかとなった。外周溝

は比較的深いため、内部の堅穴住居の壁面が削平された場合でも遺存することが多い。その平面規模は径や一辺が10m前後のものが多く、幅は0.4m前後で総じて小溝である。今回の調査例はいずれも削平等により周溝状に全周するのかどうかについては判明しないが、面的な調査が実施された先の第16次では一周するものはなく、従来から途切れた形状であったことが予測される。また、今回の調査例の外周溝の溝底のレベルは地形的に高い南側が高く、北側が低いことから地形の低い側が途切れて開く排水溝的な機能が想定できるが、覆土には顕著な水性堆積は認められない。また、他の調査事例では必ずしも地形の高低差と溝の途切れる方向に高い相関性はない。この外周溝の平面プランは、SC012のように円形を呈するものやSD026のように方形状を呈するもの、SD026の掘り直しであるSD024のようにその中間的な形状をなすもの等様々な種類があり、第16次でも同様の様相が窺える。また、谷部であるSX011は本文中で各層毎に報告を行ったが、最下層の6下層では、弥生時代後期後半の遺物を含み、谷部の埋没開始時期が窺える。その上層の5層や6層の出土遺物量の多さは、集落の盛行を示すものと思われ、弥生時代終末期の土器を主体としつつも、古墳時代前期前半の畿内系土師器(252・253)を含む。ただし、今宿五郎江遺跡で見られた列島内外の対外交流を示す遺物は殆どなく、同遺跡との性格差を如実に表していると言える。なお、I期の終わり頃には約半分の高さまでSX011は埋没し、広い窪み状の谷地形を呈していたことがわかる。以上のI期の遺構の分布は、今回調査区の中央から東側に偏っており、IV期に掘削されたSD008の西側には北西端のSC018を除き該期の遺構はないが、調査区西側の遺構の分布が東側に比して疎であり、その多くはIV期の遺構であることから同期の屋敷地の造成にあたって、I期の遺構群が削平されたことが推測できる。また、このI期の集落は、「Ⅱ.遺跡の立地と環境」で述べたように、今宿五郎江遺跡で確認されている弥生時代後期初頭に設けられた大規模な環濠の埋没後にその外側部分に新たに形成された集落の一部である。

続くⅡ期の遺構として指摘できるのは、SK027のみである。精製の越州窯系青磁の出土は注目されるが、共存する土師器甕やこれらの出土状況から埋葬遺構とは考えられない。この時期を前後する古代の遺構は大塚遺跡内では単発的で、北端部に小集落がある他、SK027と同時期で越州窯系青磁碗を副葬する木棺墓が第17次で確認されているに過ぎないが、今宿五郎江遺跡の東側では越州窯系青磁の他、緑釉陶器や瓦、銅製印章等が包含層から出土しており、公的な施設の存在が指摘されている。

Ⅲ期の遺構もSK029の土壌墓が1基あるにとどまり、副葬遺物の一つである青銅製品(26)は類例が少なく興味深い。この時期を含む中世前半の遺構は、前代の集落域の南側に拡大するものの、規模は小さく、現在のところ今回のSK029が南限となる。また、時期がやや下る13世紀代の埋葬遺構数基が第16次でも検出されている。なお、SX011はこの時期の直後にはほぼ埋没していることが出土遺物(72～74)からわかり、上面ではIV期の遺構が確認できた。

最後にIV期の遺構であるが、SB005-006、SK003-028-030-031-035、SD001-002-007-008-022が挙げられる。これらの遺構の多くは、大塚古墳の西側を除くほぼ全域で確認されている方形区画溝で囲まれる戦国期の屋敷跡の一部で、2棟の掘立柱建物の小振りな柱穴で構成される2×3間の冊柱建物である。この建物はSD007で区画される内部に位置する。また、SD008は近世に埋没するものであるが、延長は50mを超え、該期の大きな区画溝であった可能性がある。また、内部の建物は明らかでないが、SD022も方形区画溝の一つと思われ、埋没したSX011部分を囲むように位置する。土坑には被熱した礫を投棄したSK028-030や炭化物を含む焼壁土坑(SK035)があり、生産関係の遺構と推測されるが、詳細は不明である。なお、今回の調査でも周防系足鍋(32-36-394)が出土している。

<参考文献>

森本幹彦 2010「今宿五郎江遺跡の成立とその背景」『福岡考古』第22号 福岡考古懇話会

図 版



発掘作業風景



(1) 第18次調査区全景（上空から）



(2) 第18次調査区北側全景（上空から）



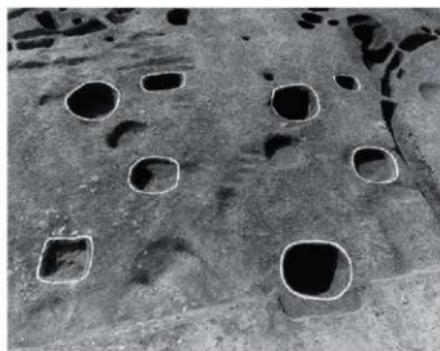
(3) 第18次調査区南側全景（上空から）



(1) SB005 (南から)



(2) SB006 (南から)



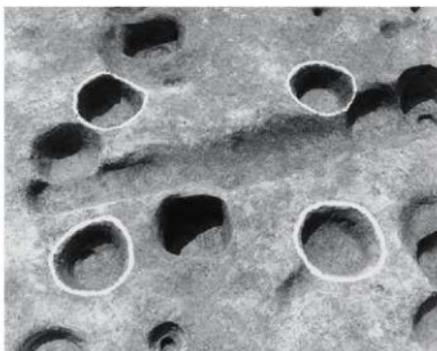
(3) SB036・037 (東から)



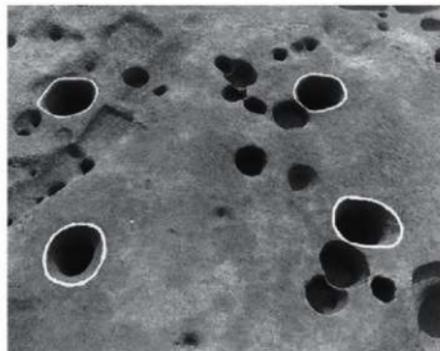
(4) SB038・039 (東から)



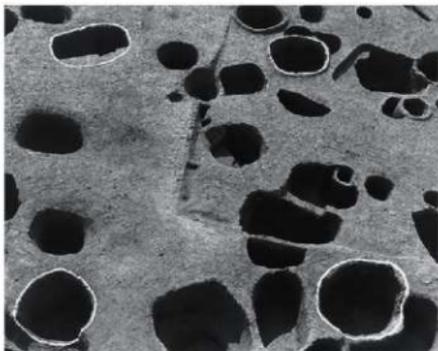
(5) SB040・041 (東から)



(6) SB042 (東から)



(1) SB043 (東から)



(2) SB044 (東から)



(3) SB045 (南から)



(4) SB046 (南から)



(5) SC012 全体 (東から)



(6) SC012 竪穴住居 (東から)



(1) SC012d-d' 土層 (北西から)



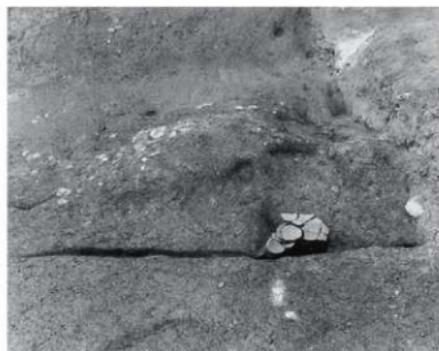
(2) SC014 (南から)



(3) SC014内 P2 (北から)



(4) SC017全体 (東から)



(5) SC017 竪穴住居 (南から)



(6) SC017b-b' 土層 (東から)



(1) SC018 (南西から)



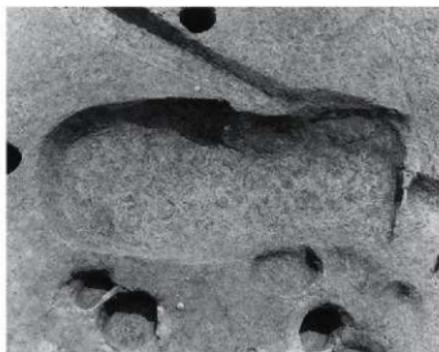
(2) SC018内P1土層 (東から)



(3) SC032・033 (東から)



(4) SK003 (南から)



(5) SK010 (西から)



(6) SK016 (東から)



(1) SK027 (北東から)



(2) SK028 (西から)



(3) SK028 土層 (北から)



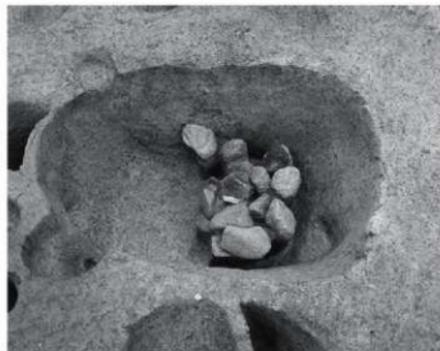
(4) SK029 (北西から)



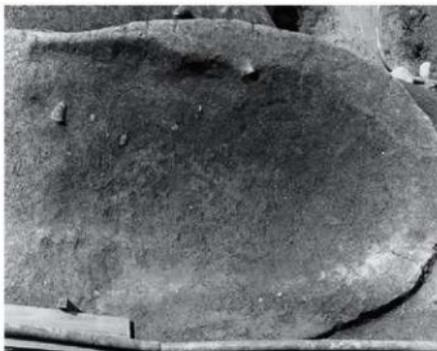
(5) SK029 遺物出土状況 (1) (北西から)



(6) SK029 遺物出土状況 (2) (北東から)



(1) SK030 (北から)



(2) SK031 (北から)



(3) SK035 (北から)



(4) SK035 土層 (北から)



(5) SD001A-A' 土層 (南西から)



(6) SD002B-B' 土層 (南西から)



(1) SD004 (南東から)



(2) SD007 (南から)



(3) SD007D-D' 土層 (東から)



(4) SD007F-F' 土層 (北から)



(5) SD008 北半部 (南から)



(6) SD008 南半部 (南から)



(1) SD008H-H 土層 (北から)



(2) SD008I-I 土層 (北から)



(3) SD019L-L 土層 (南東から)



(4) SD022 (西から)



(5) SD022M-M 土層 (東から)



(6) SD024-025-026 (南東から)



(1) SD024-025-026N-N 土層 (東から)



(2) SD024-025-026O-O 土層 (南西から)



(3) SD034 (東から)



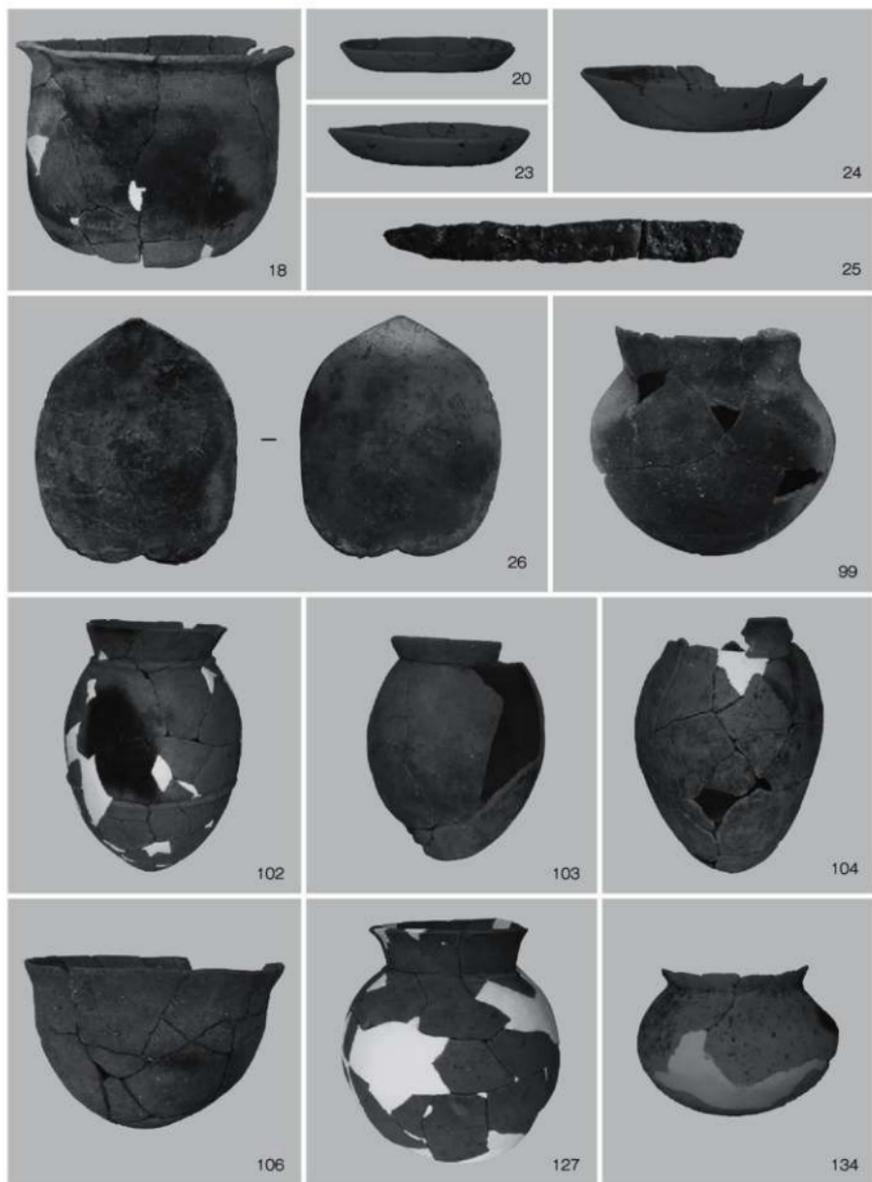
SD034P-P 土層 (東から)



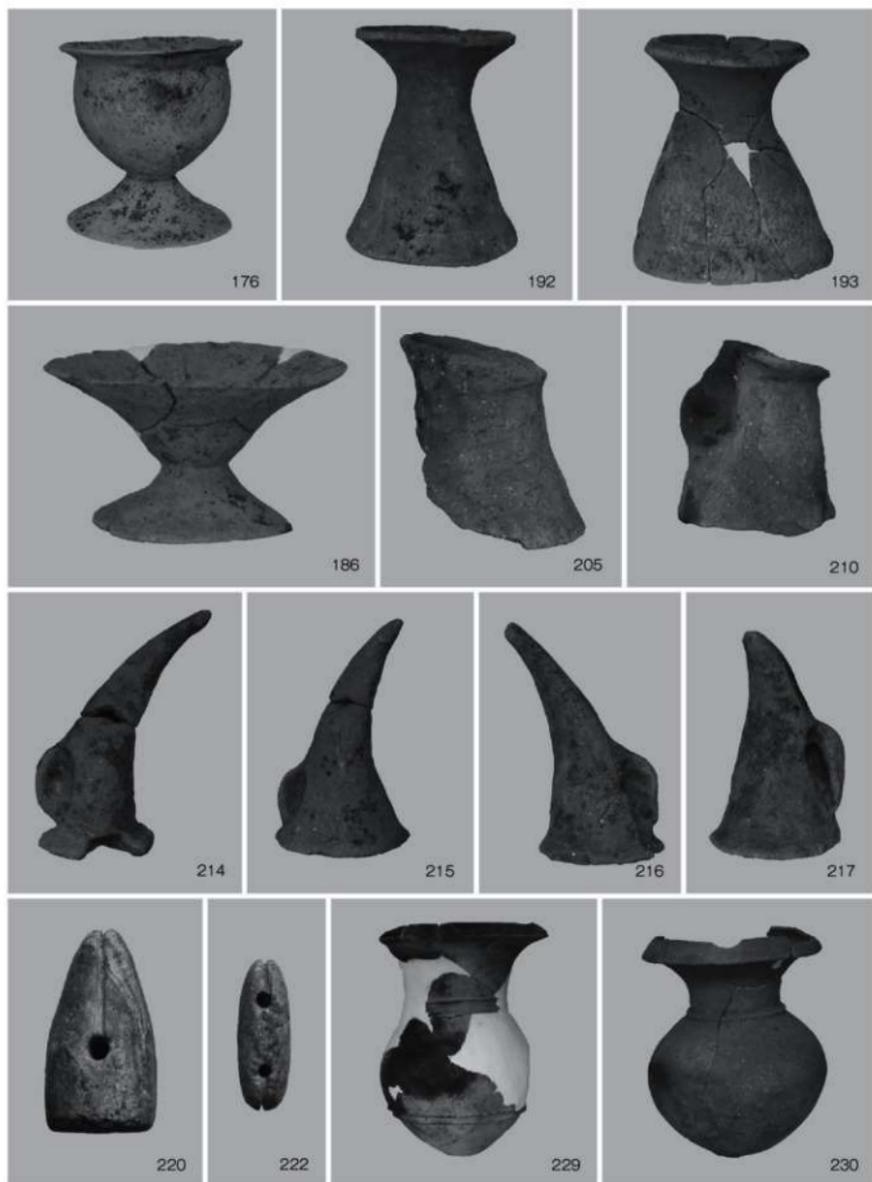
(5) SX011 北半部 (南から)



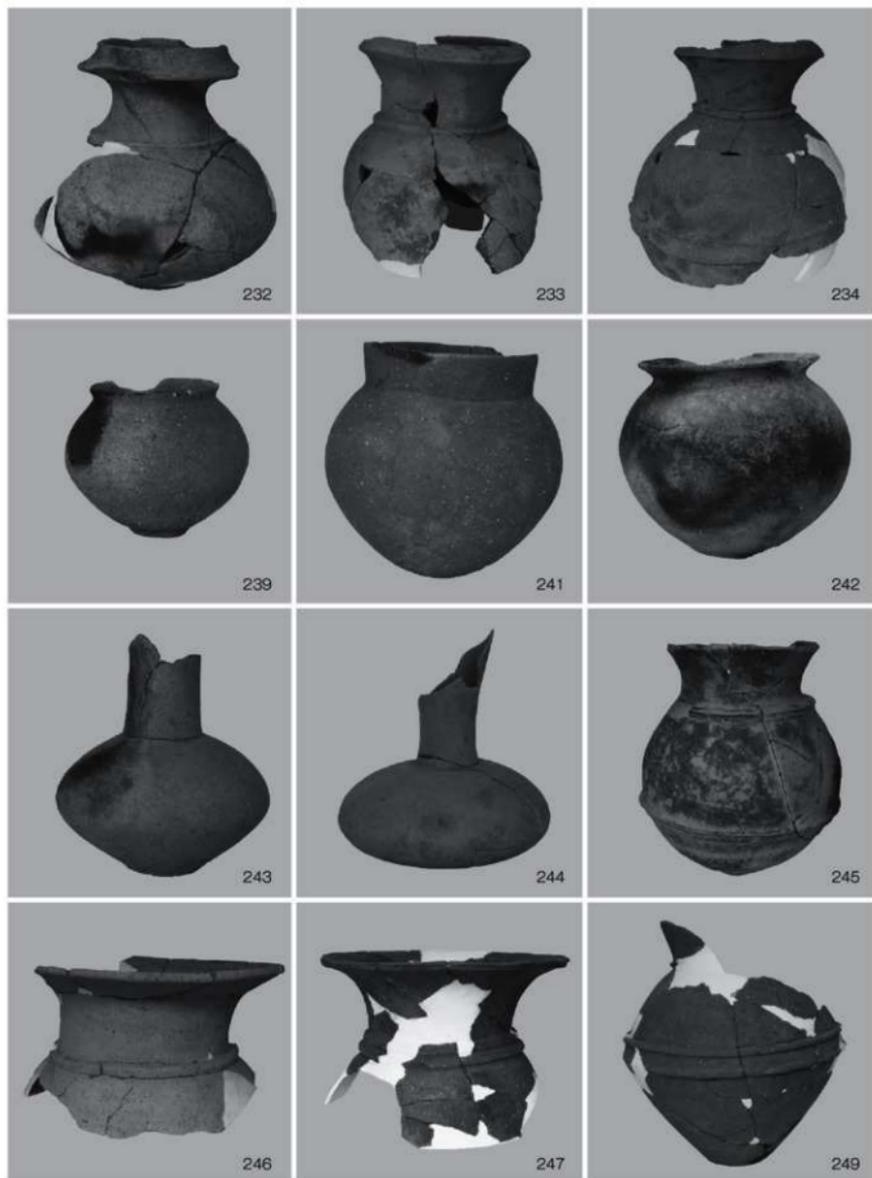
SX011Q-Q 土層 (北から)



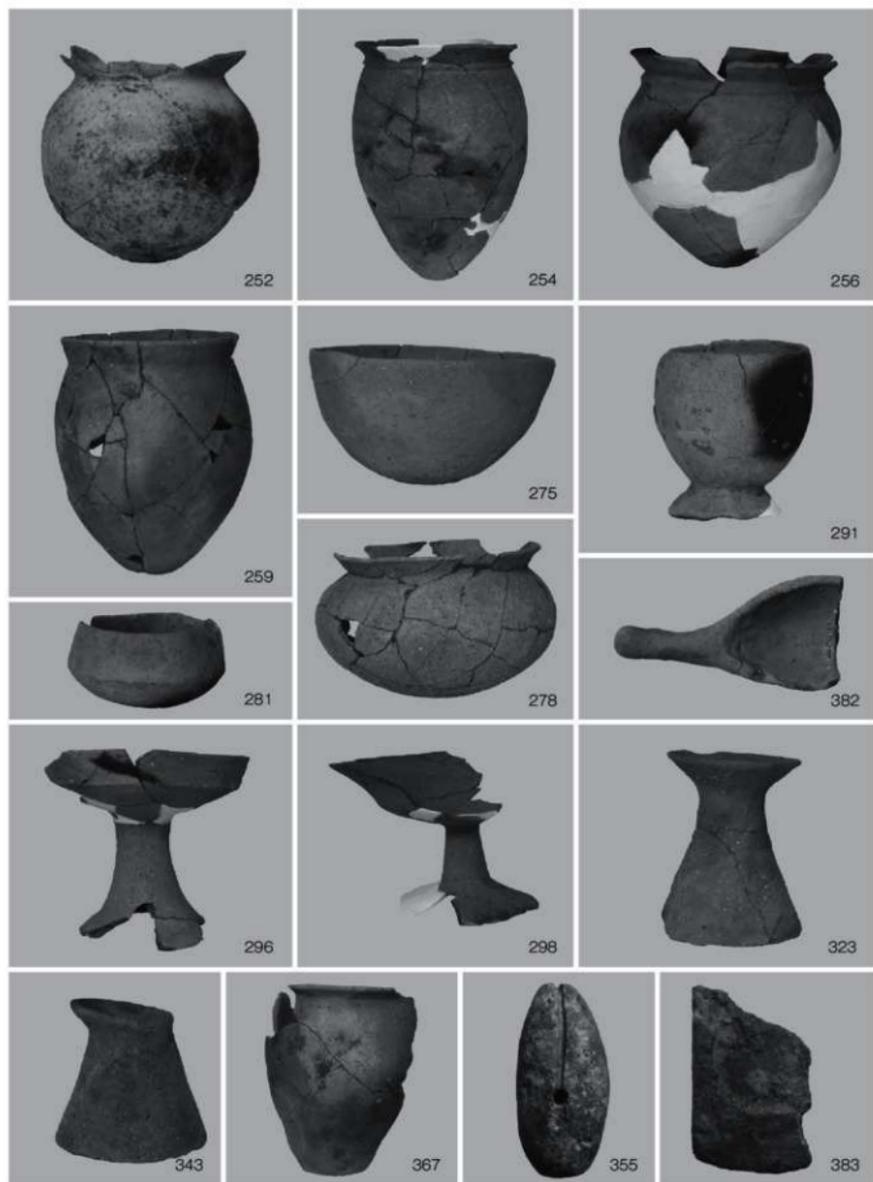
出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)



出土遺物 (4)

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおつかいせき8 -だい18 じちようさほうこく-							
書名	大塚遺跡8							
副書名	—第18次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1255集							
編著者名	榎本義嗣							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092 - 711 - 4667							
発行年月日	2015年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
おおつかいせき 大塚遺跡	ふくおかけいふくおかから 福岡県福岡市 にしきいままほくまほ 西区今宿町	40135	020625	33° 34' 24"	130° 16' 17"	20110725 ～ 20120607	1,968.0	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大塚遺跡	集落	弥生時代 中世	掘立柱建物、堅穴住居、土坑、土壇墓、溝、谷	弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、国産陶器、磁器、土製品、石器、石製品、金属製品		谷部より多量の弥生土器が出土		
要約	<p>福岡市西部の今宿平野に位置する低位段丘の東側緩斜面で実施した調査で、弥生時代終末期前後の堅穴住居と掘立柱建物から構成される集落を確認した。掘立柱建物は1×1間を主体とする。また、方形堅穴住居には円形の周溝に囲まれるものがある。調査区のはほぼ中央を貫析する谷部にはほぼ同時期の遺物が多量に廃棄されていた。</p> <p>続く主体となる遺構の時期は戦国時代で、周辺調査区で多く確認されている方形区画溝に囲まれる屋敷地の一部が検出できた。</p>							

お お つ か い せ き
大 塚 遺 跡 8

—第18次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1255集

2015 (平成 27) 年 3 月 25 日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711-4667
印刷 有限会社 吉村総合印刷
福岡市博多区博多駅前2丁目3-23
(092) 415-6135
